家庭雜誌

第參拾七號

尼法師　東叡山の朝嵐、斃れて名殘の夢空し。

次男　渠は遂に其强項を折つて、恩人に謝せり。

遠征　身は長白山南に臥し、夢は北京城上を繞る。

自然のおも影　神韻浮動せんと欲する自然！　清光滴らんと欲する自然！

我娘　唯若王寺畔の松風あり。

◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

◎此スコット乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滯リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳菓ハ肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽チ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

◎龍動スコット及バウン謹製

日本一手特約販賣所

米國貿易商會

横濱廿八番
神戸十七番

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコット乳菓

博文館新刊廣告

松居松葉君著

西洋 滑稽落語

全一冊和裝　正價拾錢郵税四錢

がわり合ひまして、かはりはひのあるや否やは、今こゝにいふを須ゐず、奇想は天外より落ち、妙鬼地下に涌く。來年のとなられさ鬼も笑ふべく、詞は上品なれさも佛も相好を崩すへし、かつて讀賣新聞に劇場の逸話をのせて大喝采を博したる松葉子、今また少年諸君のために、這の好笑話を纂む讀まゝ人まづ頤の外れ、臍の落ちぬ要心して掛らるべし

内田不知庵主人譯

めとり

全一冊洋裝　正價拾五錢郵税六錢

露國の文豪トオストイ伯が傑作中の傑作にして最も微密なる夫婦の情愛を描きて眞正なる愛、人〻至樂の何たるを示し一婦華飾社會を喝破して醇厚なる人生の福利を教へ懷疑社會の岐路に彷徨せる妙齡女子の指針を示し世間普通の戀愛小説を打破して別に一生面を開く純潔清靈、家庭の讀本として無比の絶好小説なり

石橋思案外史著

滑稽 小兒四十八癖

全一冊和裝　正價拾錢郵税四錢

世に癖てふものほどをかしきはあらず、殊に小兒の癖に至りては最もをかし。我が國滑稽の改良を以て自任する思案外史茲に見る所あり。得意の筆を揮つて、巧に小兒事實の癖を活寫す。奇景百出、妙想涌くが如く、人をして送迎にいさま無からしむ、世にこれ程をかしき書はあらざるべし。幼年諸君早く一本を購ひて、をかしき程にをかしがり給へ。

阪田霧山人譯

なまけもの

全一冊洋裝　正價拾五錢郵税六錢

獨國文壇有數の詩人アイヘンドルッフ男が幽邃なる詩想と艶麗なる筆とを以て、畫がき出せる「なまけもの」趣向斬新靈妙神變不可思議、庭師となり、收税吏となり、道を失ふて友を得、友を失ふて金を得、古城に身命を危くして、公園に名譽を博し、貴女に辱められて、羅馬を去り、畫工に伴はれて維納に歸り、結局藝が身を助けて、戀人と偕老の契を遂ぐ、其間密かになまけものゝ實相を穿ちて、或は空想に神を飛はし、或は夢現に魂を迷はすなど、叙し去り叙し來て餘す處なく、滑稽洒落の中に、自然眞率の涙を含みて、縱横無盡に寫し出せる好小説、三代の炎熱身を溶かすの折から、一本を求めて窓下に誦き給はゝ、讀一讀妙味愈深く、以て半日の暑を忘るに足るべし

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

十二文豪第一卷 カーライル

平田久著

肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

◎大坂朝日　近世の大文豪トマス、カーライル一生を悉くせり近時の著述著者讀で自ら愧る所を知れ◎早稻田文學　本書は民友社より發兌になる「十二文豪」の先陣としてあらはれたる平田久氏が著作なり著者は嘗て「伊太利建國三傑」を物して傳記評論の伎倆を示したり此篇の希世の文豪トマス、カーライルが一生の事業と其經歷と特質とを趣味ある筆をもて叙説評論し頗る其の要を得たり案ずるに我が方今の社會其の何れの方面に於てもカーライルの如き勇猛の偉人を欠けること久し此の一冊子若し能く幾多の懦夫をして起たしむるを得ば平田氏の功は尋常傳記家の功たるに止まらじ

十二文豪第二卷 マコウレー

竹越與三郎著

肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

◎國會　著者は我國のマコウレーを以て自ら擬する者也宜乎十二文豪中マコウレーを撰びしや、觀察精細文章流麗、マコウレーの精細爲象紙上に活動するを覺ゆ◎朝野批評精彩、能く大勢に通す、文、酷はだマコウレーに似たり◎六合雜誌批評家として歷史家としてマコウレーを論じて精通微達殆ど遺憾なし、其評説亦最も明快切實なるを覺ゆ蓋し平生蓄積する所深きにあらずんば決して此の如くなる能はざるなり、十二文豪の傑作雄篇是より續々として出づべしと雖も此書が必ず其雄篇中の一ならんは余輩の疑はざる所也

十二文豪第三卷 荻生徂徠

山路彌吉著

肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

◎自由　曰く英靈快活津々たる滋味卷を措く能はず◎都曰く先生一代の性行を描き出し殆んど餘蘊なく、照合點綴甚だ妙を盡くせり◎日々曰く著者の温かなる同情と鋭き眼光と快利なる文章とは能く徂徠を寫し得て略々其面目を活現せり◎國會曰く從來の編年的習慣を脫して四方八面より徂徠を見るの活論法なり、古來の漢學者が一髮一爪のみを細微に研究したるとは大に其趣を異にせり、

十二文豪第四卷 ヲルヅヲルス

宮崎八百吉著

肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

◎讀賣　就中湖畔詩人及び其の閑居、家庭の如きは作者が最も繪畫的なる筆法を以て精彩に叙述したれば讀者をして讀去るの中恍々然として彼のヲルヅヲルスと共に相提携し湖國のほとり山影水聲に起臥して樵唱牧歌を聞き概蔭石邊に優遊して歸雲飛鳥を眺め心靜に胸寛に自然造化の幽妙に化せられんとするの感あらしむ

十二文豪第五卷 ゲーテ

高木伊作著

肖像入 定價拾八錢 郵税四錢

◎東京日々新聞　著者のゲーテを畫くや幼年少年壯年老年の四期に分ち其性行其氣品其學問其事業を叙

し盡して餘蘊を殘さずゲーテ氏の面目躍如として一篇の中にあり文章亦甚だ精練にして著者の苦心を見る苟くも文學に志あるもの此大詩人に私淑して遺鉢を搜るべきなり

北村門太郎著

十二文豪第六卷 エマルソン

肖像入
定價拾八錢
郵税四錢

◎國會 エマルソン氏が主我の精神に富めるは之れを氏の言行に見て徵するに足るものあり著者氏を評して彼は王陽明の思辯を以て陶淵明の幽寂に身を置けりと云ふ先づ我が心を獲たり若し氏にして知るあらば亦應さに地下笑を含み三千里外一少壯の知己を得たりと言ふなるべし ◎都 エマルソン其人の生涯を叙したるものなれば其の事實は何れも一讀再讀の價値あり若し書を讀んで快樂を取らんとするもの此編に對しては先づ草鞋かけにて箱根の七湯に遊ぶ覺悟なくては適はず其の道中には隨分難所あれど其代りに行く所まで行けば興味湧き來つて手を拍つの快あるべし

内田不知庵著

十二文豪號外 ジヨンソン

定價廿錢
郵税四錢

●十八世紀英國文學界の眞誠男子硬骨なる文豪ジヨンソン氏の性行實歷を叙したるものなり故に本書を見ればジヨンソン其人を想見すると共に英國十八世紀の文學をも概見するを得るなり操觚者たるもの一本を坐右に具へざるべからず(毎日)試みに讀み去る吾人は未だジヨンソンの生涯を盡したりと認むる能はず然れどもジヨンソンの行實は稍々寫し得たりと信ず今の文學に志す者幸に之を讀んで身の程を知れ(めざまし)

竹越與三郎著

再版 支那論

定價十錢
郵税二錢

支那征伐の師已に出で、國民の公憤已に沸騰す。此時に方つて吾人何故に支那を擊たざるべからざる乎と問ふ者あらば、豚奴斬るべし、無禮許るす可らずと客氣に逸る者の外、沈重冷靜、眼を大局に放つて、觀察するもの果して幾人かある。此書は國家生存、人種競爭、產業擴張、文明宣傳、東洋革新、及び『世界に於ける大なる日本』建設の點より、征清の已むべからざるを觀察し、日本國民が云はんと欲して云ふ能はざる、胸中の奧秘を闡明するのみならず、亦た戰爭の將來を慮り、戰後の要償を豫示し、而して事局を結ぶの策として外交上の大策を畫す。一たび之を讀まば長蛇の如く世界を蹂躪せんとする清國の形勢、鷲鳥となりて之を擊つ日本の位置、之によりて東洋と云はず世界の地圖を一變して『大なる日本』を世界に生ぜんとするの形勢、歷々として掌中に指さすべし少なくとも政治家以上の觀察也。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

平民叢書完結廣告

平民叢書 第十卷
白晳人種の前途
定價拾二錢
郵稅　二錢

目錄⊙緒論⊙第一人種◎(一)世界は白晳人種の專有たる可き乎◎(二)濠洲の勞働問題◎(三)亞非利加に於ける白晳人種◎(四)支那人及印度人◎(五)亞米利加に於ける白晳人種◎(六)世界は白晳人種の專有たる可き乎⊙第二、社會◎(一)膨脹の停止と社會の變革〇一、未開人種の驅追と文明の壽命〇二、過剩人口の處分と國家社會主義〇三、將來の社會的狀態◎(二)文明社會の危險〇一、軍備及戰爭〇二、大部府の生長〇三、公債の增加◎(三)國民的精神〇一、國民的精神の必要〇二、國家と教會〇三、國民的精神の發達⊙第三、家族◎(一)家族專制◎(二)個人主義、家族主義及び國家主義⊙第四、品性◎(一)國家社會主義の影響◎(二)將來の宗教◎(三)將來の科學◎(四)將來の文藝◎(六)社會の老齡

本書に對し各新聞批評

◎原書は國民的生活及品性と題する書にしてチャールピーアソン氏の著に係る其說く所白晳人種が日一日衰亡に近く所以を論證するに在り引例該博筆鋒縱横眞に光焰萬丈の態あり抑西人の文明に誇る久し而して實は老齢逼迫するを知らず本書の如きは實に攪眼の曉鐘と云ふべき也其議論の順序を摘記すれば第一人種の題下に世界は白晳人種の專有たるべき乎の疑問を起し第二社會の題下に膨脹の停止と社會の變革文明社會の危險國民的精神を論じ第三家族の題下に家族專制個人主義家族主義國家主義を說き第四品性の題下に國家社會主義の影響と將來の宗教科學文藝より說入て白晳人種の社會は老衰退弱の象を呈せるとを斷證せり（日々）

◎民友社の平民叢書は此れを以て最終とす蓋し十卷の書大抵有用にして近代思想の傳播に力ありしは疑ふ可らずして就中此書の如きは極めて有用必讀の書と云はざる可らず蓋し邦人の人種的競爭に注目せざるや甚だしく談此等の事に及べば耳を蔽ふて走らんと欲す此書の說く所は頗る高遠なるも文辭流暢にして解し易く讀者をして諸問題中にも大なる人種的問題を解せしめ併せて他の一面に於て日本人が前途の多望なるを自覺せしむ余輩は片々たる小說稗史を讀むを已めかゝる有用なる書籍を讀まんことを世人に勸告す著者は民友社中の一才筆家深井英吾氏定價僅々十錢（金城新報）

◎第一卷	十九世紀之大勢	定價十二錢　郵稅二錢
◎第二卷	世界經濟上之變動	定價十二錢　郵稅二錢
◎第三卷	國家と政府	定價十二錢　郵稅二錢
◎第四卷	教育と遺傳	定價十二錢　郵稅二錢
◎第五卷	文明之弊及其救治	定價十二錢　郵稅二錢
◎第六卷	現時之社會主義	定價十二錢　郵稅二錢
◎第七卷	經濟と道德	定價十二錢　郵稅二錢
◎第八卷	歷史攻究法	定價十二錢　郵稅二錢
◎第九卷	哲學變遷史	定價十二錢　郵稅二錢
◎號外	銀貨之過去現在未來	定價十錢　郵稅二錢
◎號外	責任內閣	定價十錢　郵稅二錢

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

三版

家庭叢書第一卷

家庭の和樂

定價十錢
郵稅二錢

●平民叢書位の小本にして携挈に利便なり民友社の諸子が信ずる所を表白せんが爲め書籍を作るに鋭意なる且つ發刊の機を見るに敏なる頗る賞すべきあり（日本人）●和樂且樂如鼓琴瑟若し此語をして國家の內部に行き渡らしめば謂ゆる治國平天下の績亦擧げ得べし家庭をして清淨ならしめ和樂ならしめ剛健ならしめ廉潔ならしむるは國家敎育の根本と謂はざるべからず善し民友社の此點に着目して家庭叢書を發兌するや吾輩は如何なる方法を問はず國を愛するの感念を含有せしめば家庭の和樂を說くは則ち國家の治平强大を希圖するものと言ふに躊躇せざるべし（日本）●平易の文字を以て家庭の要義を述べたるもの間挿むに畫を以てす此種の書尤も婦人家庭の訓戒と爲すに足れり（中央）

再版

家庭叢書第二卷

夏の家庭

定價十錢
郵稅二錢

●夏之家庭は家庭叢書第二卷として發行せられたり躰裁の瀟洒記事の淸健共に家庭の眞友として十二分の價値あるを信ず（新朝野）●民友社家庭叢書の第二卷として出でたるもの避暑午睡漁釣海水等總て夏期の快樂を收めて此中に在り日々九十度以上に上れる炎塵萬丈の底試に取て之を繙けば淸風一陣來りて其塵を拂ふものあり（東京朝日）●種々の消夏法を記したるものなり涼氣紙面に溢る但し庭に水撒きて晩酌の杯を擧るの快を談せざるは何ぞや著者は下戸なるが爲め乎果して然らば文人としては正直に過ぐると云はざるべからず（經濟雜誌）●去年民友社に於て募集なる避暑法の大要を夾み前後に家庭の避暑と山川海濱の避暑を叙述せり吾等は著者の指道に從ひて家庭の避暑法を講せんのみ（敎育時論）

家庭叢書
第三卷

玩具と遊戲

定價十錢
郵稅二錢

●無邪氣で可愛らしく、有益で面白く、樂くで愉快なるは、家家叢書第三卷なる玩具と遊戲なり、虛と思ふ者は讀んで見る可し（めざまし）●家庭叢書第三卷にして兒童遊戲の利害を汎論して可也開發的なるべきを說く玩具遊戲を進步的道義的社交的審美的職業的安全的勝負的躰育的の各種に別ちたるは精細と謂ふべし（日々）●玩具と遊戲は無害にして興味ある遊技の種類と其方法とを說明したるものにて家庭に備付けて面白きものなり（時事）●例の東京民友社の發兌にして一握みの小冊子なりと雖も有益なる小兒の玩具と遊戲とを面白く說明したるものなれば家庭の慰を此內より求め得べし（都）●家庭叢書第三卷は幼者の智能を開發すべき玩具及び遊戲を說き盡して復た餘蘊なし譬へば老婆の飴を含んで稚兒に物語るが如し（國會）

發兌元　東京々橋區日吉町　民友社

英國現總理大臣ローズベリー伯原著
高木信威纂譯

再版 ピット

肖像入
定價二十錢
郵税四錢

各新聞の批評

●高木信威氏の纂譯にて英國政治家ピットの一代を叙したるもの文章は例の德富流ゆえ雄渾として誦すべく叙事評論最も精逸、啻だピットの心胸面目を知るに足るのみならず側面より英國四十年間の奇變多かりし歷史を察すべし（中央）

●サッカレーの所謂曠前絶後の萬能男子ウヰリヤム、ピットの生涯を知らんと欲せば先づ本書を讀んで可なり是れ現英國の主相ローズベリー氏自ら其腦漿の幾分を割ちたるピット論を基本として編みたる者未だ必すしも間然する所なしとは言はず何となれば曩きに土岐某氏の譯述にかゝる經國龜鑑といふ者あれば也（一二六）

●二十四歳の總理大臣ピットは、議院政治家の摸範也、典型也、今の所謂政治家を以て任ずる者、幸ひに讀んで鑑みる所あれ

●代議制の世界に創立せられて以來未曾有の長命内閣はピットの内閣なり而も其長命を持續したるは無理遣りの手段に出でたるにあらざるは大に範とすべきなり伊藤内閣の治下に立つ國民は參考の爲め一讀ずべし（讀賣）

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

社告

家庭雜誌は凡て前金に非ざれば發送せず、見本は郵券五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵劵代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割増

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税
一冊	金五錢	金五厘
半年（十二冊）前金	五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）同	金一圓	地方共 金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番
發行兼印刷人 有馬俊彦
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十七年九月十日發行

家庭雜誌第參拾七號

目錄

日清交戰錄

東洋の大風雲は眼前に迸りぬ其實勢を論じ其實景を描くもの は誰ぞ日清交戰錄は其戰況を錄し讀者をして千軍萬騎騰蹴の中に在つて「パノラマ」を觀る想あらしむる活歷史也卷中の目次八欄あり筆力雄快鋒鋩凌厲愛國の大感情を鼓舞作興す而して此雜誌は新聞紙の如く一時限の事にあらずして不朽に垂る可き戰爭史の活大寫眞也幸に愛讀を賜へ

目次

評論 は議論雄大筆力沈痛東和の大計作戰の計圖に向て萬丈の光焰を吐く

戰紀 は千軍萬馬騰蹴の狀を描き盡し或は正奇出沒或は虛實出沒讀者をして戰塲に馳驅するの想あらしむ

兵事 は東洋各國の兵制兵力を詳にし

經濟 は戰爭に關する商機商略を明かにし

電報 は戰爭に關する矢の如き飛電を網羅し

時事 は寸鐵殺人の筆を以て現在の時事を評し

雜錄 は趣味ある隨筆的文字歷史的逸話を掲げ

日記摘要 は時事の出來事を撮む

毎月六回(一六日)發行 明十一日第五號發行

一冊實價四錢五厘十冊前金四拾錢郵税一冊五厘宛

郵券にて御注文の方は一割増但し五厘切手を限る

毎巻小川製寫眞版を添へ紙數六十餘頁あり

紅葉山人著
江見水蔭著

紫琴

水野年方畫
菊版美本
實價卅錢
郵稅六錢

正直正太夫著武内桂舟畫

小說 見切物

全一冊
菊版美本

是亦紙屑の上へ繪具皿をぶちまけたるもの題して見切物と云ふと雖ども夜店の李大根にあらず一山百文と申しては本屋冥利に盡くることあるべし依て餘儀なく實價三十錢を申受く郵稅六錢なり

忍月居士著武内桂舟畫

蓮の露 全

實價三十錢
郵稅六錢

在朝鮮久保田米僊君畫同冊瀨軍之佐君著

朝鮮時事

附朝鮮國王、大院君、袁世凱等肖像入

菊版美本二百頁餘
實價卅錢郵稅六錢

朝鮮の現狀は敢て詳述するの要なし、而して此現狀を知り、此現狀の及ぶ可き處を知り、及び朝鮮の政治、法律、社會、風俗、慣例等を知らんと欲する人は須らく本書を一讀するの必要あるべし、幸ひにして著者は再び朝鮮に航して朝鮮の世情に精通す、其艷麗の筆、徵細の察、添ふるに畫伯久保田米僊君の**寫眞畫卅餘箇**を以てす、若夫れ今日の際是を繙かは身は恰かも朝鮮に入るの想あるべし

發行所 東京日本橋區通四丁目電話五十一 **春陽堂**

中付の一

水むし但しいとかせまゆかぶれ一夜にて速治保證良劑　定價金三十錢



特約弘賣所

大阪市道修町三丁目　賣藥卸商會社

神戸市元町通五丁目　精々藥館

名古屋市本町四丁目　土屋惣兵衛

甲府和泉町　父母の屋金造

信州上諏訪上町　久保田力造

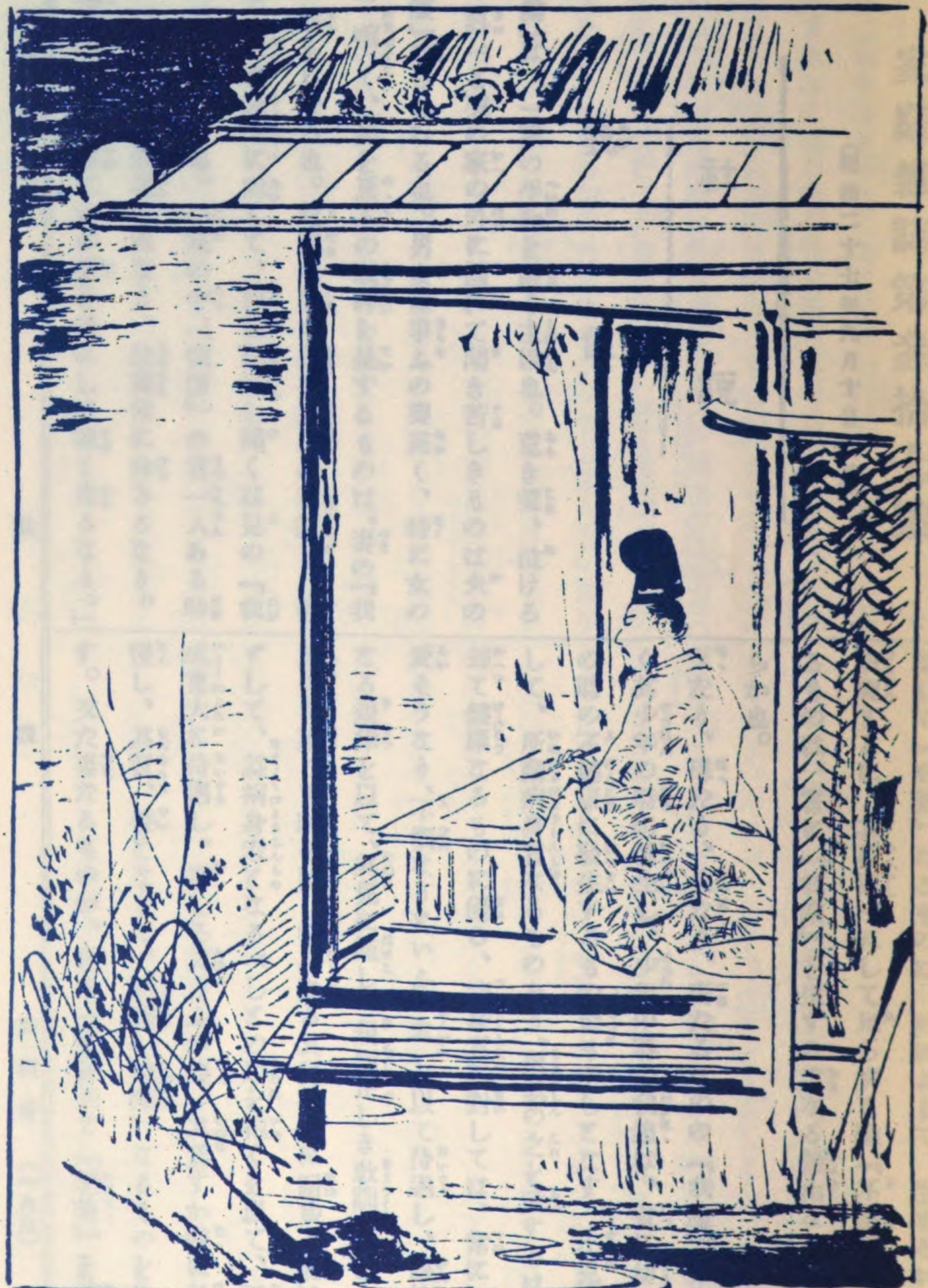
同松本町　一喜印　上條由兵衛

水戸上市泉町　加納與右衛門

上州富岡　一韮塚直次郎

仙臺市南町　後藤蕉南堂

右の良劑は賣藥部外○全國到る處の藥舖賣藥店に於て販賣仕候間最寄にて御購求を乞ふ又販賣御望み之諸士は御申越次第便利に取計候間弘賣願上候



家庭雜誌第參拾七號

（明治二十七年九月十日發兌）

社説

我儘

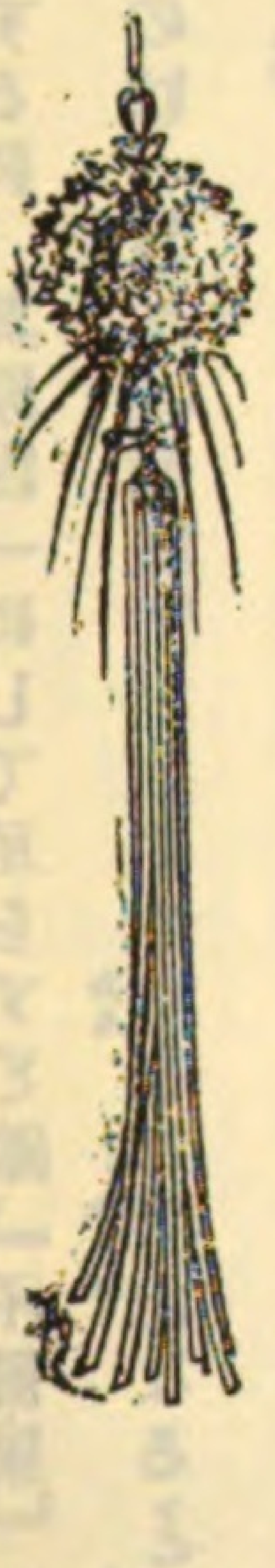
『我儘』は、一家の平和を破る主因也。荒き聲、泣ける聲、叫べる聲の家の外に漏れて聞き苦しきものは夫の『我儘』然らしむる也。男女は爭ふの聲高く、特に女の聲の喧く、男を罵るの醜躰を呈するものは、妻の『我儘』然らしむる也。叱責の聲と與に返白の聲鋭く、善良なる説諭敎訓に對して、怒罵泣喚を聞くは兒の『我儘』然らしむる也。一家の中、『我儘』の者一人ある時は、一家は常に涙乾かぬなり、泣聲常に休さるなり。幸福と平和は、常に此の家を後にして遠く走るなり。

而して『我儘』なるものは、何によりて、生ずるかを研究するに、其原因一にして足らずと雖、『不健康』なるものは、實に『我儘』を生ずる重なる源由なると明らか也。

父たり、母たり、夫たり、妻たるものの『我儘』は多く其少年の時に發生し、少年の時の我儘は、實に幼年の時の不健康に發生するもの最も多しとなす。小兒にして、所謂病身者なるものあり、兩親の之を愛するは、却て健康なるものに優る、病身者に對しては、常に可愛そうなり、不憫なりといふの考を以て待遇し、嚴格なる規律を以て、其兒に施し、規則正しき敎訓を以て、其兒に施こす時には、病身なる其兒は之に耐ゆる能はずして、益病身者となるべしとの恐を抱くを以て、可成寛大に待遇し、寧しろ其言ふか儘、其爲すか儘に放慢し、其習、性となりて、所謂『我儘』なるものを生す。又た妻たるものが、往々一家に於て『我儘』を爲

すに至るもの、亦夫たるもの、妻の多病なるを不憫に思ひ、餘りに可愛そうに思ひ、敎訓を以て之を律する能はずして、其情意の氣儘なる發動に任かせて之を制するなきより之を致すもの多し。即ち『我儘』なるものは弱き者を憐れんで、之か敎訓を怠るより生する者也。弱者を憐むは人の情也、父母の子に於ける、夫の妻に於ける、更に甚たしきものあり。而して過失は憐愛の過甚なるより生する也。即ち『我儘』は憐愛過甚の結果也。故に若し『我儘』なるものを一家より逐はんと欲せば、先づ一家の健康に向て全力を盡くさゝる可らず。即ち子に於ても、妻に於ても、躰力健康なれば、心情亦從て健康にして、嚴重なる敎訓、嚴格なる規律、嚴重なる責罰を以て之に加ゆるも、可愛そうなりとか、不憫とかいふ如き脆き情を動かすの必要なき程に健康ならしめさる可らず。然る時には、父母夫婿は、一家の家憲、自個の訓諭をば、十分に妻子に適用するを得て、『我儘』なるものを生する憂始めて消滅するを得へきなり。

若し周到なる注意を以てして猶ほ不健康なる時には、是れ詮方なしと雖、不健康のもの、即ち病身者に對しても、可成健康なるものに對すると同樣の敎訓を施こさゝる可らず、病身者なるか故に可愛そうなり、不憫なりとて、遠慮するは、一時病身者を活かすが如くして、實は永久に之を殺ろすものなり。之を要するに、一家の平和幸福を保たんには、『我儘』なる分子を除切せざる可らず、『我儘』を除切するには、一家の健康を計らざる可らず、而して之と同時に病身者を憐愛するの過甚なるを謹まざる可らざる也。



科學

塵埃の奇談

此の塵溜箱が！中には骨と、繿縷と、がらずの碎片と、蝸殼と、葱の根と、灰と、紙屑と、破れたるもの、腐れたるもの計りなり。とは百人中の九十九人迄は言ふべけれども、此の塵を問屋へ持ち行かば、其内より、幾十圓の金子を見出だすべし、もし人々が問屋的の目を開きて、凡ての塵を見たらんには、詩人は云わん『オ、嘗て神仙國にて、夢みしゆめよりも、奇態なり。』學者は云わん。『繿縷切れ骨碎の中に、金の穀物と花菜あり』と、若し細まかに塵を試驗せんには、最も廢物と思へる、最も小さき一つすら、驚くべく『將來の運命』を身に負へり。好しこの『將來の運命』を人間の智識が、利用することを得ざるとするも、自然は人に代りて働たらき、一つたり共、無駄に終らしむることをゆるさゝるべし。

塵のために、幾多の人は死せり。死せんとせり、死しつゝあり、死すべくあり。然れども若しまた、塵なくば、雲も、雨も、霧もなく、光もなく、海水の色もなく、遂に我等は、太陽の光線を見ることを得ざるに至るべし、

其塵とは何なりや

塵とは何ぞや、また何處より來るか？

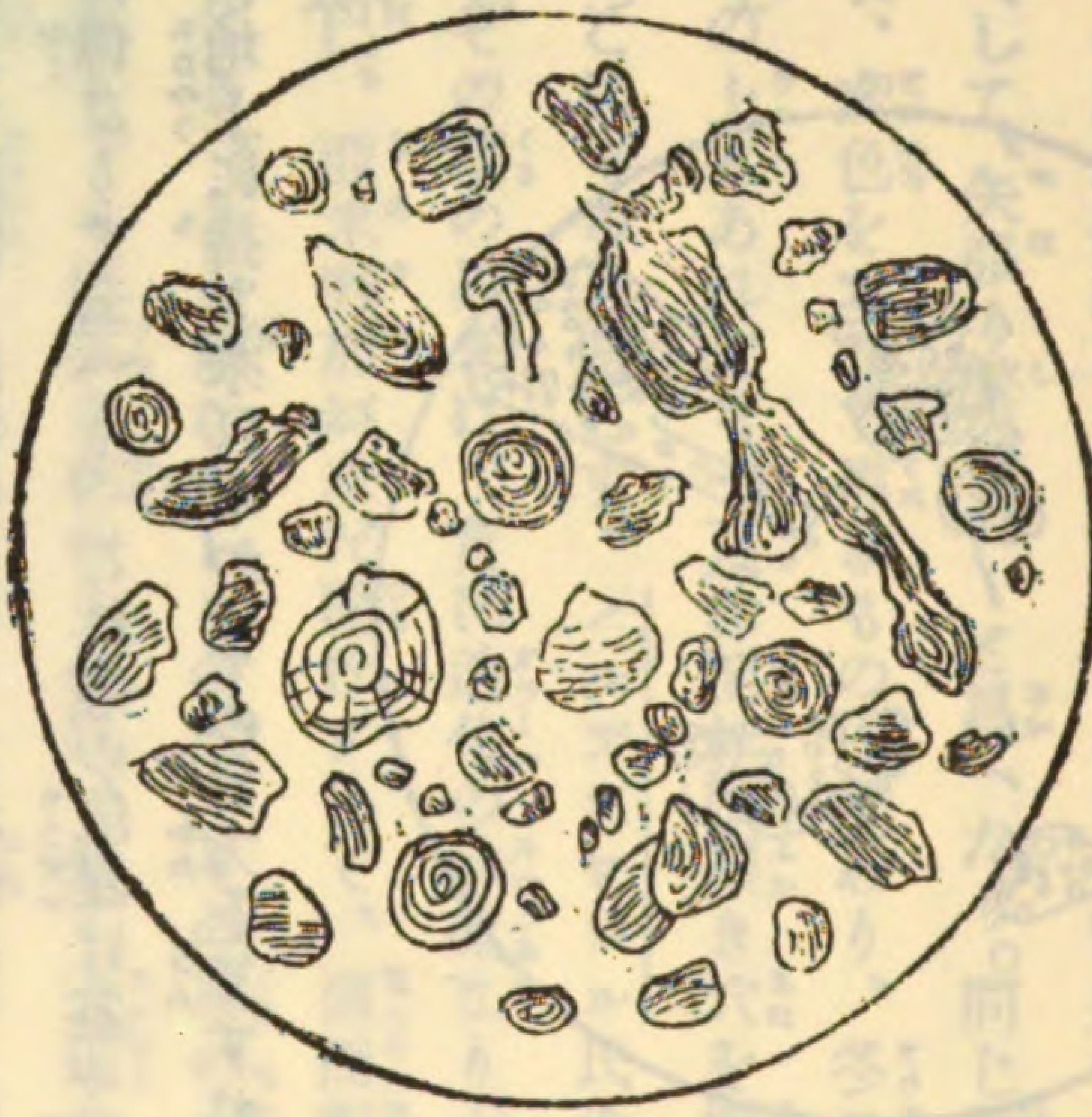
家の内にては、下女の箒より、妻君の袖より、椅子卓子を動すより、小供のおもちやより、夜具、敷物、縫いもの書物、戶の開け、閉て、凡てのもの之れを作るの原因となり。我等が健康躰にて生活する上は、蛇や、蠶の皮と全じく、身躰の皮のむけ去るとき、身躰を搔く時、衣物を着更ゆる時、常に塵の一部をつくりつゝあり。しかして、この塵の多分は、機械しかけのあるもの、

即ち有機物なるぞ不思議なり。コレラの虫、風邪の虫、黑死病の虫、肺病の虫、大低の病氣には、バクテリヤと稱する一種の虫あり。その虫は常に此の不潔なる、暗黑なる人々の呼んで塵と稱するもの丶中の多分を制せるなり。

塵の中にも輕ろきものと、重きものとあり。輕ろきは浮かんで空中に上がり、重きは下りて疊の上、床の上、物品の上に、積もる。天氣の時、太陽の光線の入りたる室内を眺むれば、如何に美しく掃き立てたる室にても、舞ひつ丶ある、小さき無數の塵あるを見るべし。久しく据へをける簞笥、長もち等を、動かす時は。後には綿の毛、けつとの毛、髮、其他何ともわからざる小さき屑の積れるを見ん。これ知らざる間に出來つ丶ある塵の積れるなり。

家の中にある塵みも、家の中計りにて作られしもの丶みにあらず。殊に繁華なる市中等にては、車のすれ合ひ、下駄、駄、靴の蹈み跡、風の吹く折、凡て塵を作くりて、家の中に吹き込むなり。その證據には、祖父の時代には、角ありし玄關の庭石、孫の代に至る迄には、下駄の磨擦のために丸くなるとあり。西印度のドックスと云ふ處とホワイトチャーペルと云ふ處の間にある堅固なる花剛石は、四十年の間に、誰觸る丶となく、三寸計を減せり。井戶かわの石が、下女の袖に觸れて減り、手桶盥の類が、用ゆる中に小さく低くなる事は、親しく人々の見る處なり。されば塵の中には、石もあり、鐵もあり、紙もあり、布片れもあり、毛もあり、千種萬別殆ど分かつべからざるなり。今試に磁石を家内に居く時は、塵の中の鐵氣は、悉とくこれに引かれて吸ひ付くを見るべし。これ重き荷車の輪より、馬の足の靴より、貴婦人の指輪より、庖刀より、釜よりペンの先きより、大工の道具より、少しづ丶減じつ丶空中に飛び廻りつ丶ありしものなり。然れども

世界の塵の中には人の作るより、外に自然の作もの亦多し。塵り溜め箱に頭を入れて、一々驗ぶる時はその證據を見るに難からざるべし。自然に風の持ち來りたる木の葉、貝殻、虫の死骸、是れ等を除くとするも、彼の雨、霜雪等がせわしく岩の上を打ちて穴を作り、屋根の瓦をたゝきては、煙硝の如き細粉を作り。川の水が石を磨しては、角なるものを丸くし、海水は貝を砕き、風は木を打ち恰かも百萬の兵士



第一圖

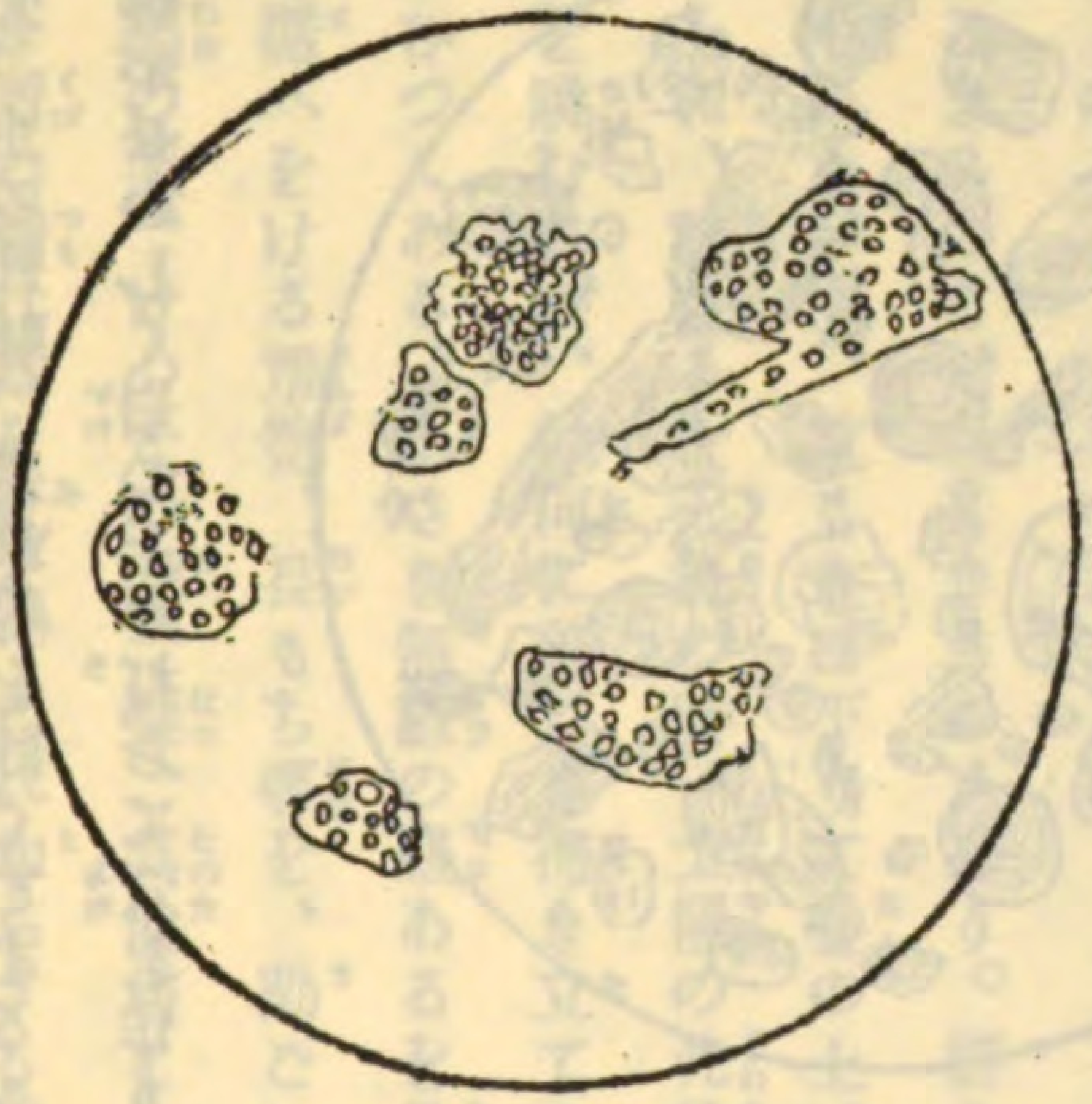
が、絶へず働ける如く、世界の塵埃製造人は一時も休すむ暇なし。

第一圖は流星の持たらし來たれる塵なり、流星は人々の知るごとく可燃性の物質が、天空を飛ぶ際に、空氣に觸れて光りを發し、地球の引力に引き付けられて下るなり。第二圖に示めせる不思議なる形を爲せる物質は、即ち流星の正躰を顯微鏡にて見し所なり。有名なるアメリカの天文學者は、毎日地球



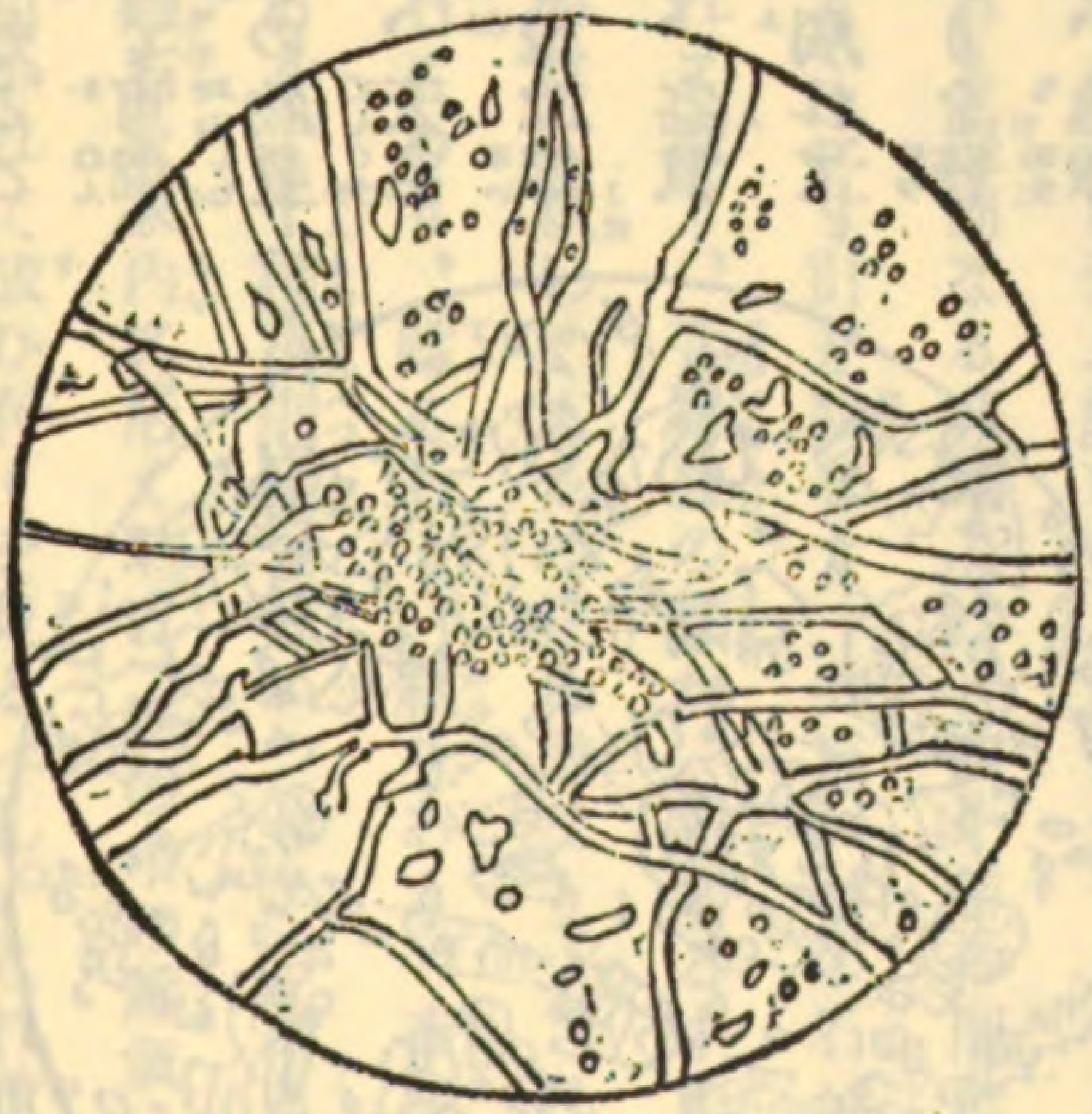
第二圖

に引かれて落ち來る大小の流星の數は、肉眼にて見ゆるもの七百五十萬個、顯微鏡にあらざれば見得べからざるもの四億なりと云へり。これ等の流星は益々細末を伴なふに地上に持ち來れるが、その目方を算すれば、一日の平均數二三貫目を缺かずと云ふ。學士ノーデンスショールド氏はこれよりも尙ほ多しとせり。道や、畑に、落つる流星の燒がらは、土と混ずるが故に、容易に別つを得ざれども、雪の絶へずある所に至り、其の雪の上に落ちしものを計る時は、容易に計る



第三圖

を得べし。氏の説に隨たがへば、世界中に一年間に落來る量は、千四百萬〇〇〇〇貫目なりと云ふ。第三圖と、四圖とは、共に雪の中に落ち來りし塵を、五百倍の顯微鏡にて、見し處なるが、三圖は雪の中に見し有機質にして、四圖は全く植物質なり。北極に近かき諸國にて、赤雪と云ふものあり。之れは雪氷の上に生ずる一種の植物にして、夏時初じめて生ずるときは、桃色を呈し、それより漸々擴がりて數里にわたることあり、獨り北極地方のみならず、アルプス、



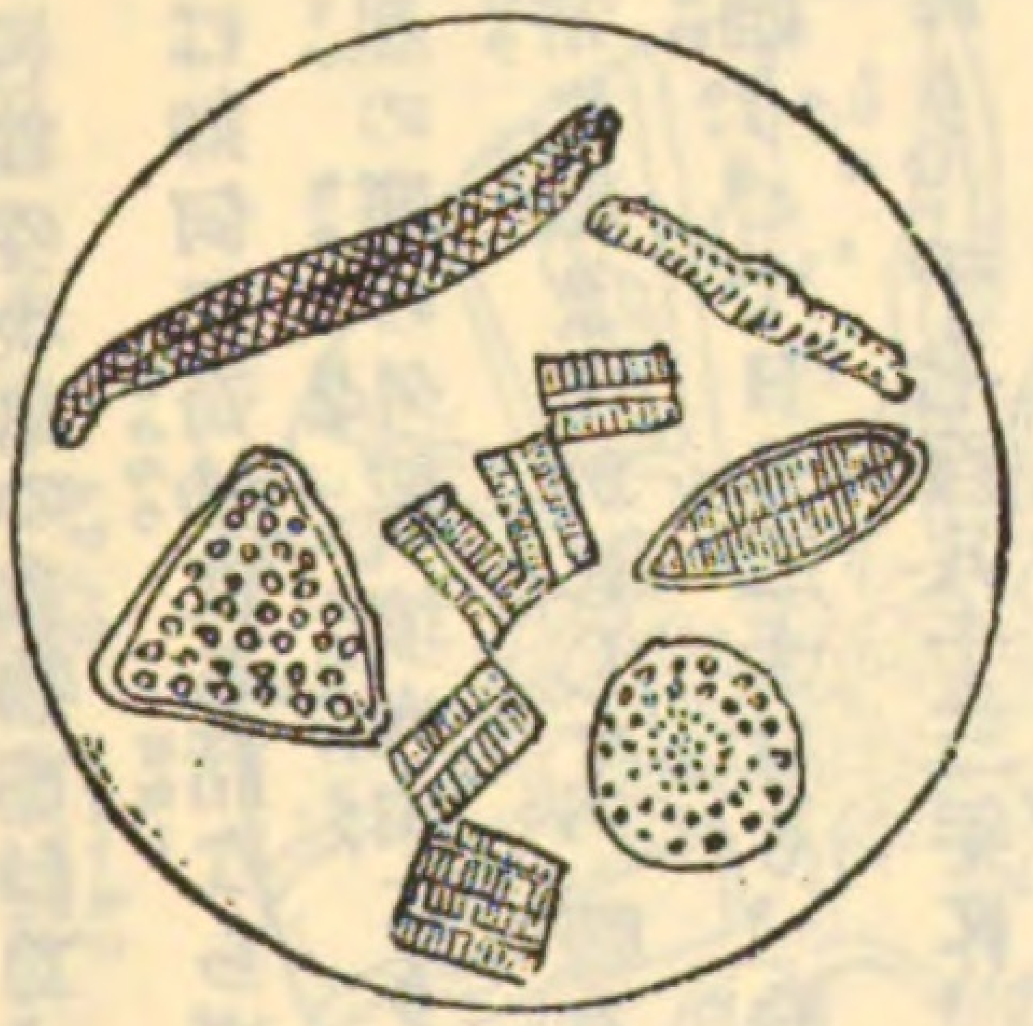
第四圖

フヰリニース、或ひはカリフオルニヤ等には、しばしば見受くる處なり。此の最下等植物は、極わめて强固なる生命を保もち、如何なる高温度、如何なる低温度に遇わしむるも、中々に枯死せず、或る時之れを取りて、華氏の二百十二度熱度に遇わしめ、更らに零度以下の最下低の温度に遇わしむるも、少しも繁殖力を減ずることなくして、矢張り繁げく／＼と昌へたり。同じ種類の草にして、鳶色をおびて黒きもの一種あり、冬日は氷りたる雪の上にあれども、夏に至れば深き穴を掘りて、自らそこに下るを常とす。ノルデンショル氏の說によるに、その草の黒きは、實に造化の妙案なり。その昔し歐羅巴、亞米利加が未だ開けずして、滿面雪の世界なりしとき、そを解かせしものは、その草の力大に預づかりたり。そは黒き色のものは、多く太陽の熱を引きて、雪を溶解せしむるの力あるが故なりと。夏時に至りて、此の草が、深く雪の下に下だるも、その力によるものなり。たゞにそれのみならず、この草は雪の上に降り來たれる流星の燃へ屑を食して、已れ更らに他の小虫の食物として、欠くべからざる品と化すとは如何に奇妙なる話ならずや。

流星の塵の外に、噴火山より出づる塵あり。此の塵は、非常に細まやかにして、輕ろきが故に、高く中空を飛び廻り、十日も二十日も、時に一ヶ月も地に落ちざることあり。千七百八十三年に、スカプターの噴火せし時は、一ヶ月の間、アイルランド全島暗黒にて、その塵は遠く英國、及び歐羅巴の北部に渡たり、爲めに霧は空を覆ほひ、日の出、日の入の景色、凄ごき迄、白く見えたり。千八百八十三年、ジヤバの噴火の時は、格別甚だしくして、數千萬貫の塵空中に飛び、數里の間は、全く暗夜の如く、太陽の光線を見ること能はず。それのみならず細微のものは高く貿易風の通ずる所に達し、赤道直下迄及びしが、其間の里數を算せしに、百

五十里の遠きに達したる勘定なり。且つその年の秋より、冬に至る間、殆ど世界の至る處に、奇態なる雲の様のもの、或は見へ、或は隠れ、美しきが如く、恐ろしきが如くなりしが、こは全くジナパの噴火灰の一群なりき。其噴火せしは、年の八月なりしが、それより彼處、此處を飛び走りて、英國にて見へしは、年の十二月九日、それよりベルリンに顕われしは、十二月二十九日より三日間にて、高さ四十哩の天空にありしと云ふ。

更に海中に生ずる一種の塵あり。之れは太西洋の『赤霧』、もしくは『北海の塵』と名づけて、有名なるものなり。『南歐洲の熱風』と呼ばるゝも、亦た同し性質のものにして、こは『流星の塵』、『火山の塵』とは、一種特別のものなるが、其遠方迄旅行するとは、また甚だしきものあり、ダルビン氏の談によるに、ジヤゴーの沖合を通行の際、一日奇態なるとありき。そは俄かに煉瓦色の霧の如きもの、海上に満ち、日中と雖も、一里の先きを辨ぜず、人の目を害し、凡ての機具を埋めしめ、船の進行するの道もわからざれば、岩にのり上げんとを恐れて、道を轉じてベルド港と、近くの群島との間を通りて、逃げんとせしに、此の處は陸より三四百哩もある處なれども、塵は矢張少しも減せず、或る時は少しく大きく、或る時は微細にて、僅づかに濕ひたる海綿を以て拭ふにあらざれば、去るを得ざるとありき。その距離より云へば、陸より隔たゝると實に千七百哩の沖なりしと云ふ。



第五圖

第五圖に示せるは即ちその塵にして、こは何ものぞと尋ぬるに、その一部は鑛物質にして、一部は有機物なり。此の有機物は多く淡水海水共に生育し、

アフリカより來るもあり、又たオリノコ、アマゾン河等より生ずるもありて、殆ど羽毛を以て飛ぶかと疑ふべきもの少なからず、塵のことを委しくしらぶる時は、尙ほ〳〵奇妙なるものを多く發明すべし。そは次號に説かん。

史談

修羅場裡の天使（中）

（ナイチンゲール女史の事蹟）

實行の前には準備あり。此世に於て、善事と雖ども亦容易に爲す可からず、否善事尤も其準備なかる可からず。天性自づから其傾向を有して生れ來りしナイチンゲール女史も、クリミヤ戰爭に其實力をあらはせし前には、殆んど十年の準備を爲せり。

去る程に富裕なる英國田舍紳士の家に生れて華奢安逸渾て意の如くなりし女史は、此等のものを塵よりも輕く棄て去りて、遍く世の苦痛者疾病者の友たらむと、先づ英國各所の病院を訪ひ、千八百四十四年更に資を齎らして英國を出立し、歐洲諸國を歷遊して各國の病院及看護制度を仔細に觀察すること殆んど十年に及べり。千八百五十一年には一看護婦となりてライン河畔カイザルウエルトの病院に入り、當時歐洲隨一の看護法の達人との評ありし同病院看護婦長の下に就きて、一年が間非常の勉强を以て其業に從ひ、尋で日耳曼の諸方及伊太利佛蘭西を遍歷し、英國に歸りて倫敦の一病院を整理す。此十年間は實に女史が其力を養成し準備を爲すの時なりき。女史曾て人に書を與へて曰く、渾て一の事業に就かんと欲する妙齡の淑女諸君に向つて余は一言を述べんとす、男子が其事業の準備を爲す如く諸君も亦先づ其事業を爲すの資格を作れ、然らずして事業を爲し得るなどゝ思ふ勿れ、亦諸君若し男子

の事業を爲さんと欲せば、女子の特權―不精密荏弱等の特權を貪求する勿れ、諸君自ら事務の法則に從へ、男子の爲すが如くに從へ、諸君は是に由て初めて上帝の事業を成功せしむるを得む、何となれば上帝は未だ曾て不十分と粗略未遂の事業に其成功及祝福を與ふ可しと宣ひしことあらざれば也」と。數句實に女史を表し得て明白なり。病院に在て女史を識れる人曾て女史を許して曰く、彼女は天鵞絨の聲と鋼鐵の意とを有する人なり」と。知る可しナイチンゲール女史の成功は、十年の準備先づ其資格を作り、事務的伎倆及鋼鐵の意志以て之を進捗したるが爲めにして、徒善は決して女史の成功の原にもあらず、亦渾ての慈善博愛の事業の原にもあらざることを。

準備の後に實行あり。十年の修練今や大に發揚す可き時は來りぬ。東歐にクリミヤ戰爭起れり。

クリミヤ戰爭は猛鷲の如き露國が弱小なる土耳其を凌ぎて南下せんとせしを、英佛二邦各其利害の關係より亦幾分か義侠の心より、土耳其を扶けて露國を抑へたる戰爭にして、千八百五十四年の春に起れり。此戰爭の初めに於て、英佛の聯合軍は近世史に著しき武勇の働きせしも、運送不便監督不屆の爲め、糧食は欠乏し、加ふるに陣營の衛生足らず、食なく衣なく薪なく適當なる病院看護者なきが爲めに、健康なる者は病み、病みたる者は死し、陣中は一大疫病窟となり。戰に臨むでは勇むで大砲の口にも立つ勇士も、片端より蠅の如く死し去り、あはれ遠征軍中には死の使の暴れ廻るとぞ見へける。歴史家の記せる所によるに、クリミヤ戰爭中死亡者二萬〇六百五十六人の內、戰死者の纔かに二千五百九十八人にして、一萬八千〇五十八人は實に病院に斃れたる者なり。或は一大隊盡く沒し去れる者あり。或は一隊の中僅かに七名の健康者を剩せるあり。或は唯三十人を剩せるあり。病者傷者を運搬する、

に、四人の中一人は必らず死し、手足の截斷を行へる傷者の中、五分の四は死せるものあり。實にクリミヤ戰爭初七ヶ月の間に死亡せる兵士の數は夥しき者にして、若し此割合にして進まば、征討の全軍は一年半にして死し盡す可き有樣なりき。此等の事實英國に知れ渡るや、國民の悲憤羞耻は限りなく、皆東方の天を望むで涙を流し胸を拍ち救濟を叫べり。

クリミヤの慘報は英國三千餘萬の心臟の鼓動せしめたり。彼等は皆救濟を叫べり、處置を促せり、然れども爲す可きの道を知らざりき。此時に當りてクリミヤの慘報に尤も胸を拍たれし一人、此慘憺たる報道に於て自個の職分の大道を見出せる一人は、忽然として暗黑の裡より起ち、時の陸軍大臣シドニーハアバアト氏に一通の書を寄せて、自からクリミヤに赴き病院整理衞生監督の任に當らんことを申し出でぬ。十年の準備、枯薪乾草は已に積まれぬ。クリミヤの慘報は火の如く飛むで之に點したり。一團の活火はナイチンゲール女史を驅つて男子も躊躇するの事業を企てしめたり。心は心と如何に相響くものぞ！。ナイチンゲール女史が陸軍大臣ハアバアト氏にクリミヤ出張を願ひ出でたる書狀は、同氏がナイチンゲール女史にクリミヤ出張を依賴せる書狀と、恰も中途に於て行き逢ひ、女史はこゝに其志望に背かず、クリミヤに於ける衞生、病院に關する全權を與へられぬ。

時は來れり。許可は已に下りぬ。準備は已に整いぬ。ナイチンゲール女史即はち四十二名の篤志の婦人と共に、白帽白衣故國に別れ、直ちにクリミヤに向つて出發せり。



文藝

雁

江澤千草

折々の時をそ知りて　咲きそめし
はなの色々白露を　千々に染なすそのさまに
月も心をうつすらん　色の千草にかげうつす
景色ながむと讀む文を　をきて出れど鳴く虫の
音にをりたゝん處なく　しばし見やれる大ぞらに
はるかに聞ゆ其聲は　厂がねにこそあるならめ
我世のたよりまちわびて　心苦しき昨日けふ
我すむやどはこゝなるに　などかくよそに過ぬらん
思へは君のおほせとて　勇みすゝみて千ひろなす
八重の汐路を立ちこへて　はる〳〵遠き異國に
行きしは夏の頃なるに　いつしか秋と菊月に
なれし人さへしかすがに　つらしと言へる草枕
如何なる夢をや結ぶらん　しかはわれども日の本の
ますら男子に生れきて　大刀とるかずに入し身の
如何でむなしく歸るべき　もろこしまでも攻入りて
輝きわたる日のみはた　彼の國人にあふがしめ
日本男子の勇々しきを　外國までも知らせつゝ
歸らんものと言ひをきし　言の葉草を賴みつゝ
いさほし立てゝ古里に　歸りきません時をしも
日毎にまてるわが心　あわれわがせよ國の爲め
君の御爲めに紅葉の　赤き心をつくしてよ
我願言はこれのみと　つたへまほしと詠めやる
四方の端山にきりふかく　飛びゆく厂は見へねども
さやるにきこゆ其聲を　あはれと我身に菊の露哉



吾が知る少女の事を記す

てつぷ

吾が知る家に三人の少女あり。長女は今年十六才、次女は十二才、末は八才。今茲に記さんと思ふは次女が事なり。次女名を春と云ふ。姓は之をかくし置かん。」たゞそれ少女が事のみ。別だん面白き事のあるにあらず。たゞ此の少女、其性質いかにも美はしく、逢ふて見る毎に、語る毎に、共に戯るゝ毎に、いたく吾を動かすところあればなり。

少女が家は大躰の地勢より言へば海濱なれども、實際は海より十數丁を隔りたる小丘起伏のこかげにあり。吾が家族かつて此家族と同居し、いと親しき交りあれば、少女等も吾を呼びて「兄樣」といふ。此家勿論近在の富家なり、地下のものは少女等を呼びて皆な孃樣といふ。

われ常に思へらく春孃は決して地上のものに非ず、山林の女神特に朝な〳〵の露をあつめて此少女が心に吹き込みしならめど。玲瓏として玉の如く清し。少しも虛飾といふを知らず、野の百合花の如く自然そのまゝなり。凡ての小兒は悉く無邪氣なり、されど此少女に至りては單に無邪氣といはんよりも、一種口にも言ひ難き品性をそのふ。

不思儀なる哉高貴なる品性の感化力や。妹なる八才の少女は、いつの間にか此の姉なる十二才の少女が感化のものに來りぬ。吾此の少女達が數年來の生長發達をみるに、長女ははじめの如く吾儘に、次女なる此少女は更らに益々其の美はしき品性の光を增し、末女は次第に此の光に照らされて、數年前と比ぶれば一種の變化を其の性情の上に來したるが如し。

此少女がなほ尋常小學校に通ふ頃、或日の朝少しく遲

くれて連れの友たち一歩先きに行きければ、春孃は寂しき山路を獨りたどらねばならぬこととなりぬ。母は氣の毒に思ひ、今日は休み給へと言へど、きかず、さりとて獨り行く事もならず、しく／＼泣き居たるを見兼て、吾其手をとり連れゆきたるとあり。然るに今は級も進みて高等二學年となり、席順は常に一二を爭ふ程に上達し、今年の春はじめて入學したる妹を連れていとねもごろにいたはり、曾て一度妹を泣かせしこともなく、傍目にも淚のこぼるゝ程親切なる姉ともなり友ともなりて、以前は獨り行き得ざりし山みちを、今は妹の手とりて優しく勵まし乍ら通學するに至りぬ。

このごろ吾此山家を訪ひ、朝より半日を遊び、晝飯を了へて已に午睡の時刻となりけり。家族の人々は部屋にやすみ、吾獨り母屋の廣間に横になりぬ。されど眠り得ざるまゝ、起きて部屋のかたに至り見れば、人々皆な眠り居たれど春孃のみはうづくまりて何か爲し居たり。何を爲し給ふにやと近きみれば、日記を誌すなりとて一個の帳簿を前に、頻りに何事か書きつけ居たり、吾しば／＼此少女が事を務むる樣をみるに、凡ての樣子甚だ靜平にして主一なり。小兒は兎角倦み易けれども此少女は倦むとなし、草をくゞる水、見へねど其流れの止むとなきが如し。みづから事を爲すに時に當りては、他の姉妹たちが其傍にて面白氣に嬉戲するとも決して頓着せざる也。嘗て冬の夜、此少女は燈下に石盤を運び、獨り筆算を獨習しつゝあり、其傍にて他の姉妹と共に月琴をもてあそぶ者ありけり。姉妹たちは月琴をかき鳴らしつゝ此人より頻りに學び得んと務めつゝありたり。されど春孃は此方には見向きもせで自からの事を勉め居たり。已にして筆算の獨習を終へて姉妹たちの仲間に入りぬ。此時姉妹たちは已に倦みて一曲も習ひ得ずして月琴を春孃に渡しぬ。春孃は直ちに學び始めたり、姉妹たちは傍に嬉戲し始めたり。而

して春孃は頓着なく月琴を學びぬ。終に習ひ得て其曲をたくみにひき得るに至りてやみぬ。吾傍より此の樣を見てありしが、心ひそかに此少女が特性の他に勝れるを感じたり。

此頃吾此少女及び長女と共に、くりやの冷しき蔭にて語りぬ。長女頻りに新たに來りし下女の敎へ難きを言ひ、今日三度敎へし事を忘れたりと不平をいふ。吾曰く下女を使ふ心得といふを讀み給ひしか。否なよくも知らずと答ふ。春孃此時傍より、そは彼の雜誌にて見たりと、かの雜誌とは家庭雜誌のとなり。吾曰く下女を敎ゆるには又た自から學ぶを要す。はじめは事物に慣れざるが故に、餘り叱かるは宜しからず。長女不平らしく答へて。それにても彼の女の如きはあらず、三度敎ゆれば一度位は覺へても宜しからんに。春孃此時又た靜にいふ、新らしき下女は半年位は能く親切に敎へざる可からずとかや。と姉に向つて笑へば、長女はたゞそれでも〳〵といひて止みぬ。

吾れ母の人に聞ける事あり。或日人々午睡してありしが何か臺所の方にて音するゆへ、母起きて至り見れば、春孃銅盥に水くみ來りて下女の頭を冷し居たり。如何にやと問へば、頭痛が致すと申しますゆへ冷やしてやる所なりと答ふ。

されど筆と口とは此の如き少女をほむるに足らざるなり。目と耳とは決して一々此少女のかくれたる行ひ知り得るものに非ず。母も姉も妹も友も師も知らずして只だ神のみ知り給ふ美德は、吾等の口と筆とが誌し、目と耳とが知り得るよりも更に幾倍なるかを知らず。吾此少女を見る每に、吾自から更らに其純潔を加ふるを感ず。聖なるものに近きたる心地す。此少女の如きは美其ものなり。善そのものなり。自然に流露して一擧一動一言一行のうちにあらはる。

此少女今は山間寂寞の境に生長しつゝあり。此天使の

如き少女が五年十年の後如何、五十年百年の後はいかなる可き。

家政

世界の新聞は何程なりや

米國の新聞は報じて曰く、萬國の新聞の總數を算用すれば、全躰にて五萬あり。その中を更に小分けせば、北米合衆國カナダにて二萬〇九百三十四。ゼルマンには六千。英國には八千。フランスには四千三百。日本には二千。イタリヤには千五百オ。、ストリヤ、ハンガリー合して千二百。日本を除きたる亞西亞全國にて、千。スペインには八百五十。ロシヤには八百。オーオ[illegible]ラリヤ八百。グリース六百。スウ井ッツランド四百五十。オランダ三百。ベルギヤム三百。其他の國々にて千なるが。以上の諸國の新聞の中半ば以上は英語にて書せられたり。但し日本の二千は少しく多きに過ぐるが如し。

學藝片々

植物は見得るや？

有名なる理學者ダルヴ井ン氏は此の問ひに答へて、然り見得べしと云へり。或る日印度の一理學者椽側の外にて談しつゝありけるに、蘇甘沒狃と稱する蔓植物は、ふと蔓を延ばして理學者の足に卷き付きたり。こは面白しと思ひて、そつと手を延ばし持ちたる杖を、蔓の傍にたてをきしかば、蔓は杖の光線を見て、そろ〳〵と足の卷きをとき返し、新らたにその杖に卷き始めたりと。以て草木の見得るを證するに足るべし。

人は平均幾歳にて死するや？

平均より云へば三十六歳なれども、人間の四分の一は

六歳未滿にて死し、人間の半は十六歳未滿にて死し、六十五歳に達するものは百人に一人の割合にて、毎一分間に世界の人民の死すると六十七人。毎日死する者九萬七千七百九十九人。一年には三千五百六十三萬九千八百三十五人なり。之れに引きかへ一分間毎に生まるゝ人間の數は、七十人、毎日世界中にて生まるゝもの、十萬〇〇〇〇〇人にして、毎年生まるゝもの三千六百七十九萬二千〇〇〇人なり。つまり生まるゝものは死するものより年々百十五萬二千百六十五人の多き割合なり、

日に燒けたる人々の注意

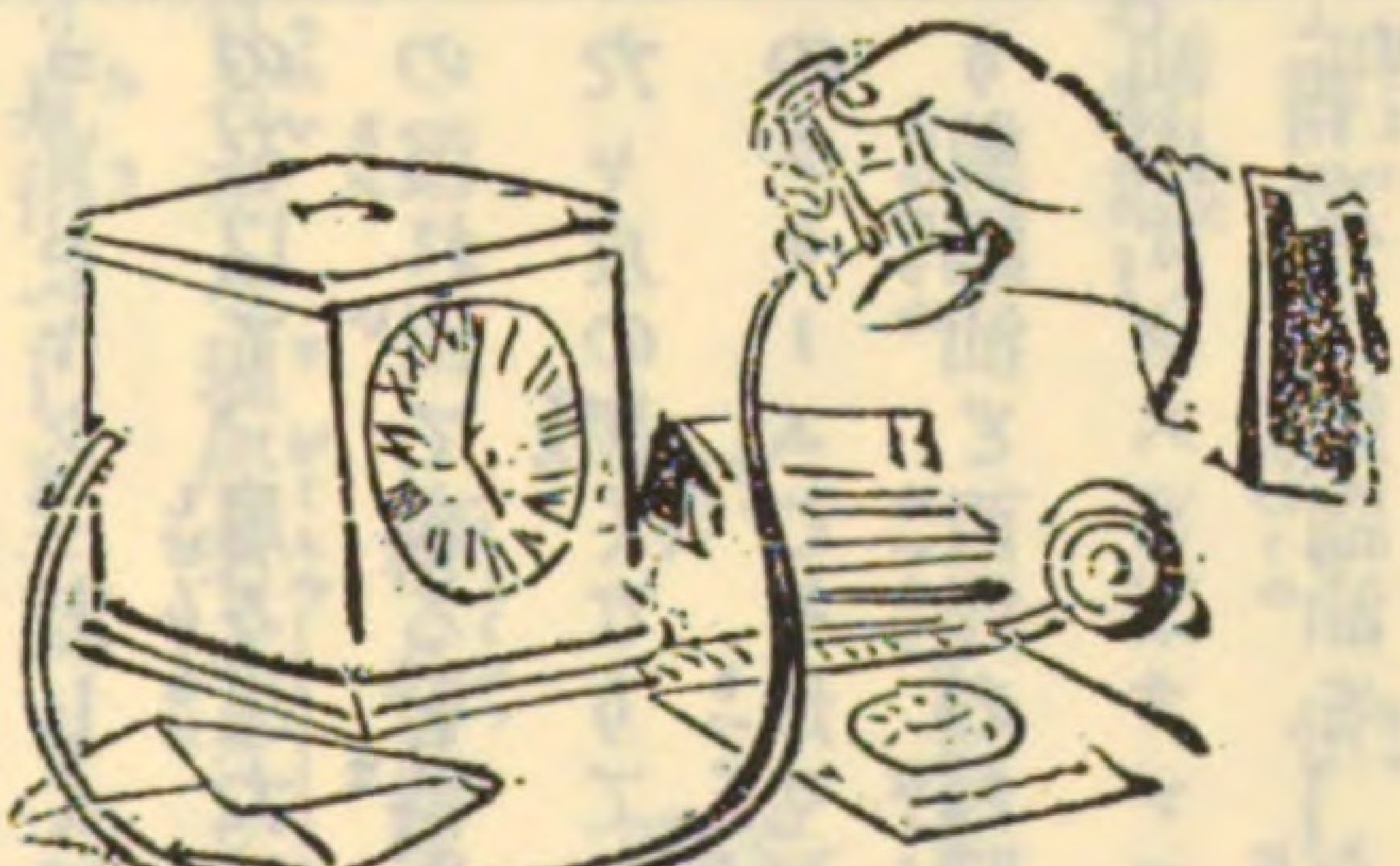
海水浴に行きて日に燒けたりとて、少しも恥づるに及ばず、日燒けは健康の證るしにして、反てほこるに足るべけれども、甚はだしく日に燒けし時はピリ〳〵と傷を發すとありて、治療を要するとあれば、一通の注意を爲しおくも、海水浴歸りの人々のためには、必要ならん。鎭痛劑に二種あり。一は手や顏の皮膚固くなりたる時と、一は皮にぶく〳〵と脹くれたるもの出來し時に用ゆるの別あり。皮の固くなりたるものには、糠にて屢々あらふか尙ほ直ほらざれば、リスリンを用ゆるか燕麥の煮汁にて醫するを得べけれども、皮に水胞の生じたるものは、熱さに堪へ得る丈けに、温めしコンニヤク、若しくは米飯、或は煎糠に鹽を和せしものを以て、屢々温ため、水胞の能く熟して、中より水の溢れ出て來るを待ちて、家の脂を溶かしてぬるべし。たゞ皮の黑くなりてピリ〳〵とするものには、扁桃油のクリームこそ最も良けれ。扁桃油の製法は、藥舖より鯨腦油と西洋の白臘とを、各々半オンスづゝ、扁桃油四オンスと二オンスの紫花地丁水を求め(すみれ水はたゞ香氣のために用)先づ鯨腦油と、白臘とを鉢に入れ、その鉢を沸騰

したる湯の入りたる鍋の中に浮かべて、臘の全く溶解する迄屢々かき廻わし、少しの塊なきに至りて、すみれ水と乳皮とを混和し、之れを口の廣き瓶に入れて、冷水の中に冷やしをく時は、上は皮を生ずべし。この上皮こそ唇のひゞわれ、手のひゞ日燒等に用ひて、最も功きめある藥なり。

西洋物質文明の一斑

新發明の時計

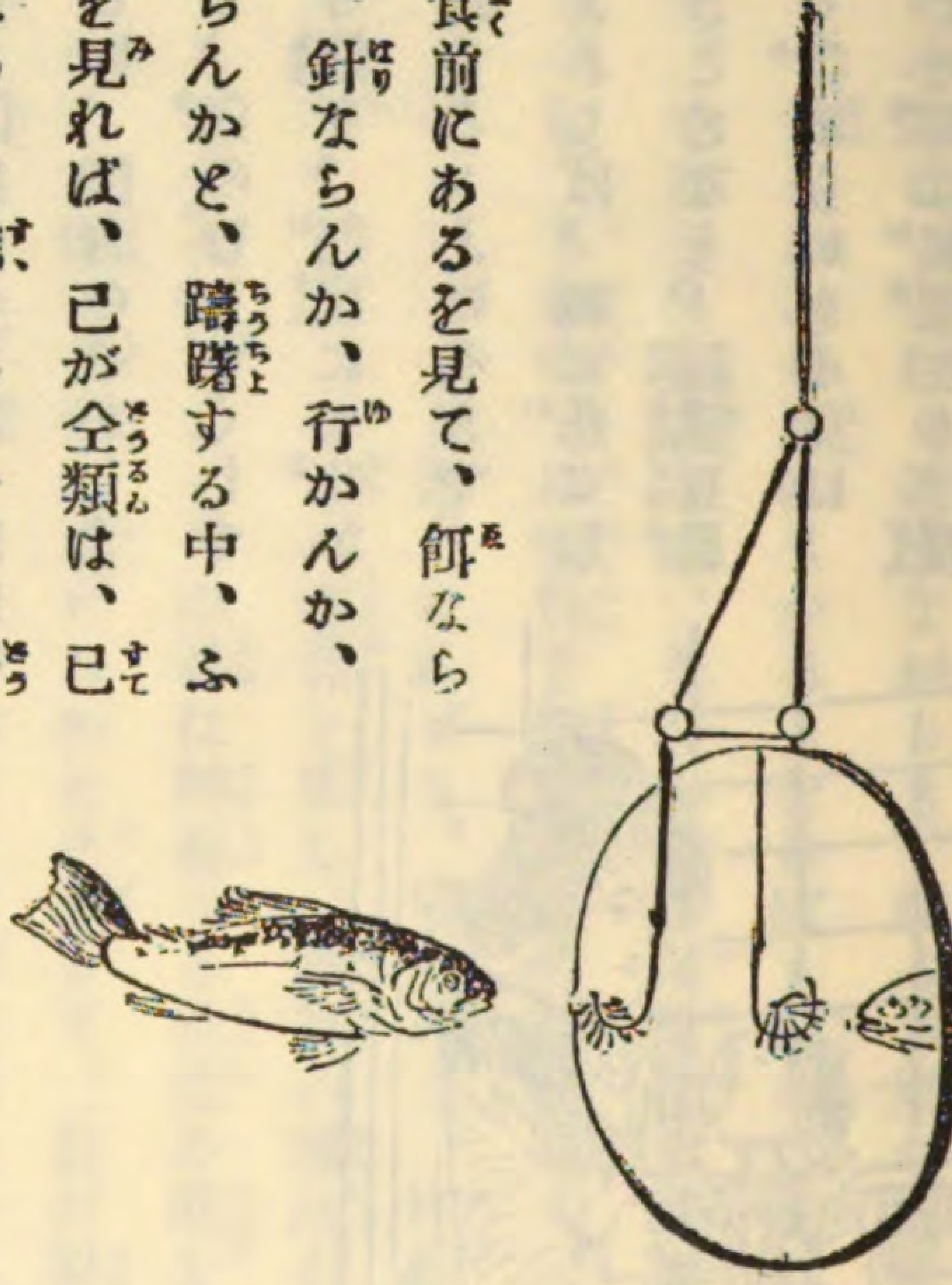
文明の進むに隨ひ、事業のせわしくなるに隨たがひて、又たそれ〳〵の機械の發明せらるゝは、喜ばしき事なり。左に示めせるは、世話しき役場、或は會社、事務所、郵便局等に最も必要なる時計にして、書信發着の時間を、時計自らにて委しく印刷する機械なり。此の器械の仕かけは、二本の柔軟自在なる軸ありて、その一端は、時計の裏面の齒車に固着し、一方の端には、印刷器械附着せるが、人が朱油をつけて紙上におしさへすれば『五月二十三日十時二十三分着』或は『九月二十日一時四十五分發』と、明かに委しく、顯はるゝなり。こは時計の針の運動が、一々後の輪に付きたる軸を傳へて、印刷器械の表面にある目ざまし仕かけの處に傳はりて顯はるゝなり。是は亞米利加にての新發明也。



專賣特許の釣針

魚は有り丈けの智慧を廻らせて、人の設けたる餌にかゝらざらんとを研究し、たくみに餌をすり取り、或は人の餌を決して食せざるものあれど、人は魚よりも尙

ほ賢しこきが故に、その魚を又たいつわりて捕ゆるの法を考へたり。そは圖の如く釣針の前に鏡を付けて、重りの代用を爲さしむるにあり。魚は香氣芬々とした



る美食前にあるを見て、餌ならんか、針ならんか、行かんか、止まらんかと、躊躇する中、ふと前を見れば、己が全類は、已に前にありて進まんとせり、全類の已に食せんとするもの、何ぞあやぶむを要せんや、彼の取らざる先きに我食し終らんと、いそぎ進みて食すれば、何ぞ知らん、前の友人も全時に七轉八倒の苦みを共に爲さんとは、これ魚をいざないて早く窖に入る丶の道なり。是も米國にての新發明也。

二階三階のガラス拭

二階三階の窓を拭わんとするもの、下に落ちんことを氣づかうて、手ふるへ、身動きて、中々に外面をきれいに拭ふ能はざる事常なるが、圖に示めせるは、輕便なる保護器械にして、鐵を以て上下左右網の如くなしたるものを、窓の內がわにひつかけ、尚ほ安全を望む、窓の板にねじ釘にてとめ付くる様に作りをかば、

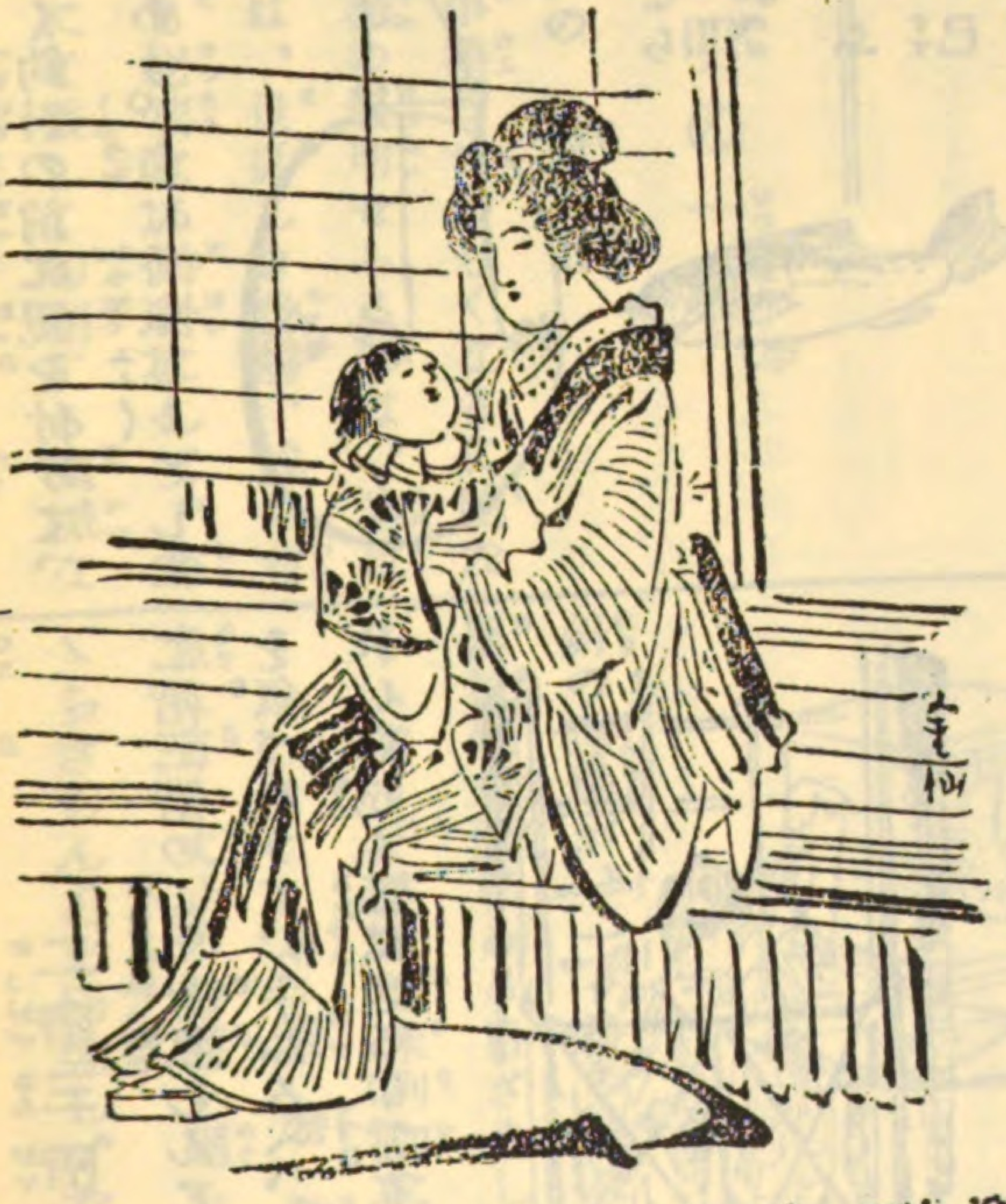


安全に止まるを得べければ、之れをはめをきて、窓に腰かけ、常の如く拭ふとも、萬一落ちし時は、支ゆるものあるとを信ずるが故に、神系を慰ぐさむるを得て、きれいに拭ふを得べし。

母よ人よ

小供を有つ母よ、人よ

不幸なる御身の小兒は、別段叱からるゝ程の罪を犯かさゞるに、御身のせわしきあまり、氣のむしやくしやしたる餘り、無殘にも叱かりとばさるゝとはなきや。さるとあらば、誠に悲なしむべきことなり。腦髓豆腐の如く柔わらかき小兒は、口にこそ母は無理なり、殘酷なりと顯しこそせざれ。腦の中には、慥しかに之れを感じて、記臆すべし。記臆を忘れらるば、幸ひなれども、その殘念さ、腹だゝしさは、内に常に燃へて、母の顏を見るに、一種不愉快の念をいだき、母が言葉を出だす毎に、又た何をか云ひ給ふかと、云わん計りの調子にて、返事そこ〳〵に樣子こそすれ、いやだいやだとの念止む時なく、殆どまゝこ根生の如くなりて、遂に積りては、己れより目下のものに對して、同じ怒り聲を發し、或は打ち、或はたゝき等するに至るべし。もし御身の小兒がバカと云ふて、その弟を叱るとあらば『なぜそんなことを云ふのだ子』と叱かることを一寸一足止とめる、己れは兼てその言葉を發せざりしやと、考へ、もしあらば、己れ先づ以後を愼しみて、後に靜



かに、彼に云ひ聞かしむべし、とても實行なき叱かり言葉は、通用せざるヿ明かなり。

小供を有つ母人よ

御身の小供は、面白く遊びながらも、時々衣服の襟にさわり、前をあわせ足にもつるゝをさばく等のことはなきや。もしこれを爲さば、そは小供は不愉快を感ぜるなるべし。不便利、不愉快を說明するの智慧なく、殆んど何にもさせざる如くなれども、實際の上、不愉快、不便利にして、自由の運動を害し、身躰の發達を妨たぐるヿ少なからず。その時は精密なる注意の眼を以て、何れの點に不便を感ずるかを見取りて、前が開きて膝を顯わさば、前をぼたんにて止むべきシャツ風の衣物とし、襟が究屈ならば、之れをゆるめ、帶がかたくば、ゆるくして自然をさまたげざる樣に注意すべし。過ぐる日美しく飾りて小學校に通へる十一二才の娘の後より、極々粗服を着したる一人の友人隨ふが如く、伴なふ如くして、鳥居坂の小學校より歸りつゝありけるが、後なる娘は、つら〳〵とその美服を見て、うらやましそうなる目付をして、細き聲にて『あなたはいつでもいゝおめしでよろしいこと』と云へば、前なる娘は驕けるが如き顏付きにて、振り向きながら『イヽエ私は袖が長くて遊ぶのにじやまで〳〵で困りますよ。いつもおつかさまに袖を切つて下さいてお賴みますのに、それがよいよといつて、少しも切つて下さらないから、私はあなたがたのおめしがうらやましくてたまりません』とて、眞に短かき袖を羨やむに似たり。折角の美服も、小供の健康を害しては、何の益なきのみならず、反て害あるにあらずや。

世話しき母人よ

己れの世話しきにまぎれて、見守に注意するヿを忘すれ給ふなかれ。甚だしきものは、己れの遊ぶ間、小供を啼かしめざるために、もぐさを口につむるヿあり。

少しく好きものも、甘きものを矢たらになめしめて、其間に遊ぶ位の事はめづらしからず。さなくして已れは全心全力を盡くせる積りにても、教育なき兒守等が、小供に教ゆる處は、聞くに堪へざる事少なからず。たとへば小兒が母の命を守もらずして、いたづらを爲せる時、母はそれに心付きて『誰れがいたづらをして居るの』と云へば『おぼつちやまでは、御ざいませんよ、あつちのこで御座いますよ』と云ひ付く、小供はこれを覺ぼへて、いたづらをして叱からるゝ毎に、ぼうでは御座いませんよと、僞を言ふことを習ふに至る。又た過ちを爲して謝言を云わずして母に叱からるゝ時、兒守が後でことわりをおつしやいますから、とて謝罪せしめず、抱き去る時は、小供はいつ迄でたつも謝罪せざるの癖を生ずるに至る。其他己れが誤つて頭を打ち付けし時、打ちし柱や、机を打ちて、うらみをはらすことを敎ゆるが如きは、復讐の念を起さしめて、甚だあしゝ。かゝる事は小事の如くなれども、積もる時は、中々小さき事にあらず。一生の癖は、善くも、惡しくも、兒守の敎による事少なからざるを知らば、世話しき中にも輕ろ〳〵しく見るべからず。

定めたる處に物を置くべし

定めたる處に物を置くは、時間を儉約するの大祕訣なり。必要なる時に得たる一本の竹ぎれは、不必要なる時の十本の杖に勝るとは、實に明言と云ふべし。世話しき妻君が小供の善く遊べる間、小供の眠むれる間に、十も、二十も、事を爲さんと欲して、走り回る時、あれも、見へず、これも見へずして、さがす間に、小供は眠よりさめ、遊びにあきて母に取りつくに至るべし。主人急用の際に當たり、手ぶくろも見へず、はんかちも見へざるは、甚だ困る事ならずや。されば平生よりそれ〳〵に置き場を定だめて、用ひたる人が、各々その元の處にしまふことを家の、憲法とすべし。さすれば

大に時間と、勞力とを劣ぶくを得べし。世話しと云ふは多くは怠まけて、不整頓なりと云ふとを說き明かすの別言に過ぎざるなり。

夏時の看病法

さなきだに不幸、不愉快なる病人は、此の頃の如きは寒き、或は暑つき日ある時は、格別の注意を拂はざるべからず、暑つき暑中は体温却て暑さに平均を得て、耐へ好しと雖も、甚だしく寒きかと思へば、又た驚く程の暑さとなる氣候には、虛弱なる人々は、特とに堪へ難たきものなれば、氣候に隨ひて、衣服、室內、食物等何にくれとなく心すべき事なり。寒き日には日光の當りのよき南に近かき處に、病人を擕ゆるとか、綿入れ衣せしむるとか、火鉢を與ふるとか、それ〳〵の手當を爲し、暑つき日には風すきの好き方に床を向かわしめ、能ふべくば常に二個の臥床を備なへて、夜の臥床と、晝の臥床とを異にし變る〳〵除掃せば、患者に、一種の愉快を與ふるを得べし、夏時は特に床の溫まりたるは、心地好きものにあらざれば、便所へ行きたる後等を見計らひて、床を變しをかば、重き病人等には、特に快よきを感ぜしむべし。度々患へるは已に經驗もあるへし、病氣の時は枕が善し惡しによりて、大に慰を得ると得ざるの別あれば、枕の中には水鳥の綿毛を煮て乾かしたるものか、若しくは白馬の毛を以て作らば之れに越したるはなかるべし。もしそれを得がたき場合には、茶の出しがらを乾したるものか、そばかすにても枕の袋一ばいに入れざれば、又た可なり。病人の安眠を得ざるもの、或は談し合手のなきもの等は、水の滴る丶音を聞かしむるは甚だよし。元よりやかましき音はあしかるべけれども、ホト〳〵と雨たれ位の音は、腦を安すむるの益あり。特とに香氣の猛けしからぬ花を、時々種類を變へて眼前に供するは、大

に慰めとなるものなり。中にも最も看護の必要あるは、食物なり。暑さの時には特と更らすゝしき日と雖も、病み臥したるものは、食慾の大に減ずるものなれば、之れをはげますべき食物を、種々に取りかへて、供するは、家婦主一の事業なるべし。之より病氣によりて、食物の利害用不用を異にするが故に、一がいには云ひ難たけれども、さしみ、煮過ぎざる魚、煮過ぎざる牛肉、スープ、雞肉、半熟卵子、牛乳等は、滋養物として欠ぐべからざる品なれども、時にさつぱりとしたる野菜ものは、又た必要なるとを忘するべからず。脂のひつこきてんぷらの如きもの、或は多量の酢は、大ていの病人には害あるも益少なかるべければ、凡ての病人の食物は、一々醫師のさしづを受けて、最も適當のものを與ふべし。食物によりて下痢を起こし、或は不消化を起すが如きとあらば、千日に刈つた萱を、一時に火くの悔を招ねくとあるべし。たとへ患者の好むものなればとて、醫師の免しを得ざるものは、一時姑息の情に流がれて後悔せざらんため、嚴しく與へざるを勉むべし。看護人にして嚴びしき時は、患者もあきらむるが故に、左程にほしかるものにあらず。又た堪へがたきものにあらず。病人に柔さしき必要のある時は、いかにも柔さしくして、言ふ通りに隨ふもよけれども、藥の事、食物の事等の如き、病人の不利益となることは、嚴守して、一歩も曲げざるとを病人に覺とらしむべし。これ反て真の愛なればなり。暑つき日に多く飲みものをほしがる時は、煮たちたる湯をさまして、砂糖を加わへその一合に付き、稀塩酸五六滴を加わへて與ふれば、渴を止むべしこれは健康の人にも渴を止むるの功ありて、旁々美しき飲み物なり。此の頃の如き梨、葡萄の多き時候には、果物一斤に付き、砂糖一斤の割合にて必要の量丈けの果物を皮のむくべきは、皮をむき、埶い去るべきは之を去りて、少量の水を和し

て、土鍋に入れ、暫時煮たる後砂糖を加わへ、又た暫時沸騰せしめて、その汁のみを瓶にうつし入れ、井戸にでも冷やしをかば、無聊を慰むるの好飲料なり。無聊なりとて菓子等を與ふるは何病に拘らず、必ず害あり。下科の甚だしきものにして、運動を忌むものを除ぞきては、大抵の病人は或は床をかゝげ、或は少々づゝの運動を爲さしむるは益なるべし。下科内科の差別なく、空氣の變動なきは、庭の面を眺めしめ、或は美しき畫本、面白き談話等は、欠くべからざる看護道具なり。

夏時蔬菜の料理法

白瓜の卵子煮

白瓜の運命は、もはや旦夕にせまれり。出來得る丈けの力を盡くして、之を調理し、年内の食しおさめを爲すも、長がき間にはあらざるべし。白瓜は通常餘り甘まき食物の中には算ぞへられざれども、そは料理の法の宜しからざるためなり。左の法に隨たがへば、鉛も化して黄金となるべし。

二三個の白瓜の皮をむき、種子を去り、縦に切り、五分計りの間即ち西洋うどを湯出る如くに、ざつと湯出、水を捨て、之れを鹽、胡椒バタにて加味し。然る後白瓜を引き出だして、皿に盛りをき、後との汁るに少量のうどん粉と、水とを入れ、十分計り沸騰せして後、二個の雞卵と青味少し計りと、能ふべくはクリームをも入れて、能くかき廻わし、之を皿に盛りたる白瓜の上よりかけて食膳に供すべし。

白瓜の佛蘭西料理

中位の白瓜、二三個の頭と、尻りとを切り、棒にて中の種子をおし出だし、之れを牛乳か水に鹽を和したるものにて、湯出をき、別にパンに牛乳をかけ、づくくに濕たしたるものを、二重鍋に入れて、沸騰せしめ、

その中へ雞肉牛肉のたゝきたるものを加へて、塩砂糖にて加減し、その中へ雞卵二三個を入れて、混和せしめ、好みによりては、葱の湯出汁少しを加へ、能く混ぜ合せて、先きの白瓜の中につめ込み、バタを澤山引きたる鍋の上をころばして、一寸外とかわを温ため、之れを輪切りとなして、皿に入れ、その上より牛の羹汁、もしくはクリームの汁等をかけて、食用に供すべし。

白瓜の葛羹

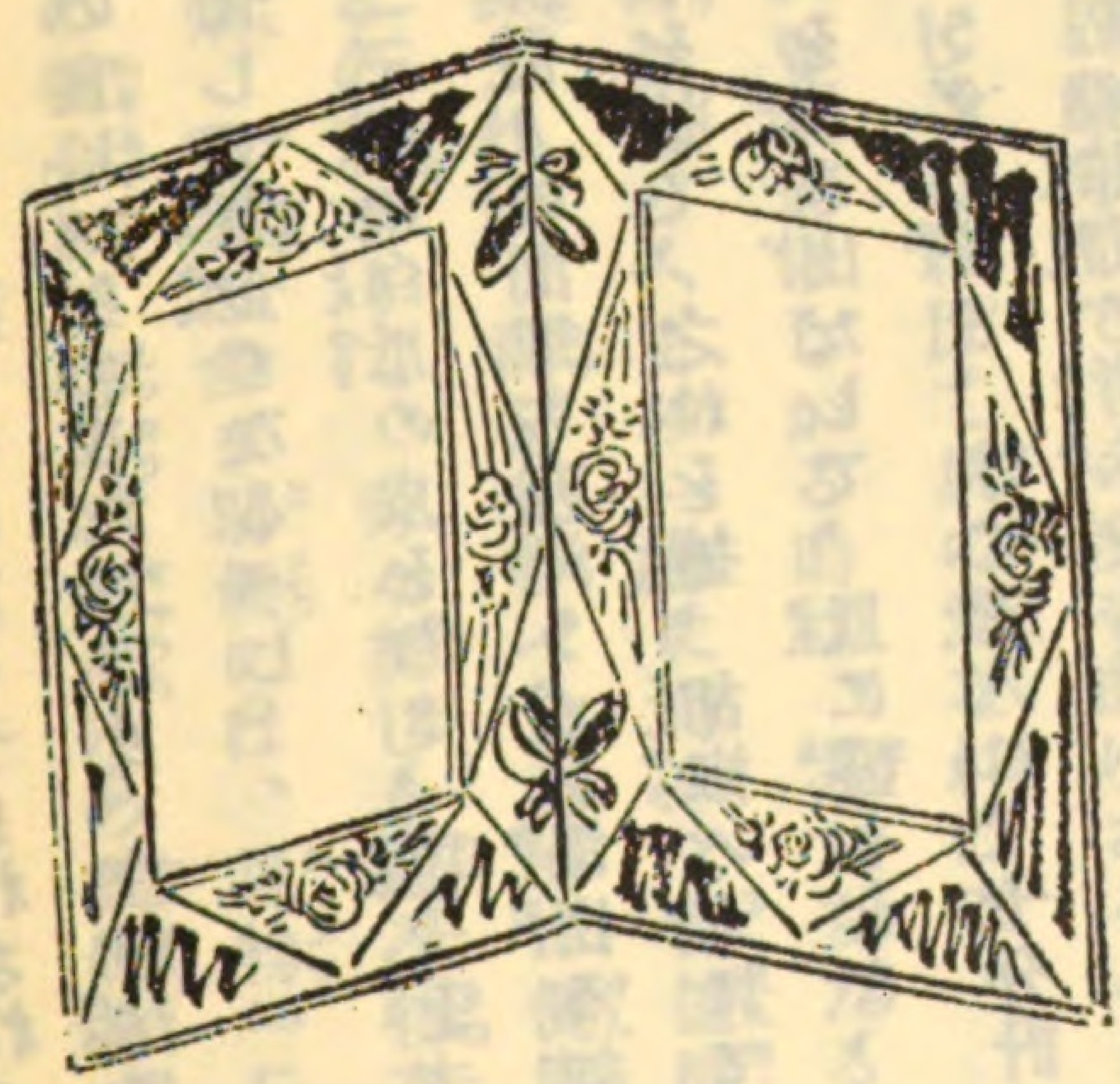
大なる白瓜を、五分位に小さく切り、塩水にて湯出水を捨て、更らに牛乳を入れ更へ、その中へ塩とバタと胡椒を入れて加減し、沸騰したる時、葛もしくはうどん粉を解したるを入れて、葛づゝりの様になすべし。



手藝案内

簡易なる寫眞帖

小兒小女と雖も容易に製し得らるゝ寫眞帖を製せんには、其の挿むべき寫眞より四方一寸餘も大なる厚紙の同きもの二枚を取り、其上に美しくいろどりある紙を蔽ふ、但し紙は厚くして重きを要す。



寫眞帖

先づ二枚の紙板を取り各斜線を引て斜十字形を爲し、其の挿むべき寫眞の大を見はからひ、ナイフにて其斜線によりて上

より蔽ひたる紙を切り放ち、其切きたるものを裏返しすること圖の如くす、斯の如く折返されしものは金粉にて飾るか、但しは草花を畫きて美觀を添ゆるか、それは好々にまかせて可なり。

二枚出來上れば狹き朱繻か何かの紐にて二枚のものを二枚屛風の如く結び合はせて、折疊み又は直立に便にす、但し之を修飾する色彩は小兒の出來得る丈の簡易なるを可とすれば、金粉を塗りて鍍金する位は宜しかるべし。

寫眞が挿まるべき所は、其の切り開きたる方形の處と知るべし。

毛絲の小供帽子

毛絲編の帽子の種類には數種あり且ついろ〳〵の異形ありて一樣ならず殊に小兒帽子はいろ〳〵さま〳〵に仕立ていろ〳〵の修飾を加ふる故に一見甚だ六ケしきものゝ如く思はるれども然らず、實際に於ては一定の形式あれば、之さへ合點する時に於ては、他の種類は其の形式によりて幾樣にも變化融通の理を知了し得べし、其根本の形式たる大黑帽子の事より記さん。

大黑帽子を製せんとならばずつこき結びを爲し（ずつこき結びは何編を爲すにも始に結ばるゝ結輪なり、此事は先號の本紙上に案內したる如く糸の片端に結びとめ一個の罠を作り其罠の一端を引けば罠の解るが如くにずつこける結び方をいふ、大低の毛絲細工は此結び方を用ゆ、譬ば如何に大きく且混雜せる製作品にてもずつこき結を爲し置く時は其の製作品を元の毛絲に直さんとならば、其結び端を引ばさら〳〵と引に從てほどけ去るなり）鉤針を用ゐ最初鏈編を三個作り之をかへして三廻まで一ッ目に入れて編み行き四廻目より二ッをきに增し編むな



一

り、六七回に至れば七つ目か八つ目に一ツを増して編む而して總て最初に増したる目の上にて増すことを爲さゞるやうに注意し右に記する如く編み行けば二十回より廿四五回迄には目數二十五位にて一個を増加する割合なり、此割合を以て目數三十位に編み行く七八才位の小供帽子に適合する帽子を製せんとならば其の圍さを八寸に編み其處に印象を附し置き此處は目數を増減せずして二回編みし後折返して總躰に於て目數三個を減し二つ目に又は三個を減らし三回目は六個を減し四回目には十二個を減し、五回目には三個六回目には六個を減ず、斯の如き順序にて四寸五分に至るまで減らしつゝ編み行き其長さに至らば編止を爲し、之れに「ミシン」を取り「ミシン」の上糸のみかけて口編を爲終り、帽子の頂上には毛絲の玉か又は美なる房を點附せば(一)の如き大黒形の毛絲帽子を得ること左程困難の事にあらず。

次に第二圖の帽子の編方を記るせば十一番釣針を以て「ゼルマン」毛絲を用ゐ段々編を以てせず、圓筒形に編み行くなり　始め鎖編にて目數六個を製し、而して其輪の中に三重編にて目數十個程を作り之を終らば、三重編の鈎編を七廻作るなり、而して六廻を作り初むる時には其處に百零二の目數を現出するに至る、之を七廻の編終り迄に目數十四を減せば目數八十八個殘る勘定となる、然る後口編の三重編の三列を二つ鎖編し、一個の孔を外づし而して其直にふちあみを爲し終る、帽の上の斜圓の所を製作するに七十九の三重編を以て段々を作り之を終らば頂上には玉なり房なり其の人々の好む所にまかせて點附するが宜しかるべし。

二



筆の序に帽子抄の事を記し置くべし、此法は先づ糸を

抜き出したる針を針に通すべき目に通して糸を引き出し、其針先を此度は捨目に通さず、上を越えて糸を引き懸け、前に針にかゝり居る所の二本の糸中をくゝらせて引抜く編法なり。

織物の名稱

織物昔は單一なりしも今や文明進歩し衣服類の精巧を競ふとなりければ其の織方を種々樣々にして近來は其織摸樣最も巧緻を極むるに至り、殆ど人工なるかを疑はしむるに至れり、而して今日の流行も大低織摸樣の粗大なるより最も細かきを好み市樂織、萬筋等の流行は以て其趣の在る所を知るに足るなり、從來日本にては絹織、木綿織、麻織等を主とし絹と木綿の雜織を始とし偶々兎毛又は鶴毛の雜織を出すとありしも今日の如く毛織又は毛と木綿を織まぜたる摸造「セル」又は摸造南京繻子(則ち綾姫繻子)の如き若しくは瓦斯糸の雜織の如き頗る珍奇の織摸樣を出すと雖も、其織上りの形狀より言へば平織、縮織、綾織の三種に大別し得べし、其織方より區別すれば左の如し。

堅地――木機、伏機六枚の綾取を以て蹈竹六本一、四、二、五、三、六と拍子を取りながら兩足にて蹈みて織りたるものを爾云ふ。

絖地――綾取六枚にて蹈竹八本一、四、七、二、五、八、三、六と片足にて蹈みながら織りたるものをいふ

小柳地――綾取六枚蹈竹六本にて一、四、二、五、三、六と片足にて蹈みながら織りたるものをいふ

綾杉地――綾取四枚蹈竹四本にて一、二、三、四、四、三、二、一と蹈みながら織りたるものを爾云ふ

七子地――綾取四枚蹈竹四本にて一、二、三、四と兩足にて蹈みつゝ織りたるものを爾云ふなり

網代地――綾取四枚蹈竹四本にて一、二、二、三、四、四、一と兩足にて蹈みながら織りたるものをい

ふ
小菱地――綾取六枚蹈竹六本にて一、四、二、六、三、五、一、四、四、五、二、六、一、四と兩足にて蹈みつゝ織りたるものを云ふ
繻子地――綾取五枚蹈竹五本にて一、三、五、二、四と片足にて蹈みつゝ織りたるものを斯くいふなり
平綾地――綾取二枚蹈竹二本にて一本宛片足にて蹈みつゝ織りたるものをいふ
右は大畧なり凡ての織物に對して一々名稱と織方を記せんとせば中々三四ページの能く盡くる所にあらず、又繁雜に堪えされば此の道の人は珍奇の織物を一見せば、如何にして之を織り成したるかは、吾人の説明を俟たずして合點せらるべし。

新　染　法

絹類染下――絹類の染下を爲さんと欲せば、石鹼を姑く熱湯に濃く溶解し置き、更に別器に熱湯を滿たし、右に溶解したる石鹼汁を注ぎ入れ（熱湯二升三合に石鹼汁一合の割）稀薄の石鹼汁となし染むべき物品を浸し置くこと五分間にして取り出し、竿に打掛け水氣を流出せしむるのみにて、石鹼の氣を除かず、（又は清水を以て石鹼氣を洗ひ除き、然る後以下の方法を施すも可）硫酸を和したる熱湯（水二百匁に硫酸一匁を和する割合）に浸し置く事五分時にして取り出し、清水を以て洗ひ出すこと二回にして木綿又は麻に包み其上より徐々に水氣を絞り去り直に之に染めても宜し、但し其儘に乾かし後見に至り染めても差支なし。
空色の染方――則ち青色に染めんとせは絹五百匁毎に銅器に水を滿たし明礬七匁五分を投し入れ能く之を溶かし、染めんと欲する染物を浸染し置くこと十分時にして取出したる後熱湯三升を以て硫酸靛藍（硫酸靛藍の製法は細末の靛藍百匁を磁器に入れ、其上方より硫酸八百匁を灑き入れ、能々攪亂し能く混和するに至り

て細密に蓋を爲し華氏驗温器百六十度の温度を與へ時々之を攪亂し二日間を經過し去る後使用すべし）三合七勺五抄を別器中に融化し、以前の明礬水に灌ぎ入れ能く攪き混ぜ合せ其染品を浸す事十分時にして取り出し更に別桶に水を滿たし其水に則ち食用の酢、或は硫酸、或は醋酸を用ゐて少許の酸氣を含ましめて前の染品を洗ひ出し水氣を絞り去り暖室にて乾すか又は蔭乾にすべし。

社交一斑

流行の栞　　春夢

墨繪の黄楊櫛

巳に過去に屬し又將に過去に屬せんとする本年の夏季に於て髮具の中最も流行の境に赴かんとする傾向あるは、黄楊にて製し薄きこと木葉又は紙片の如しと雖も堅に折るにあらざれば胸を摘みて何程横にすくとも曾て破折するの恐なしと記載し置きたりしが（本紙三十號）果して細工の美妙なる所を賞めて象牙と雖も三舍を避くるの風情ありと爲して、流行社會に一勢力を有するに至り、上品となく意氣向となく中等以上の社會一般に行はれ頗る喝采を博したりしが、最早夏季も過ぎ去り、今や秋の七草に蟲の音すゞしき時候となりければ、手游にして涼しさうなるものも、勢ひ追々冬向の流行品と變らざるべからず、殊に昨今は氣候激變し袷を羽織りても見苦しからざる肌加減なればこれよりの需用に間に合はさんと、夏向黄楊櫛專賣店なりし尾張町白牡丹にては、同じく墨繪の春秋冬三季用の黄楊櫛を製作し且つ販賣し始めたり、これは夏向用の如く手游のものにあらず、其の厚味も尋常にして、お初形もあれば髮掻もあり、形は種々ありて其摸樣もアッサリと秋の七草其他隨分細密なる繪畫を墨繪にして、青貝抔を嵌め込みて繪樣とする工夫最も面白く、且つ通常の黄楊櫛と違ひ素より磨きは上等にして齒並も亦隨つて平滑なれば髮の通り能きを知るべし、これも此頃より追々と流行の傾向となりしは、外出用にも不斷挿にもなり、且つ髮櫛挿にも櫛卷にも便利なるが爲ならん、



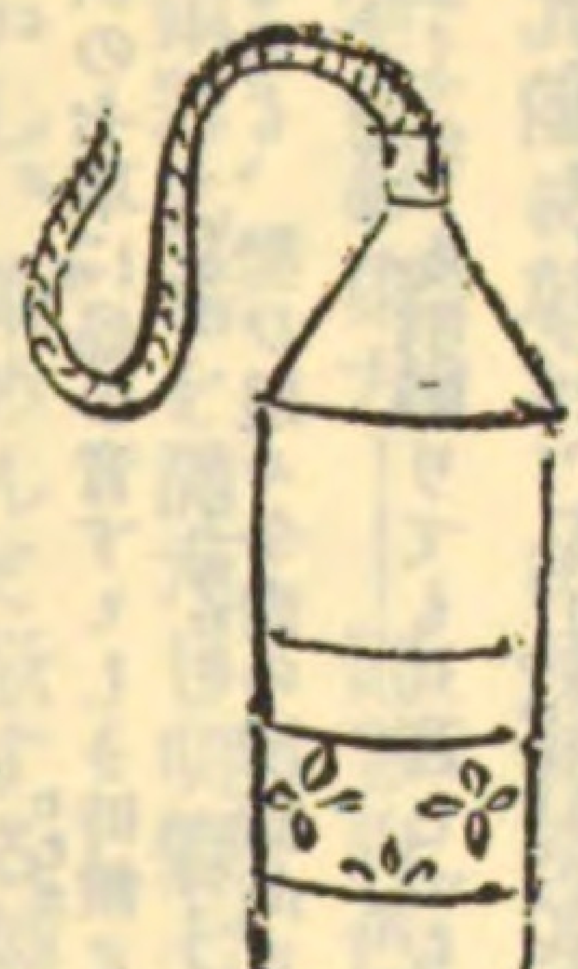
墨繪黄楊櫛

價は十四五錢より二十錢に至るを通常とし其の上は發給の精粗によりて價格に差違ありと聞けり

水及水濾器

水は人生に大切なる事は玆に多言を要せず、第一之を飲料として其宜しきものを撰ばざるに於ては人生に害毒を及ぼす事大にして、之より疾病等を醸し又洗濯用にするにも其宜しきを失ふ時は大に洗濯物の害となる、されば水には純粹にし無味無害のものと、鐵分、銅分、硫黃分の如き雜種のものあり、且つ場所によりては(岡山縣下の如き)河水中に一種の害蟲を含有し、飲用者をして疾病に至らしめ、死亡に至らしむるものあり、虎列拉の如き「バチルレン」の作用あるものは、多く飲用水が其媒介を為すものなれば飲料水は充分撰擇を為さゞるべからず、殊に東京市中の如きは大低水道の水によりて生活し、又た場所によりては好き井水なきにあらざれども市中の多くの部分は大抵水のよからざる所多く、之が原因となりて疾病を起すことあるを知らず、却つて此家は鬼門に當り彼家は金神に當り或は方角惡し或は荒神の祟なりと御幣をかつぎて諸々方々に移轉し廻り、かゝる意味なき事に心を煩はし、手數と時間をかけ、却つて水が衛生上に一大勢力を有し、用水宜しからざる為に家に病人等を生ぜしむるを知らざるは禁止の至ならずや、故に住家を定めんとならば第一に水の善惡を撰定して住居をトするも敢て遅しと為さず、然れども多くの人は一々多からざる善き飲料水の場所を占むること能はざれば、止むを得ず大低の水にて滿足するの外なし、滿足するには一度素水を煮沸せしむるを要す、素水を煮沸せしむるは硬水を變して軟水と為し、飲料にても洗濯用にても共に無害なりと雖も、雨天續きなる時には井水又は水道の水汚濁して煮沸するも尚ほ其汚濁を除却するに由なき事あり、故に水の使用に欠くべからざるは水濾器是なり。

從來家々に使用し來りたるものは酒樽か醤油樽の如きものに砂利、炭片、棕櫚皮等を詰めて上より水を注ぎ、下邊の穴より清水流出する仕組なれども、甚だ携帶に便ならず且つ容量の廣き割に清水を得ること尠く



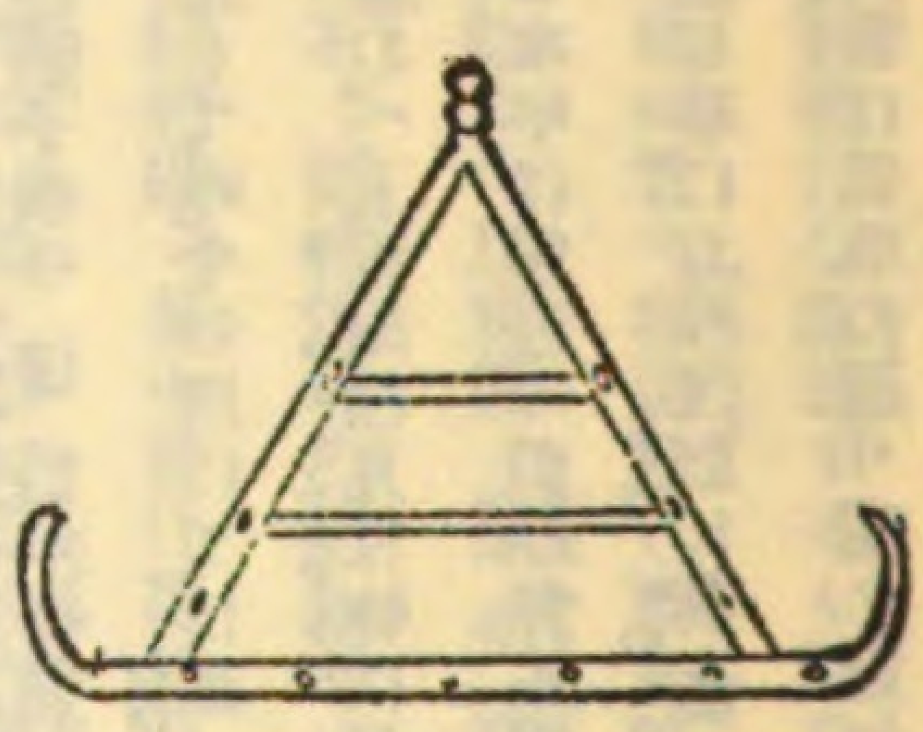
水濾器

又た日々掃除等の行き屆かざる欠點あれば、面倒なりとて惡水を知りながら水濾器を使用せざる家多し、然るに近來小石川邊の某商店より發明專賣する水濾器は、挿圖の如く「ブリキ」にて牛乳の二合入罎の大きさに製造し(これは小形なりこ

れより以上中形大形あり）上邊には「ゴム」管を附して水の流通する便にし、管内には重に「スポンジ」を詰め些少の小炭片を敷き、上の「ゴム」管より注入し來たる水の汚濁を吸取りて、清水は下底の數孔より、流出する事通常の水濾器も大差あらざれども、器械の大ならざる割には清水を得ること多量にして小形を用ゐ十二時間にして一石の水を得るといふ、上に述べたる如く牛乳罐大の小形なれば狹き臺所に置きても邪魔にならず、携帶易置に最も便なり、但し此の器は水を漉すに止まり、上より注ぎ入るゝ水を貯ふには一個の桶を要し、其の桶の下端に此器の「ゴム」管を挿入して水を誘導すべし、又た罐内の「スポンジ」は使用を終りたる後は清淨に掃除し充分乾燥せしめ置くを要す、代價は小形にて五十錢内外なりと、近頃此水濾器を使用する家頓に增加したりと聞けり。

專賣の額懸

額懸は大低折釘二本を打ちて上には紐にて止め其處に安置するものなれども、折釘の餘り粗惡なるは額面を引立てず、然れども餘り美觀にして高價なるものは、東京の如き貸家を借りたるものは、移轉の際抽取に便ならず、恰も餘り高價にして美麗なる帽子掛が住家を移轉する時抽取に不便なるが故に他に便利なる帽子掛を發明し、今や何れの家庭にても釘打の帽子掛を用ゐず、引懸に便なるものを用ゆるが如く、額懸に於ても帽子懸と趣意を同うする新奇の器を發明せり、その圖によりて示さるゝが如く三段の橫枠に數個の穴を設け伸縮自在にして大小の額面を懸くるに便にす、少しく美觀を欠くると雖も、代價の廉なる所（十錢內）を賞めて使用に供する家亦々見受けらる、專賣品なる由。



專賣の額懸

日清戰爭と市中流行物

前號の紙上にも日清戰爭以來市中に起る現象即ち錦繪と日清戰爭に係る圖書譬へば支那朝鮮地理又は日清交戰錄又は日清戰記の如きもの流行し、人氣の激昂せるに乘して種々なる流行物を出すに至れり今に其二三を錄して一興となさん歟

◎掛物及花簪　日清事件以來繁昌なるは各繪双紙店頭にして店先左ながら入の屏風を建てたる如き有樣なるが此邊より思付たるものか花簪專門業人形町豐年家に於ては今度大勝利并に大日本勝利掛を賣出した

ろ處人氣は凄しく菊花生花造羽二重製數十種さも製造間に合はさる程の繁忙なりさ其道々にて機を見るに敏なりさいふべし

◎玩具さ遊戲　民友社出版の家庭叢書第三卷其儘の冒頭なるが此頃都



流行の玩弄

下に流行する玩具の一種はブリキ細工の機械仕掛にて日本軍人さ支那兵が一騎打を爲す趣向なれば隨分兒童の眼を歡ばしめ又遊戲するを見に群童を二陣に分け日本さ支那の兩軍に別れて戰鬪旗取を爲すに不思議に支那兵敗北し又支那兵さなるを厭惡する故、士氣振はず之に反し日本兵さなりたるものは勇氣激昻し連戰連勝の由小供でも人氣さいふものは爭はれぬものなり

◎パノラマ油繪（凌雲閣）　淺草の凌雲閣は愈〻本月中に大修繕工事を終り次節日清事件のパノラマを觀覧せしむる由にて去二日より此油繪揮毫技師中村某を招き閣内に於て揮毫に着手せり又内部の造作は總て大改造をなすさ云ふ

◎日清戰爭演劇　川上書生芝居の淺草座は過三十一日より開場したるが當時日清事件に人氣の引立ちし折柄さて我も〳〵さ淺草座に押懸け初日より頗る繁昌を極め日々開場前には札止さなり地主等の紹介を持ちて見物に來れざ滿場立錐の地なき由川上も此人氣を當込み舞臺正面には大旭旗を交叉し兩側の棧敷には同じく旭旗の提灯を吊ろし日本萬歲、日本全勝等さ書きたるを所々に貼付しあり盛に士氣を鼓舞したりければ舞臺妙所に至れば階上階下喝采の響百雷の如く大向の喧噪混雜一方ならず見物人が戰爭でも起しさうにて演劇中日本の軍曹さ清兵さが花道にて組打ちを始め居たるに見物人中の某々二名は大に怒り花道に飛び上り㦸鐵拳を揮ひて清兵を毆打したりければ清兵に扮せる俳優等はさんだ貧乏鬮を引きたりさて頗る閉口頓首し居れり人氣の趣く所は恐ろしきものならずや春木、歌舞伎座に於ても日清事件を狂言さする由是等も流行の一ならんか

◎團子坂の造り菊の準備　菊は本年早り續きさ暑さの强き爲め昨年に比して唯今の所にては延方遲けれざ此先き降雨さ冷氣を來さば生育を早むべし近來諸見世物は日清事件が流行物さなり團子坂各植木屋の造菊も本年は俳優の似顔抔を廢し何れも申合したる如く日清韓事件を取り仕組む事になりて既に其興行許可の儀を本鄉警察署へ出願せりさ云ふが同署は從前の造り菊さ違へば更に警視廳へ伺出たりさ云ふ扨其準備を聞けば植惣は牙山の清軍潰走の塲さ淸の軍旗を奪ひ取ろの塲にて大島少

將福島中佐新聞記者等數十人の人形大仕掛廻り舞臺せり出し等植梅は年々俳優似顔の處本年は矢張牙山大戰爭の場を出し植半は豐島に於て操江號捕獲の場と高陞號沈沒の場植重は大島公使と大院君王城へ乘込みの場荒粉は豐島に於ける清艦沈沒の場等にて何れも廻り舞臺せり出し等、詳細の處は互に秘して語らず各自十分の見榮を造らんと工夫最中又薰風園は朝鮮事件の箱庭を數個造り此人形は燒物にて夫々注文せりと右は縱覽の上安價に販賣すと云ふ此外花壇菊、鉢植菊を陳列販賣す殿下の淸大園は盆栽幷に花物等を陳列して無料にて縱覽を許すといふ其他菓子に勝利、凱旋、日の本、支那微塵等なり日淸事件によりて額はれたるもの數ふるに遑あらず。

一種の根掛

此頃流行し始めし眞珠爪留根掛は二三分の眞珠を十八餘にて爪留せしものにて五粒乃至七粒位を一掛となし金色と眞珠の光澤を照り合せたるものにて昨今上流社會に流行する由なるが價は九圓乃至十四五圓又極めて安價即ち二十錢より三十錢位これは前號に案內したるものなり、安くて體裁佳なりと一種の社會のものまで重寶がる由

過ぎにし夏衣

已に過去に屬せんさする時なれども本年流行せし夏衣の流行を記して明年の流行を豫想するも面白なるべし

木紙が嘗て報道したる如く單衣は女物にては小紋御召第一の流行にして男物にては市樂、壁糸織、又は絣の結城紬第一等なり、帷子は女物明石、都花上布の類を最とし男物は本場上布なりし而して羽織は黑絽の三紋羽織、暑中着は黑紗なり、女物の流行色は淡色に摸樣の細かきものを尊ぶが如し帶は繻珍の淡泊なるもの流行せり男帶は商人でも随分白縮緬を卷きつけたり過去に屬したる事なれば巨細を記するの要なし

日用品物價 (九月五日)

◎白米小賣相塲(一圓に付) ●一等白米七升一合●二等白米七升五合●三等白米七升九合●四等白米八升五合●五等白米八升九合

◎雜穀 ●南京白大豆一斗八升五合●南京靑大豆一斗六升七合●同瀬色小豆一斗四升三合●同白小豆一斗三升八合●八戸大豆一斗八升●粕壁瀬色小豆一斗二升●室蘭[illegible]豆二斗一升●新目[illegible]白さ一斗一升●木石上大豆一斗八升●南部大豆一斗八升五合●川越[illegible]豆一斗六升

◎鹽 ●赤穗四俵●大鹽幷に八家四俵一分●本齋六俵一分●新齋六俵五分五厘

◎種油 ●荏油十四圓七十錢●桐油七圓七十錢●胡麻十一圓七十錢●坂箱九圓五十錢●地水八圓七十錢●一川九圓四十二錢●イ九圓二十六錢●久ト九圓四十錢●星印九圓四十五錢●井桁九圓四十二錢●入山九圓六十

錢●チヤスタ一圓七十九錢八十錢●タング一圓七十二錢三錢●ホーキ一圓七十七錢八錢

◎醬油(一圓に付)●最上七分一厘方七分六厘●極上八分三厘方八分九厘●上物一樽五厘方一樽四分●中一樽六分方一樽九分●並二樽三分

◎味噌(一圓に付)　●麥麹最上六貫二百目●同極上六貫五百目方六貫八百目●同次七貫四百目方七貫五百目●米麹最上六貫三百目●同次六貫四百目方六貫五百目(但し樽付)

◎西洋食料品　(四ダースに付)●鳥印ミルク十五圓二十錢●人形印ミルク十四圓八十錢●チストミルク十圓四十錢●和製天人印ミルク八圓六十錢(一ダースに付)●食鹽二圓三十錢●カラシ粉二圓四十錢●(一斤に付)紫一牛バタ四十八錢●地球印バタ五十五錢同半斤に付二十八錢●(一打に付)●ビスケツト一斤入四圓●同次三圓五十錢●(六ダースに付)ジヤム十一圓五十錢●胡椒粉十二圓五十錢●同黑八圓●ソース八圓八十錢(一打に付)●イスボアタ罐入四圓五十錢●同小罐入二圓六十錢

雜　錄

水浴及ひ水泳の規則

三島通良氏がウイーチング氏の報告に其意見を加へて水浴及ひ水泳に關する心得を擧げたるもの下の如し。

第一條　水の溫度は決して攝氏十五度(華氏五十九度)以下なるべからず。

第二條　攝氏十五度の水に入らんとする者は初め此中に留るは三分を超ゆべからず。次に五分、斯くの如くして之に慣るゝを要す。水の溫度は溫き程長く其中に留まるも害なけれども、冷なるときは速に之を去るへし。

第三條　羸瘦したる小兒等は肥滿したる人に比すれば冷氣に堪へざるものとす。

第四條　兒童に於ては左の規則を守るべし。

《水の溫度》	《水中に在る時限》
攝氏十五度(華氏五十九度)	一分乃至二分
攝氏十八度(華氏六十四度)	三分乃至四分
攝氏廿　度(華氏六十八度)	五分乃至七分
攝氏廿二度(華氏七十一度)	七分乃至十分

第五條　第一俗には先づ水中に浸るべし。爾後且出で且入る事を可とす。

第六條　強壯ならざる過敏なる兒童は最初は隔日乃至三日おきに水浴し、其慣るゝに從ひて每日とす可し。蓋日々水浴する時は身體を鞏固ならしむる効多し。

第七條　若し健康なる人にして水浴、水泳の後不快を感ずる者は、盥水

中に長居したるに坐す。

第八條　水浴、水泳に適當なる時刻は、午前六時より八時。　午後五時より八時。迄とす。日中は必ず之を避く可し。

第九條　何人と雖滿腹の節入浴するを許さず。若し然らざれば痙攣及頭痛を發す可し。然れども又空腹の節に入浴する事をも許さず。若し然らざれば暫時にして大に疲勞し、且つ浴後不快を感ず可し。

第十條　充分强壯ならざる者は浴後直ちに少しの食物を採る可し。

第十一條　水浴に熟練せざる者は、決して一人にて水浴す可らず。

第十二條　水浴塲に於ては磽确なる岩石、高き波浪急に深き淵ある所、近傍に汚水の流入する所凡そ不潔なる臭氣ある水を避く可し。最も可なる所は水精頁、浪なく、遠淺にして、床の砂地なる者これなり。

第十三條　水浴塲に行く者は緩歩するを要す。其身體の熱せざらん爲めなり。

第十四條　若し身體の熱し若くは發汗したる者は衣服を着たるまゝ五分乃至十分間休息し、呼吸及び心悸の靜穩となり、汗の乾くを待ちて始めて水浴す可し。

第十五條　衣服は速かに之を脫す可し。且半股引又は犢鼻褌を纏ひ、脫したる衣服は之を釘にかけ、若しくは樹木の上に置く可し。是は一には通氣消毒せしめん爲め、二に蟲類等の附着するを避けん爲めなり。

第十六條　水浴に慣れざる者と雖水中に入りたるときは、直ちに全身を(頭部を含む)水中に浸し、水泳の眞似を爲す可し。若し此際爲す事なく水中に起つ時は、第一に頭部の充血を發し、第二に感冒に罹る可し。

第十七條　水泳せんとする者は、衣服を脫したる後は速かに永中に投じて、先づ頭部を水に浸し、手腕、腋下、胸部、頸部、背部等を水を以て濕し、然る後泳ぎ始む可し。是れ痙攣を豫防する法なり。水にして充分深き時は岩跳若くは翡翠の法によりて頭部より水中に飛込む可し。

日光の輝く所に於ては可成度々水中に潜む可し。

第十八條　石鹼、手拭の如きものは各之を用意して且手近に置く可し。

第十九條　水浴を畢らんとする時は、頭髮、腋下等に石鹼を塗擦して、後一二回水中に沈む可し。

第二十條　水浴塲に於て瀧の設けあらば、水浴後之にかゝる可し。是れ益身體を鞏固ならしむる一法なり。若し之なき時は上漏を用ゐる亦可なり。

第二十一條　水浴より出たる時は硬き手拭を以て速に全身を摩擦す可し。

鹹水に浴したる者後に淡水を以て身體を洗ひたる時亦同し。

第二十二條　水浴の後は必す身體を運動す可し。若し歸路近きに過ぎたるものは、迂回して歸宅す可し。

其他之に環連したる事項を述べん。

春の終り及び夏に於ける時を以て河水又は湖水の最も溫暖なる時となす。然れども皮膚の堅固となりたる者は秋期に於ても亦た水浴し得べし。

水中に在る時間は普通之を十五分と定めたれども、身內の冷ゆるを覺ゆ、又は嫌惡を來したる時は、之を度として水中を出るを以て規則となす。

エリザベス、ロプーロフ（下）

無　一　生

歲月人を待たす早くも茲に三年の星霜を經へエリザベスは二九の春を迎へしがエリザベスは兩親に向ひ此時再び旅行の許可を乞ひしが兩親も今は吾娘の願望空事ならぬを看取り涙と倶に彼に角と勧はりながら旅行の事はしも思ひ止らしめんものと相互がはりに搖口說きける

斯く兩親が諫め止むるにも拘はらずエリザベスは兩親に向ひ旅行のことを懇望して止まざりければ終ひに兩親をして我を折りて納得せしむるに局を結びけるがエリザベスは父と倶に刑せられたるにあらざりければ何の苦もなく容易く旅行免狀を得たりけり

兩親は長途吾娘の無事を祈りつエリザベスは愈旅行の途に上れりエリザベスは大形の銅貨にて凡そ五六法位に値ひする路銀を懷ろにせるのみ長途少娘の唯一人にて道行く伴侶もあらざりき然れども少娘を皷舞せし健氣なる勇氣は財貨の代用をなし神へ一身を托してあるとは守護者及び從者の代用をなせり

エリザベスはコノ旅行中筆紙にも盡しかたき疲勞

に苦しめられ幾多の恐ろしき危難に遭遇せりエリザベスは行方の道を知らざりき去れは斯くも遙けき聖彼得堡への順路を敎へてよと路傍の人に問ひしときに人々はエリザベスを目し狂女となして打笑へり亦エリザベスは毎度順路を違へ岐路へと蹈迷ひ夫れがため大方ならぬ迂路をなし長きが上の旅程をして長からしめけり

エリザベスは其疲勞の度と亦村人等がエリザベスに加へし待遇振とに應じて多少彼處此處の村々に足を留めけるがエリザベスは其逗留の間は家内の掃除すゝぎ洗濯乃至針仕事杯して吾が足を留めたる家の手助を爲す樣に努めけり

幾度か行く先々にて非人よ乞食よと無禮なる名稱を附せられて拒絶され征衣の袖を絞りつゝ泣々其處を遠ざかれり亦毎度彼樣に虐待せし人々もエリザベスの涙と端正しき風采とに坐ろ哀はれを催しつゝエリザベスを後邊に呼戻して厚く待遇しけり

一宵の如きエリザベスは端なくも劇しき暴風雨に出會しければ一叢茂れる森の中に駈込み暴風を避けんとて丈高き雜木に圍繞されたる一株の樅樹の下に身を寄せけるが可憐の少娘は瀧なす雨に洒されたる儘其處に一夜を明せしが翌日になりぬれば寒氣と飢とに心地死すべう覺え而して全身泥にまみれて漸く但或一軒の小屋へと辿り着き此處にて相應に善き待遇を享けたれども病み煩らひて暫時此家に足を留むるとはなれり

マタ或他の塲合に於てエリザベスは一群の猛犬に襲はれてこれに四方を取圍れけるにぞエリザベスは手に携ふる杖を以て其身を防ぎつゝ逸足出して逃行けば犬は倍々哮り立つてぞ追縋りつヤオラ一疋の犬はエリザベスの衣裳の裾に喰ひ着きこれを嚙裂きし程にエリザベスは上天の冥助を祈りつゝ磔と地上に身を投げゝるが搗てゝ加へて哮り立つたる一疋の犬が臭を覗がんとて

エリザベスの頭上に其冷たき鼻づらを押し付けるよと感じゾツト身顫ひなしけるが然かも神はエリザベスを護り給ひければ群犬は更らにエリザベスに危害を加へ得ざりき折能く通懸りし一人の田舍漢ありて群犬を逐散らせり

一日エリザベスは一面に堅氷にて張詰めたる沼池を彼方へ横切らんとして道を踏迷ひけるが種々苦心の末漸く生茂れる森にて取圍まれたる未開不毛の地へ辿り着きしが日脚は何時しか傾きて夜は段々と近づくにぞエリザベスは慄然怖氣立ち身顫ひなしけるが不意なくも數名の荒くれ男森の中より立現はれけるが是れぞ疑ふ方なき山賊にして其獰惡なる面色にエリザベスはハツトと斗りに胸轟き生きたる心地あらざりしが山賊原はエリザベスの方に歩を進め祥なき姿態にてエリザベスを打眺め左も呆氣なくエリザベスに打向ひて其處に何を爲して居るぞと問掛けたり當下エリザベスは聲顫はせて「妾はシベリヤの奥より參りし者にて皇帝陛下に父上の赦免を願奉らんため遥々聖彼得堡に參る途中にて侍るなりと」

惡漢共はエリザベスの物語に太く打驚ける態なりしが斯る遥けき旅路の路銀として定めて大金を所持するならんと思ひ何程位の金子を懐中せるやをエリザベスに問ひけるがエリザベスは實に數個の銅錢を懐にせるのみなりしが問はるゝ儘に取出して山賊原に示しければ流石無慈悲の山賊原も坐ろに哀れを催しつエリザベスに毫も危害を加へざるのみならず猶其上に彼等の蓄貯をも頒與へ行方の道をぞ敎へける

エリザベスがカザンの市に着きしときに連日吹荒める大風のために歐洲第一の大河ヴオルガ河の岸邊に氷塊を吹寄せたれは殆んど川止めの姿にて河を越さんには半は小舟に乗り半は徒歩立ちにて氷塊より氷塊へと飛越へて渡らでは叶はす船頭共も渡船を出し難し姿

なりしがエリザベスは更らに危險をも顧みるに遑なく一艘の小舟に上らんとを望みければ船頭共はエリザベスに對して狂人扱を爲し而して河一面に堅氷を結ふ曉に至らざればエリザベスに河を越させまじと敦圉荒くエリザベスを拒絕しければエリザベスは船頭共に打向ひ何時迄待たば河を越すとの叶ふべきやと尋ねければ船頭共は口を揃へて「少く見積つて十五日は大丈夫掛るべし」と答へけるにぞエリザベスは即時に河を越さんと決心し船頭共に打向ひ「哀訴するが如き音調にて「船頭の衆よ情願妾に力を添へて滯りなく此河を越さしてたべ何をか隱さん妾はシベリヤの奧より參りし者なるが無實の罪に坐してシベリヤに謫居の身となり玉ひし父上の赦免を皇帝陛下に直々乞ひ奉らんため聖彼得堡に赴く身なるが唯さへ斯ばかり遠き旅路なるに搗てゝ加へて十五日の日子を空に此處に送らでは叶はざる歟」

エリザベスの述懷を竊居たる一人の船頭は坐ろに不憫の情を催しエリザベスの手を把りて「サア來ませ小身は渡れるか渡れぬかは知らねども兎も角も御身を導き見るべし御身は神を敬ひ父上を愛し玉ふ善き娘子に在はせば天道は御身を護玉ふべし」と

斯くて件の船頭は自個と倶にエリザベスを一艘の小舟に扶乘せつヴオルガ河の中流迄漕行きしが最早夫れより以往は船を行りがたきにぞ船頭はエリザベスを吾肩に擔ぎ手に有てる楫を力に氷の上を歩み行きつ無難にしてエリザベスと倶にヴオルガ河の彼方なる岸邊にこそは着きにけり

莫斯科に着する少し前に可憐のエリザベスは身の廻り何角と萬事不足を告げ始め足に穿てる靴は破れ裂け身に纏へる衣裳は繿縷となり而して寒氣は肌を劈くばかりにて地は一面の銀世界と變じ雪の積ると殆んど一メートルに垂んとし亦時々雪は空中にて凍り宛然氷塊

の雨を降らすが如くにて天も地も區別すると能はざりしなり

コノ健氣なる少女が如何程危難の境を蹈みたるかは却く々に言語にも絕へたる次第にてありしが少女は勇氣凛然として秋霜烈日の如く搗て加へて愉快氣にてありき彼の思念は間斷なく上帝と嚴父の上に馳せ居れり而して此思念は少女に一種不可思議なる氣力を與へけり

エリザベスが通過せる都市の一に於てエリザベスは一宇の尼寺に宿りしが庵寺を預る尼の長は莫斯科に住める婦人と聖彼得堡に住める婦人に宛てたる都合二通の紹介狀を書認めてエリザベスに交付しけるが莫斯科の婦人は最と手厚くエリザベスを待遇し新調の靴と新調の衣類なんど與へければコノ厚遇にエリザベスは欣々として心勇立ち莫斯科を後にして再び旅程に上りけるが遥けき征路に就き千辛萬苦を嘗め終ひにシベリヤを發してより十八ヶ月目に愛出度聖彼得堡にこそは着きにけり

最初の程はエリザベスはコノ廣大なる首都彼聖得堡に唯一人にて親戚便りとてもなく何方を見ても東西分かぬ旅の空唯茫然たるばかりなりしが終にカザンにて彼の尼寺の長より貰らひ來りし名宛の婦人を探出し〻に件の婦人はエリザベスを吾家に宿泊せしめ最と眞實に待遇しけり

偖もエリザベスは此處迄は首尾能く漕付けたれとも是れより何どして皇帝陛下の御前に伺候すへきか此一事はエリザベスが是迄に經歷し來りし難事中の最難事にてありき去ればエリザベスが皇帝の御前に伺候せんとて宮城の御門に參りて陛下に拜謁を遂げ度由を申入れしときに守衛の番卒は大口開いて呵々と打笑ひ何條エリザベスの來意を取上ぐべきエリザベスは確と當惑ししよんぼり其場を退りけり

エリザベスは徒なる運動に茲に二月近くの日子を費せ

しが幸ひにも去る仁慈深き人ありてエリザベスのことを一近衛士官の細君に話しけるが此近衛士官の細君は皇后陛下の御祐筆を勤むる人の細君と知己にてありしにぞ士官の細君は御祐筆の細君に向ひエリザベスと暫時面會し呉るゝ様に頼入れけり

去程に御祐筆の細君は異議なく近衛士官の細君の依頼を承諾しければエリザベスは御祐筆の細君の許を訪問れて自個が經歷せし一伍一什を物語りければコノ寛厚なる婦人は少女の物語に大方ならず同情を表し少女に向ひ「御身は寔に殊勝なる娘子にて在はすなり去れば今日唯今まで御身を護り給ひし神様は御身を見捨て給はさるべし神は恐らくは妾が所天をして御身の願望を成就せしめ給ふべし

御祐筆なる人はコノ時歸來り始終の様子を日の中に皇后陛下の上聞に達すべき由を約束し吾方にて食事を認め玉はれとエリザベスに申し聞こえ御祐筆は皇后陛下の宮殿へこそ參內しけり

斯くて御祐筆より詳らに上聞に達しければ皇后陛下には今夕六時エリザベス同道にて參內すべき旨御沙汰ありければエリザベスは身に餘る皇后陛下の有難き大御心にコノ吉報に接せしときには驚喜の餘り絶えも入らん風情にてありき

霎時茫然たりし後エリザベスは頓て元の吾に復り泪を湛えたる双の眼を天に向け「オヽ神様よ偖ては妾が神様の上に妾の希望を繼ぎしは徒事にてはあらさりしそかし」と叫び果てゝ少女は御祐筆の細君の双の手に接吻し嬉し泪を灑きけり

早や夕景にもなりぬれば御祐筆はエリザベスを伴ひて皇后陛下の宮殿に參內しけるが畏くも皇后陛下には最御手厚くエリザベスを迎へ給ひ親しくエリザベスの經歷を首尾事落もなく御下問あらせけるが最初の當坐は生來始めて斯る高貴の御前に伺候したることとてエリザ

ベスは身躰戰きけるが漸々に本來の吾に復り皇后陛下に打向ひ「オヽ皇后陛下よ妾の父は寃枉の罪に陷てあり妾は故なく父の救免を乞ひ奉らず仰き願ふは陛下の大稜威を以て妾の父の公事訴訟を再審し公平なる判決を下さるゝ樣仰出を乞ひ奉るにこそ侍るなり」

エリザベスの言上を聞食して皇后陛下には兩眼をシバタヽき給ふまでに感動させ給ひエリザベスの勇氣と孝心とを御感斜ならず渡らせ給ひ追て御仁惠の御沙汰あるまで當坐の費用としてエリザベスに金貨百枚下賜ひけり

エリザベスは皇后陛下の御仁德心根に徹して有難く八千代の椿優曇華の花咲く春に逢ふたる心地なし天に歎び地に喜びけるが何と皇后陛下に御禮を申上げん言葉もなく唯感涙に咽ぶの外はあらざりき

皇帝陛下には皇后陛下の御物語を聞給ひて士官ロプーロフの訴訟再審のことを其筋の有司に御下命あらせけり

斯くて判官の公明なる再審に依りてロプーロフの寃枉なりしと嚴かに認定せられ前裁判を破毀し無罪放免の判決を宣告され玆に始めてロプーロフは靑天白日の身となりけるが皇帝陛下にはロプーロフに對して莫大なる年金を下賜ひ猶ロプーロフの死後は跡に殘れる母娘にて恩賜の年金を相續すべき御沙汰ありたりと云ふ

前號の「有曇華の花咲き」とあるは「優曇華の花咲き」の誤。

菅丞相

（口繪の繪解き）

今は仲秋看見の夜にも近づきぬ。月に對して今古の感慨あるは誰も同じことなるが、我邦の歷史を知るものゝ月に對して等しく憶ひ出るに菅公が觀月の詠ならずんばあらざるべし。

菅原道眞は當時の碩學として、寛平の帝の知遇を受け、又延喜の帝に仕へて右大臣となりけるが、彼は多年の

專權者たりし藤原氏を抑ふるの意ありき。此時左大臣となりて同しく政を執りたりし藤原時平は、聲望の遠く彼に及ばざるを憤り、讒を搆へて遂に彼を陥れぬ。

彼は其子女と共に遠流せらるべく定められ、將に筑紫に送られんとしければ、歌を作りて寛平法皇に訴へけるやう、

流れゆく我身藻屑となりぬとも、
君しがらみとなりてとゞめよ。

法皇之を救はんとしたりけれども、力及ばず。彼は終に筑紫の大宰府に流されける。

斯くて彼は罪無ふして配所の月にさすらひつゝ、明る年仲秋の月に對して、懷舊の情に堪へずやありけん、一詩を賦して其意を述べぬ。

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣猶在此。捧持日々拜餘香。

時事一斑

井上毅氏

井上文部大臣毅氏は病を以て職を辭したり。清廉職に奉し、謹恪務に服し、文部省の積弊を革め、學風の浮虚を矯め、天下をして漸く實學普及の途に就かしめたり。氏の如きは、近時の文相として得易からざる人なり。而して今や其自ら下したる種を自ら刈るに至らずして謝し去る。亦惜むべき矣。

去るに臨んで

井上文部大臣去るに臨んで訓令を遺して曰く、

一體育は及ふたけ活潑なる運動を課するを要すへく普通體操に於ても亦兵式體操と同く手足及全身筋力の運動を活潑にし氣血の代謝を促すと同時に生徒自個に於て意氣快活を覺ゆるの效果あらしむべし體操の

弊は或は死法に流れ態勢を整へ並列を正すか爲に許多の時間を費し却て生徒をして厭倦の氣を生せしむるに至る此の如きは却て體操の精神を失ふものなり

二高等小學校男生徒には兵式體操を課するの際軍歌を用ゐ體操の氣勢を壯にすることあるへし又隨意科として簡單なる器械體操を授くへし

三小學校生徒は活潑なる運動に便する爲に不得已場合の外學校內に於ては洋服又は和服を問はず都て筒袖を用ゐしむへし

四放課時間に於て佇立閑語して經過するに終らしむへからす成るへく活潑に大氣中に運動するの遊戲を誘ふへし或は大聲急走嬉戲の態を以て生徒の不眞事と爲し沈靜を以て品行點に加ふるか如きは當を得たるものにあらす

五生徒をして筆記及諳誦を務めしむるは過度に腦力を勞せしむるものなれば特に必要の場合の外之を用ゐさらんことを要す

六小學校の課業の中生徒の尤困難を感する者は作文とす初級の生徒には作文を授くへからす若し簡單なる作文を授くるも此を以て試驗の問題とすへからす

七小學校に於て施行する所の試驗法は或は褒貶の意味に偏し點數に依りて每期席順を上下し又は賞與を予ふる等過度に生徒の神經を刺衝するの弊あり此れ獨り普通敎育の主義を誤るのみならず亦生徒の體育を害する者なり自今各學校は試驗に依れる席順の上下を廢すべし但各級に優等生若干人を撰拔し以て奬勵を示すことを妨けさるへし

八小學校に於て生徒は喫烟すること及烟器を夾帶することを禁ずへし

九華奢安逸は自然に軟弱を招くものなり都會の生徒の學校に往來する者或は車に乘るが如きは學校紀律の外に係ると雖校長及敎員は注意を加へて成るへく步

行せしむるに誘導すべし躰育衛生は彼が宿意のありたるもの也、而して未だ施設するに及ばずして去る。是れ此の訓令の遺されたる所謂なるべし。

吾人の宿論もほゞこれと同一なり。

反目嫉視

辻伊澤以下の教育家東邦協會の樓上に會して、朝鮮の教育制度改正に對する意見を敘べたりしに、三宅雄二郎氏、日本現時の教育家は封建時代の群雄四方に割據して互に反目嫉視したりしと同樣にて、共に大事を語るに足らずといふや、伊澤日下部などいへる人々罵詈騷擾を窮め、互に反目嫉視して物別れとなりたりとぞ。

三宅氏の苦言大に時弊に中る所なきにあらざればなるべし。

青山博士

萬死の境に入りて萬死の中を出て來る、吾人は北里氏と同功一躰なる青山胤通氏が宮本叔氏と共に黑死病調査より歸て八月三十一日東都に歸りたるを喜ぶ。武勳文勳其爲を異にして其績を同ふす。國民は世の武勳者を喝采すると共に、又此の文勳者を喝采せざるべからざるなり。

學校と近視眼

不完全なる學校衛生が近視眼を作ることの非常に多きは、前號にも記載したる所なりき。今某雜誌に載す所を見るに、大坂府尋常中學校の近視眼は生徒百人に付

第一年級　二四、五人　第二年級　三六、七人
第三年級　四〇、三　第四年級　二五、〇
第五年級　五〇、〇

獨逸に於ても亦同樣の顯象あり。即ち生徒百人に付

村落の學校　一、四人　市立尋常小學校　六、七人
市立高等小學校　七、七　高等女學校　一〇、七

實業中學校　一九、七人　文科中學校　二六、二人

而して其原因は敎場光線の取り方机腰掛の工合等にありて其最も近き原因は近き物を視る爲に眼を使用せしむるにありと云ふ。

通俗科學

大學に通俗出版局を設くべしと國民新聞はいへり。科學思想の普及を最も切要とするの現時、吾人は先づ科學の爲に最も之を希望せざる能はず。

海外傳道の失敗する原因

日本基督敎界に於て内外人の意向自ら背馳する如き傾きあるの今日、埒野悅輿氏は其原因を究めて彼國の信徒間に於ける海外傳道の動機全然間違ひおるに基すと云へり。

謂ふ、今日彼國の敎會に於て海外傳道の動機となり居る者は「同情」に非ずして「憐憫」なり。日本と同等の存在者と見做す「同情」の動機によらずして、劣等の存在者と見做す「憐憫」の動機に由るに因れりと。

而して更に叫ふらく、吾人が敎役者として朝鮮に臨むに當りても、同しく「同情」を以てするに非ずんば成功すべからずと。

日本と英國

日本と英國との通商航海條約は改正成りて、去る七月二十七日に批准公布せられぬ。

罪惡の因由

明治廿三年より同廿五年に至る間の謀殺者の因由とする所を見るに、

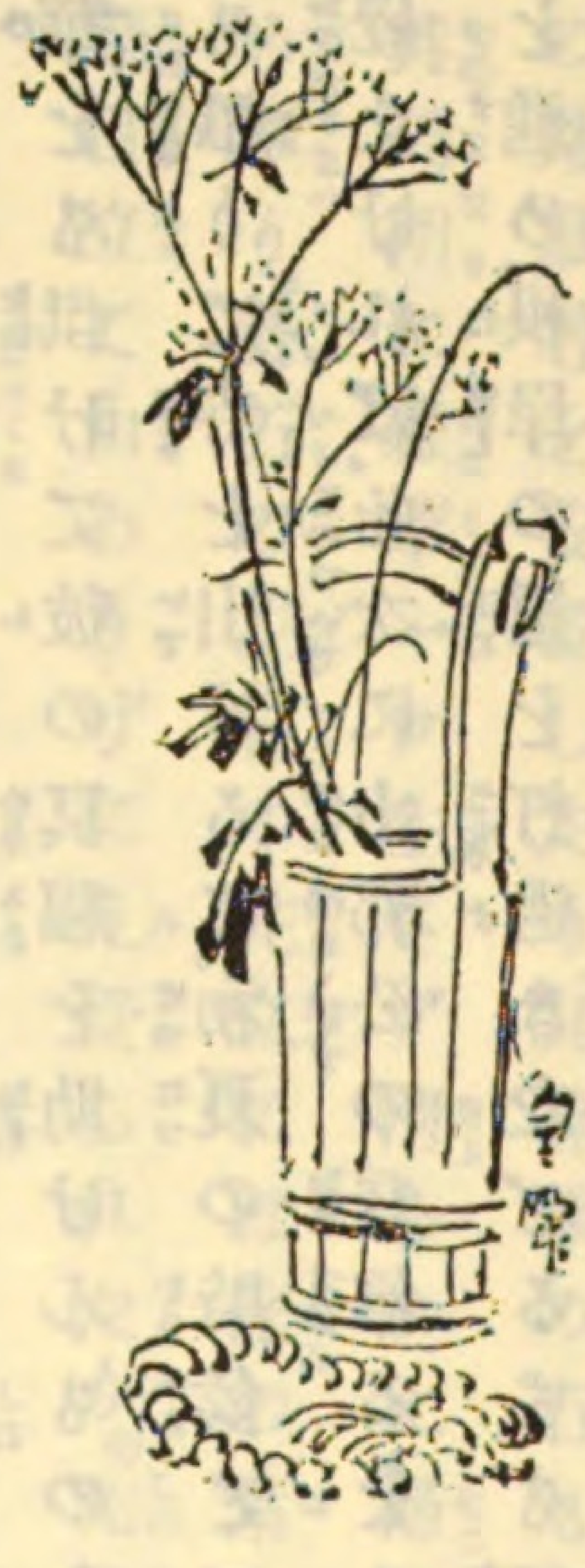
	貪慾	姦通	家内不和親戚利益ノ爭	失愛嫉妬放蕩	怨恨報仇	未詳	總計
男	一一人	一二人	五三人	五二人	六八人	三一人	二二七人
女	一一	二	三五	三	二	一〇	六三
合計	二二	一四	八八	五五	七〇	四一	二八〇

男子に於て最も多きは怨恨執仇に原因する犯罪、男女共通に多きは家内不和親戚利益の爭、次は男子に於ては失愛嫉妬放蕩に基けるもの、女子に於ては貪慾なり。

家庭雜誌第參拾七號附錄

（明治二十七年九月十日發兌）

文藝



尼法師

櫻痴居士

○三河島

今年五月十五日。上野なる某院と申す寺にては彰義隊戰死の諸輩の爲に廿七年忌の法會を修すると聞え。又谷中なる某寺にても同じ法會を行はるゝと聞えたり。余は彼の彰義隊とは

初より方向を同うせさりしかば。其諸輩とは關繫も薄く。爾のみならず余が當時の議論は懋に彼諸輩の怒を招きて。既に其刄の霜ともせさるべき危難に遭ひたる事もありき。左れども幷は廿七年を經たる過去の事にて今は歴史上の物語とは成りぬ。何どて露ほどの恨も懼も余が心の底に殘るべき。殊更かの諸輩は同じ樣に幕府に仕へ同じ樣に主家の事を思ひたる朋輩なり。其方向こそ誤りたりと云はゞ云へ。三河育の德川武士、飽まで意地を張通すてふ氣象をば先祖より繼承たるは。旗本八萬騎の多かりける中に。此諸輩にぞ其名殘を遺したる。資ては今日の法會に値ひ香華をも供けて彼の冥福を助けんものをとて。午過る頃より上野谷中に詣で。法の如く其法會も畢りて寺を出けるに。初夏の時候とて日脚の永くして未だ黄昏には三四時間もありぬと覺えければ。此次に山郭公の音信るをも聞き卯の花の咲出るをも眺めばやと思ひ定めて歩を進め。根岸の里を打過きたどるとも無く三河島の郷の方へ赴きたり。一叢茂る森の中に古寺の家棟の樹間より見ゆるが何と無くゆかしく思はるゝ儘に畔道を近廻りして寺の門を入りて見たれば。原來大きからぬ本堂の半荒て古さびたるに。住持の僧は庫裏にや居たるやらん。本堂を守る法師も見えざりけり。左はあれ此寺の門に入つる上は爭で其本尊に訪問の禮を行はずして善かるべきと屹度思ひたりければ。恭く賽錢の禮物を呈け奉りて禮拜を行なひ。事の次に境内の縱覽を許させ玉へと乞ひ。其默許を得て本堂の右の方の樹木ある處へぞ進みたる。此は此寺の繁昌なりし頃には庭園を好事に築きたり

と見えて。藻草の生茂れる池も夏草の蔓れる阜も其餘情を留めて中々〱に見所あり。是を現時世に時めける紳士等が富に誇りて造り出せる庭園の俗氣紛々〱たるに比ぶれば遙に優りたる樣には覺えたり。

斯て此庭を通り過て生墻の外に出たれば。此は印塔塲と稱ふる寺内の墳墓地にて。其檀越に然るべき家の存せるが少きと覺しくて新しき墓石は其數は稀にて。苔蒸たる墓の碣のみ累々たり。◎然るに此印塔塲の西の隅の一樹の栃の木の下に竹の釘拔を結廻したる中に小さき土饅頭を築き其上に一個の地藏尊を安置したり。其尊像の石も臺石もはや古色を帶たれども苔も蒸さで傾きもせず其周圍に雜草一ッ生さず清らかに掃除して今しも汲たる阿迦の水にて尊像も土饅頭も淨め奉り。臺石の左右の花立には樒の葉を供へ。中央の香爐に線香をぞ焚きたりける。事の躰一際目立て由ありげに見受られたり。◎此尊像の前に一個の尼法師。年の頃は四十七八歲にもあるらん姥櫻のはや老朽て顏には皺の波を所々〱に寄せて見る影も無けれども。其面容眉目の淸かなるを見れば其盛はさこそと思ひ遣られて他目ながらも昔忍ばるゝ心地せられたり。肌には鼠木綿の袷衣を着て墨染の麻の衣を身に纏ひ香染の麻の袈裟を掛け槁蓆を敷き端然として其上に坐し。夕日の炎が其身を照して燒くが如くなるを更に貪着する色も無く少さき摺本の御經を兩手に捧げてしめやかに無量壽經を讀みたるが節も亂れず聲も澄渡りて尤貴く聞えたり。◎其尼法師の後には二人の幼き子あり。一人は七

八歳ばかりの女子にて縹地に白く菊の花を染出して點々に紅緑の彩色したる紬の袷衣を着て紫繻子に緋の板締縮緬を腹合たる帶をやの字に締め髮は額を切下て禿になし頂上に少さき銀杏返を結ひたるが。面白く口元しまりて愛嬌を含み年盛に及びなば天晴美人と稱るべき姿質をぞ露はしたる。今一人は五六歳の男の兒にて眼大きく頬豐にして軀幹の肉も滿ち何さま逞しき雄夫の嫩葉とも見ゆるが。木綿袷の上に葛の袴を裾短に着て。伴の女子と共にいと長しやかに楓の如き手を合せて同じ樣に彼の地藏尊を拜み居たりけり◎事の躰何かは知れねども由ありと思はれたる程に。余は彼尼法師等の勤行の殊勝なるに心動き妨害しては悪かりなんと思ひ量り心附かれぬ樣に去ばやとて一旦は足早に原の生墻ある方へ歩を返したりけるが。去にても後髮引かるゝ如き念を生して去かねたれば再び生墻の邊に身を寄せて暫く打見たりけるに。彼尼法師は讀經を畢りて靜に經を懷に納め念珠を押揉みて口の中にて佛名を唱へつゝ。尊像を仰き拜しては兩眼に涙を泛べ絶入ばかりの悲傷を女兒等に見られんも耻かしと思ひてや。衣の袖もて落る涙を押拭ひ後を振向て二人の兒女に向ひいざ御別の禮拜せよと誨へ倶々に叩首て名殘をしげに尊像の前を立ち。自から水桶と樒とを左右の手に持ち兒女を伴ひて庫裏の方へ赴きたり

○墻采女

余は此尼法師の躰いかにも仔細ある事と思ひたれば。例の好事心にて其樣子を聞たき儘に

寧そ後に續きて庫裏へ徃き親しく其人に面會するか爾らずば住持の僧に逢ひて問はま欲しとは考へしが。否々さる無遠慮の擧動なすべくも非ずと思ひ反して此日は其塲を立去りて我屋へ還りたり。◎去にても此一塲の狀况は兎に角も心に蟠りて思ひ廻す程ます〳〵不審を積たれば。遂に二日を經て十八日と申すに再び彼寺に赴き住持の老僧に面會なして彼地藏尊の由來かつは彼尼法師の事を質ねたるに。老僧は余が問條を聽き畢りてハタと膝を撃ち。宜こそ御尋は成されたれいでや其仔細つぶさに語り聞かせ參せんとて說出して曰く『過去を顧みて指を屈へばはや廿七年の昔語とはなりて候ふ。頃は慶應四年(即ち明治元年)五月十五日の事なりしが曉方より梅雨の細降して世も何と無く心細く思はれたるに。正しく上野東叡山に當りて俄に砲聲の烈しく聞えたり。何事ならんと打驚きて門外に走り出て見れば。白き烟は森を隔てゝ彼處此處に立上り其上に人叫び鬨聲喇叭の音砲聲と倶に聽えたり。すはや上野には合戰の始まつたるぞや。御山に立籠れる彰義隊をば官軍が總攻には爲しつるぞや。早う逃よ。疾う走れよ。流彈に中つて怪我なせそと。男女老弱の別なく我先にと轉びつ蹶びつ西へ北へと逃走れる樣は。思ひ掛なき修羅の衢を唯今こそ眼前に見る心地せられて餘りの怖さ恐ろしさに。拙僧は急ぎ自から寺門の扉を鎖固め。おはれ戰爭の狼籍を兎かれさせ玉へ寺中に候ふ人々の命の無事を守らせ玉へと本尊に願き奉りて事の果るを俟てる外に他事なく候ひき◎扨も其日の未下る刻に(午後三時)勿躰なや東台の山門中堂本坊を初と

して來り一山の堂塔伽藍みな刧火の爲に黒烟と成りて炎上なし見る目も空恐ろしくて候ふ中に。落武者の後を追掛て彼方にては射て殺せしぞ此方にては打て取りしぞと門外にて往來ものゝ噂するが手に取る樣に聞えたり

斯て申過たりと思ふ頃に(午後五時)庫裏の後に當りて人の呻き惱る聲の唯ならず聞えて候ひければ。愕く心を押鎮めて雛僧を召具し庭傳へに覗ひて見れば。こは何に。一個の武者の總身血に染み痛手餘多負ひて息も絶々なるが。裏手の墻根の隙を押破りて逃入たりと見えて。松の樹の下に倒れ伏してぞ居たりける◎急ぎ寺男ども呼集めて彼武者を引起させて介保したるに年の齡は廿五六歲ばかんなる若武者にて日の丸の袖章つけたるは聞ゆる彰義隊の一人とは知られたり。武者は苦しき息を吐きて。水一口賜はれと乞ひて寺男が與へたる茶椀の水をグッと呑乾して。御情忝ふ候ふ迚もの事に早く我首打て此苦痛を免かれさせ玉へと申たり。拙僧承はりて。思ひ寄らざる事を宣はせ玉ふものかな。法師の身にて爭で人の命を絶つ法やある。追手の來ぬ間に疾々落させ玉へと勸めたるに。彼武者は首うち振りて。否々今日の合戰敗北の上は我一命固より德川の御家へ捧げ奉り候ふ覺悟なれば今更何地へか落ち候ふべき。但し名も無き陪臣どもに首を取られ。德川家の砲兵組頭塙釆女信繁をば何某の若黨が打取たりと名乘られんと屍の上の耻辱なれば。心靜に生害せんとて追取り卷たる官軍の簇る中を唯一人にて打破り根岸口より此所まで落延て候ふが。今は腹かき切らんにも

痛手に心屆かねば。此上の御芳志には御引導の御介錯を賴み參らせて候ふなり。苦痛を救ふて活す事も、また殺して苦痛を免かれさするも同じ佛の慈悲にては御座さずや。誰にてもおはせいざ此腰刀にて僕が細頸落して玉へよと望めども。介錯せんと答ふものは一人も候はざりき。あな言甲斐なき人々かな。さらば苦痛を忍びて自から生害いたし申さん。引導なして玉はれよ。最後の樣の見苦きとて嗤はせ玉ふなと云ふまゝに。腰なる短刀扱持て拙僧が授けたる十念を高らかに唱へ己れと咽喉にグサと突立がバと打伏し人々が異口同音の、念佛に導かれて其儘に絕入たりけり

『此遺骸いかにすべき。市の廳へや訴ふべき。里正へや告知らすべき。何はせんと一寺のもの打寄りて評議したりけるが拙僧は人々に向ひて。此塙某とやらん云へる武士が我寺の境內にて生害し計らずも我等が念佛の引導を受て往生したるも淺からぬ因緣ぞかし。然るを其屍を曝させんと罪業尤も深かるべし。後日に至り公の咎あらば拙僧一人の身に引受て何なる御沙汰をも蒙らん。屍は境內の卵塔塲に葬り埋めて密かに廻向供養こそ致すべけれと申したりければ。皆これに同じて倶に力を合せ其夜の中に如法の沐浴させ經帷子に着替て棺に納め讀經引導の式を密々に執行ひて後に栃の木の下にそと葬りて其遺骸を隱して候ひき。但し彼武者が最期に至るまで着したる衣服鎖帷子大小および所持の品々は一ツ櫃に納め。他日由緣の人に尋ね合はゝ交附申さんが爲に土藏の奧深き所に秘置て候ひき

○女性

老僧は澁茶を余に勸め己も飲て咽を濕し。更に物語を續きて曰く

『明れば同き十六日の午頃。拙僧に面會を望める一個の女性あり。座敷に招じ入れて對面したるに。其人は十八九ばかりなる勝れて麗はしき女性なるが。單衣の裾高く端折り胸高に帶引結びて利々しく裝束ち眼中血走りて半ものに狂へる如き顏色を顯はしたれども。自から心を制してや行儀正しく初對面の挨拶をなし。詞靜かに拙僧に向ひて。卒爾にては侍れども昨日此御寺に落武者の參られては候はずやと尋られたり。拙僧ハッと打驚き胸うち騷きしかど明らさまに云ふべき事ならねば。否々さる事は候はずと事も無げに答へたり。否とよ上人御隱しあらんは罪深う候らへ。妾こそ其落武者の由縁の者にて候らへ。彼人の行衞生死の程を尋ね究めんとて今朝まだきより上野谷中根岸と彼方此方を尋ね廻りて此邊まで參りて候ひしが。計らずも此御寺の後の籬の外にて此如く燧袋を拾ひて候ひぬ。此袋は妾が手つから製らへて彼人の上野の御山に籠らせ玉ひし時に短刀の栗形に紐もて結び附られし品にては候ふなり(とて燧袋を示して)斯る證據の候ふ上は隱させ玉ふは中々に心細う覺え候ふ。明させ玉へとありければさる證據の候ふ上は時機によりては打明べきが。シテ其殿の假名實名は。疎てや御僧。かの人の生死の程も知れぬ中に彼人の名乘を輕々しく申すべき者の候ふべきや。實に尤の御答よな。左あらば若も其殿官軍の爲に討たれ玉ひぬと申さば如何に。さ

こそは嬉しう覺え候らはめ。討死は兼ての覺悟にて候ひつるものを。雄々しき覺悟天ばれ候ふ。但し其殿は拙僧が計ひにて昨夜官軍の手に降參せられて候ふぞ。否々彼人に限りては力盡て生捕にせられたらんはいざ知らず手を束ねて降參する程の腰抜武士にては候はず。但し討死し玉ひしか然らずは生害し玉ひつらんは必定と存じ候ふ。さ宣ふ上は告げ參らせん。誠は昨日の夕この寺にて生害して果て玉ひて候ふ。それは定にて候ふか。シテ其證は。御覽に入れ參らせんとて拙僧はやをら立て土藏の中より彼一櫃を取出して其中より肌着太刀など二品三品取出して女性に見せたりければ。女性は兩眼に堰來る涙をば血汐に染たる彼武者の遺念の肌着にて拭ひ顔に押當てワッと計りに泣入りしが。氣を勵まして。覺悟の上とは申しながら良人の生害と心紊し拙劣き躰を顯はし耻かしうこそ候へ。今は何をか包むべき其武士こそは妾が二世までもと契りたる良夫にて爾も旗本八萬騎の其中にて三河御譜代の家柄と知られたる塙釆女信繁と申し丶兵士にて候ひしなれと明したり。拙僧も此上はとて乞はる丶儘に昨日落武者が最期の躰ども落も無く物語りたりければ。女性は嘆の涙に噎び聲曇らせて。未練とや思召し玉ふべきが今世の別に責て一度死顔を見させて賜せ玉へと只管に賴みたり。一旦葬りたる死骸を再び堀發さんは佛家の戒と云ひ且は憚ある事なれども女性の心底の程も察したれば其夜深更に及びて寺男に吩咐て密に堀發して其死顔に對面を告げさせて此世の名殘を惜ませては候ひき

○釆女の妻

『女性が嘆の中の喜びは良人が最期の雄々しかりしと殊には臨終の砌に臨み拙僧の導に値遇して引接の悲願空しからず攝取不捨の光明に黄泉の暗を照されて彌陀の淨土へ赴き玉の事の有がたさよと幾度とも無く伏拜ては泣き泣ては伏拜み再び源の如くに葬りて後に庫裏へ來り扨て拙僧に對ひて申されけるは。妾は城戸主水光高と申して三千五百石の知行を領せる旗本の二女にて名をば衆と呼び當年十八歳にて候ふ。去年七月亡夫釆女の許に嫁ぎて候ひしが。間も無く上國の騷にて夫にて候ひし釆女は十二月の初つ方より部下の兵士を引率て大坂へ登り伏見の敗に手を負ひて紀州路より江戸へ歸り其後は同志の人々と心を合せて彰義隊に加はりて常に上野に籠らせて候ひき。去る十三日の夜駿河臺鈴木町なる邸へ歸り來り妾に對はせて。扨も德川家の御代も今日はや限りと覺ゆるぞ。上野に籠りて徒らに官軍を引受け一戰に及ばんと無謀の至り迚も勝利の算はある可からずと切に論じて諫むれども。同志の輩みな擧つて此議に服せず。果は我をば操を變たる臆病武者なりと嘲り。甚しきは官軍の爲に二張の弓を引ものならんと迄に疑ひ合へり。此上は力なし初よりして御家の爲に。一命を捧げんと疾に覺悟を極めたる釆女。明日にもあれ明後日にもあれ官軍より旗差向られなば眞先掛て防ぎ戰ひ太刀の刄の續かん程は目に餘る寄手を引受て切捲り一陣全く落城に及ばゝ潔く討死するか爾らずば生害を遂げ德川武士の譽を後に留むべし。

和御前は年若き身、ことに御父主水殿には官軍に降り王臣となつて身の安泰を謀られたれば氣遣あらじ。速に實家へ歸りて情あらん人に見えさせ玉へと申されたり。あな情なき御詞かな何ならん境までも同じ路をと契りてし小夜の寐覺の睦言は皆僞言にて候ひけるか。武士の討死忠義の爲の御最期なとて未練に止め奉るべき御後の御孝養は妾よきに計ひ奉らん。去ながら强ての討死は武士の不覺とやら承はりて候らへば必らずとも逸早く早まりて犬死な仕たまひそと。胸の痛の碎るばかりなるを押忍びて勇め勵まし參らせしが覺悟の上とは云ひながら今世の愛別離苦にて候ひしか。去程に昨十五日の上野の戰爭良人の身の上如何ぞと心も心ならず。落城と聞くと其儘に邸をそと驅出して上野までひた走りに走り付たるに。官軍の兵士前後の門を取固めて入れさせねば詮方なく取て返し。今朝まだきより再び上野へ參り彼方此方に討死し玉へる方々の死骸を見たれども。夫の形の見えざれば是まではたどりて候ひしなり。夫に付ても是なる唐の鏡は妾が最愛したる品にて候ひつるを。十四日の曉に夫の立出て玉ひしとき。御身の護に候へば肌に附させ留たまへと奉りしを。最期の際まで持たせ玉ひしこそ嬉しうは候ふなれ。とは云へ是が遺念と成たるか、と。流石に猛き女性も嘆に前後の辨も無かりけり

○尼法師

『其後は此女性七々日が其間は忍びやかに毎日佛參して怠らず。中陰百ヶ日の法會も人目に

立たざる樣に執行ひ若干の黄金を持來りて亡夫の石碑を建んと乞はれたり。去ども其頃は朝敵たる賊兵の墓碣明白に建んと公への憚ありければ。故と地藏尊の像を彫ませて標となし亡人の戒名は位牌に記し我寺の過去帳にも書入れ其事の由は密に書留て秘置て候ふなり

『かくて女性は其翌年亡夫の一周忌と申しゝ時に一人の孩兒を懷かせて參詣なし。扨も此娘こそ亡夫の忘記念にて。昨年七月誕生いたして候ふなり。夫が最期の砌に佛の道に入ばやとは存じ候ひしが今日まで猶豫ひしは此故にて候ひしぞとて。拙僧を招じて導師と賴み。十九歳と申しゝに緑の黑髮をば煩惱の雲と共に切拂ひて夫の實名と已の呼名とを合せて信兼尼とは法名を附たりけり

斯て其後この尼法師の信兼尼は道德堅固に佛門の修行をなしたりければ。廿餘年の勤學にて今は一宗の長老上人たちもおさ〳〵及ばぬ程の碩學とは成らせられたり。東京におはす時は毎月三四回は必らず墓參を怠らせ玉はず。偶々錫を飛ばして諸國を修行し玉ふにも。五月十五日には必らず歸り來りて法の如く詣て玉ふなり。足下が去日に見玉ひしは即ち其尊き參詣にては候ひけるぞや。又その時に伴ひ玉ひし兒女は。其男兒は信兼尼の孫の某。その女兒は實家城戸某の娘。この兩家とも由緣の人々は少なく成ゆきて今は此男女二人のみ殘りて是も尼が養ひ育て玉ふなり

右は老僧が長々の物語なり。此尼法師の身の上および二人の兒女を尼が育める事に就き猶聞たる物語もあれど茲には記さず。尼が今の住居かつは三河島の寺の名も顯に記すは尼の意に悖るの恐ありと老僧が止められたる故に。余も其意に隨ひて言はず。唯この尊き尼法師の貞節を記すに筆を止むるなり





次男　上

湖處子

茅屋瓦屋樹木の間に見え隱れ、南北に流るゝ田舍の一すぢ町を漏れ、焰の如き田園の赫氣に蒸されて立てる艸屋に、亭主の勘は日中とも云はず賭將棊場より歸り來り、腰折團扇はけしくつかひつ、眼くぼみ頰落ち、産後久しく快復せさる女房みよに向ひて、呵るか如く、

「何なりとも、疾く晝食を食はせすや」。

この聲に驚ろきさめて啼き出す乳兒に、女房はつるし柹の如き乳房を與へて、膝にて搖りつ。

「何も晝飯にするものはなし」。

「何にても宜し。ありあはせたるものにて宜し。是よりまた行く處あれは、疾くすへし」

「何にて宜くとも何もなし。茄子にても、南瓜にても、持ち來玉はゞ、如何ともすへけれと、何もなければ何も出來す」。

勘は勃然として聲を高くし、

「さらはこの長き日、便々と何をか爲つる。母屋にゆきても借らさりしか」。

「返すとならはゆきもすへし、借るとのみにはゆかれもせす」。

渠は愈聲するとく、

「さらは我に何も食さぬつもりか、汝は、能のなき女房持つたる男ほと、あはれなるものはあらす。ともすれは乾し殺されんとす。一昨日の南瓜は如何にしつる」。

涙は女房の眼にうかめり。

「情なき事を云はるゝ、南瓜一個いつまてかあるものぞ、愛しみては食へしかと、昨日の晝にはなくなりぬ。昨日の晩友か爲めに蜀玉黍一個を得たるのみ。妾は殆んと斷食同樣今の今まで茄子皮の一片たにも食せされは、子は泣けと、乳は出てす、何をせんにも腹すきて、立つとも出來すなりぬ」。

と前垂を顏にあてうつむきて音を飲みぬ。勘は益不機嫌にて、

「曉々し。歸るたひ〳〵苦情八百、かゝる家には歸りたくもなし」。

と、みよか後の壁につきてすゝれ童たよひて、

「友、友、泣くな、泣くな、我が後について來よ、旨きものを買ふてやるへし。泣くな、泣くな、泣くとかは」。

此時に當りて、遙かに聳ゆる南山の嶺に、夕立の雲起り、殷々として霹靂の聲聞えつ。渠等が家主金非乙也は作事服に笠をかふり、蜻蛉飛ひ聚ふ野路を急ぎ歸りつ、四五歩この家を行き過ぎたるか、勘か聲を聞き、ツト引き返して音なひぬ。ワンと迎へて散たる蠅、又群かつて渠につきぬ。渠は赫々たる日光中より、遽かに家内に入つて身邊くらく〳〵、勘を見れば青鬼の如く、みよは更に幽靈の畵の如く活きたる色なく、久うして常に復りぬ。されと勘は平生よりも怒りふくれ、みよが涙をかくす笑顔の歡迎もさびしく、差し當つて取りつく島もなければ、渠は大に悄氣かへり、餘儀なく友に呼びかけぬ。渠は其得意の微笑より成れる親切面を以て呼べり。

「友や、友や、何とて泣き居る、何とかしつる」。指にて板張を輕くタヽき、

「來よ、こゝに、こゝに來て譯をつげよ」。

「往きね、往きね、來よと旦那の宣ふに」。

と、泣き止むで猶ほしく〳〵と聲をひき居る友を、母は手にて推しやりければ、友は目こすり〳〵乙也が前に手をついて跪つき、初は唯指を甜りて板張に書くのみなりしが、屢問はれて默し得ず呟く如き小聲にて答へぬ。

「空腹」。

「今日まだ晝飯を食へさるにや」。

「昨日の晩、蜀玉黍一個食へたるまゝ、今朝よりまだ何も食べねば」。

みよが涙は湧き返れり。勘は獨り空嘯ふきて、聞けども聞かざる爲を爲しつ乙也はいとゝ友を憐れみ自個と一處に來らは、多く玉蜀黍を與ふべきことを友に約し、かくて後渠は南山の雲行を暫らく見やり、いとうちとけて勘にむかひ。

「勘公今日雨ふるべき乎」。

勘は猶ほ空うそふきて、

「我は天にあらず、いかでか雨のことを知らん」。

乙也は心中深く渠が暴言を叩めりと雖も、強て動く心を靜めて、

「然り御身は天にあらず、御身に雨を問ひしは愚なりき、そは置きて、今日雨よりさきにと、粟まきを急ぐところに、人足らず。幸ひ御身の聲きゝとめて立ちよりぬ。暇ならば手傳へくれ玉はずや、さすれば米ならば一升、錢ならば十錢、いづれとも御身の所望にまかせん」。

世を白雲と烟のみ吹き居し勘も、最後の數言に嘔吐んばかりの面つきして。

「へ、、――米ならば、一升、錢ならば十錢へ、、――」。

乙也は少しく赤面して、

「不足なりと云はるゝ乎」。

「誰も不足なりとは申さず」。

「然らは何を笑はるゝや」。

「人を見れば日雇かせぎと思ひ玉ふ、分限者根生が氣に喰はざるのみ」。

女房は居たゝまらず、

「左様に腹を立てずとも、何卒往いてたひ玉へ。このまゝ遊びくらし玉はゝ、晩には我等に何かなるべき。妻子をは助くとならば、何卒ゆきてたひ玉へ」。

「默り居よ。往くと往かずと我が勝手たり。我は今より往く處あり」。

と、飛び下りて戸を出でければ、乙也は三たび。

「いづくに往かるゝか知らねど、賭將棊ぐらゐならば、惡詩の方ましなるべし」。

「くどし、くどし、米一升でも、錢十錢でも日雇かせぎ今日は不在なり。一咋日來玉へ」。

と、尻引まくり、鼻歌謠ひて出でゆきぬ。如何はかり心霽れたるものならん。

そも渠は市井の無頼と生れしものにはあらず、かの南山の麓に村あり、渠は其村に於ける一地主の子にして、渠はその次男に生れぬ。當時世は次男の位置を定めず、其運命を以て、單に父兄の愛憎に附したり。是を以て、其の好運なるものは、渠が友たる次男の中にも、父の遺産の分けまへに、その十が四を受くるものあり。その平分されたる一半を領するものあり、少なからぬ。學資金を身に加へられながら、猶ほ少なからぬ配分を得るものあり。甚だしきに至りては、

父の隱居料を以て來附するが故に、長男よりも多くを享くるものありき。然れども渠は獨り是等と異なりき。

渠が父は謂らく、祖先の遺業は長子に屬す、一塊の土も分つを許さず。次男以下は我が贏け得たる所を分てば足ると。渠は胎内に於て、既に父に憎まれ。その生るゝや、憎まれ子として育ち、學校に上げられしかども僅かに地名人名を記するに至りて、忽ち下げられて農場に遣られぬ。渠が兄の相續人として鍾愛せられ、風流社會に長せしにかへ、渠は僮僕と共に野良に人となりぬ。兄の衣服の流行を追ふて截たるゝにかへ、渠が年より年に、作事服の外當て行はれざると僮僕の如く、食する時、臺所の板張の外、坐を有せざると僮僕の如く、節季祝日にあらざるよりは、黄粱飯を許されざると僮僕の如く、兄の過失は屢看過せらるゝにも拘はらず、渠が過失は叱責せらるゝと僮僕の如し。兄は常に父に伴はれて、親戚交游の佳賓たるも、渠が其父の親戚交游に於ける、僮僕の如く籠を擔かせられて徒らに使役に充たさるゝのみ。渠が僮僕と異なる所幾はくもなし渠は易らざる僮僕のみ。

親戚等は渠が父の爲る所を醜として、渠を諫むると盡せりと雖も聽かず、曰く我家の次男は君が家の次男と異なりと、其意勘を僮僕に歸るにありき。何となれば渠が次男以下に分與する所として、渠が贏け得たるものは、餘りに多く酒錢に變はり、土地とし殘るはいと僅少なればなり。

渠は自個を憎むの父に對して、孝養すると能はざりき。渠は自個を憎むの父に對して怨咨の念を抑ふると能はざりき。渠か長じて頗ぶる父の意を解するに及んで、云ふも淺ましきとなれど、自個を憎むの父に對して、時々、復讐の念を禁する能はさりしなり。

是より先き、渠か家の舊僕にして嘗て渠か犂鋤の師たりし吉藏と云ふもの、徒手を以て主人の贏けしものより多くを贏けて、今も猶ほ渠か家の元老として、渠か家の背に住めり。吉藏夫妻はみよと呼び、勘より四五歳劣りて、美にはあらねど愛嬌ある一人娘を持ち、暗々裏に善き養子を索ねつゝ、豐かに暮せり。渠はもゝの反面よりして、夙に主人の秘密を看破し、深く勘に同情を表し、妻と語りて勘か運命の拙なきを歎きぬ。其家の庭は後門出入の道に當るか故に、渠等の家は興味ある毎に停めて渠を勞へり、みよは幼きより勘と知れり。折々は渠の飯事仲間なりき。渠か農場に出て初しより十餘年、一日の如くみよと相見き。みよは父母の勘を語るを聞くとに、心を留めて一語をも失はす、夜々それを繰り返して、ともすれは涙枕を濕ほしき。勘も亦表に出つれは、世を擧つて自己を輕蔑するが如きを見て、面白からす、裏門を出て、此家に遊び、吉藏夫妻と語りて其尊敬を博し、みよが自個に媚ひるを見、不平を忘れつゝありしか、一日遽かに慨歎して謂へらく、父に報ふるの道こゝにありと。

渠謂へらく、子を子とせさる父に對して、最も正當なる復讐は、子も亦父を父とせさるにあり。父を父とせさるの道は、父の與ふる所を拒絶するにあり。我身を吉藏に投してその產業を得

は、父の配分を恥かしむるに足ると、渠は斷じて意を決し、公然と女の家に寐ね、復た父の天井の下に返らざりき。吉藏夫妻も心に快しと思はざるも、一人娘の愛に溺れて、主人の子を濟まずと云ひつゝ、遂に偷みぬ。慘酷なる父は、初めて務めて見ざる爲して、其の回すべからざるを待ちて赫怒して渠を逐へり。親戚等も亦其の迹を見て其情を察せず、相唱和して渠を咎め、渠を其の墮つるに任せぬ。

勘は思ふが如く父に報へり。吉藏は願ふが如く好き聟を得たり。勘とみよとは各其愛を滿たせり。吉藏夫妻は地を借りて小作し、其所有を擧けて若き一對に讓れり。勘は此家に君とし臨み、みよは渠が爲に男子を擧けぬ。渠が爲に世は遽かに樂しくなりぬ。渠は心に始めて幸福と云ふ感覺を感しぬ。渠は一倍、善人となれるを覺えぬ。然れども其の浮きたる情熱、夢の如くさめたる後、冷かに世相を見、渠が兄の渠が拒みし所を併せて愈大きく、其朋等の新たに好運なる分配を受けて、各々人に敬愛せられ、自個一人誤て艸莽に埋もり、復た世に顯はるゝの期なきを見て、嫉妬悔恨の鬼に襲はれぬ。

渠は既往を追懷して、その父に報ゆるの前、猶ほ多く爲すべきものありしを發見せり。渠は世の次男が往々にして執るが如く、親戚に依つて父に請はしむるの手段を逸し、父より受くべき所と今有てる所と兼ね得べき手段を怠り居き。然して又其の父へ復讐の罰として、心憎み、其の擇んで取りし所の地位が棄てたる地位より惡かりしに氣つかさりしを發見せり。渠は

心狂はしきまでに自ら責めぬ。然して最後に父の陷るゝ所となれる悟るに及んで、渠は怒氣心頭より發し、父の家を睨んで勝手に爲居れと絕叫せり。渠は父を憎めり。兄を憎めり。朋を憎めり。財產家を挙つて憎めり。凡てのもの皆渠が爲めに憎くなりぬ。渠は吉藏夫妻を憎めり。妻といへども假す所なし。渠が猶ほ一點人らしく見ゆる所は、嬰兒に對する瞬間のみ。渠は今著しく變れり。渠は及ぶもののなき勞作者より、一轉してぶらつきとなれり。[illegible]太郎となれり。酒のみとなれり。怒上戶となれり。遂に市井の無賴となれり。吉藏は愁ひ死に、その妻も亦夫に從ひぬ。吉藏死して渠が狂亂は一度を加へぬ。渠が嚮に父を恥かしめたる僅少の土地も、今は其の多くを失へり。渠は遂に故鄉を憎めり。渠は殘れる土地と家とを賣つて此地に來れり。

此地に於て渠は先づ母屋を憎めり。母屋の主人が、みよを憐むで小作地を借し、賃して彼を使ひ、事ある每に出入慰問するを見て、之を憎めり。夏の初、みよが再ひ產の劬勞を嘗めて、久しく肥立たず、渠が賭將棊も、一家の飢饉を支ふる能はさるに當りて心實に主人臨時の恩を德とすと雖も、渠かいつも恩人顏して入り來るを見る每に、心より湧き來る憎惡の情を忍ぶことを能はさりき。渠は今日乙也を罵ることに由つて、心中の黑雲を吐出し久しぶりに日本晴の思をなしぬ。

中

乙也は十二分に凌辱せられ慚憤胸を衝き來ると雖も、みよか夫を愛するを知か故に、強て躍る心を抑へ、膝の子を布き締めんばかりにひれ伏して、夫を詫ひる女房を慰め、友をつれて後門をくゝれり。

渠は平素勘か恩を受けて恩を謝せす、却て家族を自個の慈善に托して遊ひあるくを憎めり。然れともみよか爲に渠をして力作者たらしめんの情、亦實に切なりき。今日渠か其端を發して、好意却て罵殺せられたるは、渠かため大打擊なりき。

渠は今後門をくゝりて、いと廣き菜園を見、芋茄子、大角豆と、目に滿つる野菜の欣々として自個を迎ふるか如きを見、幾分か胸もひらけぬ。然して猶ほ今日の事は誤つて犬に眞珠を投け與へたるに過きさるを思ひ、然して猶ほそこに敵を愛すと云ふ、人間最も高き復讐の道あるを思ひて、轉た自ら慰めぬ。渠は今日光を遮つて蔭いと青き南瓜棚を訪ひ棚よりさがれるものゝ裡巨大にして深黒なるものを撑へて、蔕を折り、徐ろに友か頭に重ねたるに、南瓜は頭より三倍ほとも大なりき、友は嘻々と空腹を我慢して、暫くは之れを頭に戴き、既にしてまた双手に提け、既にして又腹に抱へ、遂に取り落さんとしけれは、乙也は憫笑して我か手にうけ取り、代りとして途を夾む蜀玉黍の、數多赤頭の子を懐けるを、二個三個擇ひ斷きて友に與へ、中門より乾塲に入れり。

濶く廓かにして裡、自ら涼風通する大厦の臺所に、晩の馳走にと唯一人臼に向ひて蕎麥を粉

し居たる細君は、欣然として迎へたるは、裏の戶より歸り來る良人よりも寧ろその手に持てる大南瓜なりき。南瓜の傍に置かれし時、細君は手をかけて、先つ其重きに驚き、反して底の臍を熟視しつゝ、是なり是なり、僕たちか日本一の味南瓜と評しあひしものは是なり。これは定めて旨かるへし、この皮黒さ黒雲の如しと。友か兩手を合はせて持ち來りし蜀玉黍を見て、好きものを持てり、その一個を我になどほとめきぬ。

此間主人は笠をぬき汗を拭き、一碗二碗の茶を喫し、然る後細君に告くるに嚮に見聞せし處の母子飢餓の狀、及ひその一時を濟ふへき計畫を以てし細君に事を命し置きて、勘か代りに人を得へく、往て他の隣を訪ひぬ。

同姓相憐むの情に富める細君は命をうけて起ちあがり、南瓜を取つて爼にたて、滑より庖丁を下し庖丁爼に至れは轉ふ兩半塊を執つて友に附して其腸を抉り出さしめ、自個はその蜀玉黍と豆箕を持て外に出てぬ。遽かにばら〳〵靑天に霰たはしる音聞えつ。

乙也が再び歸り來つる時、南瓜は眩ゆき日光の反射に火影しらけし竈にかゝりぬ。友は戶外の壁につきて蜀玉黍を喰ひ居れり。渠は嚙みつくばかりに貪ぼり食ひ、時の間に最も大なる一個を食ひ盡せり、夫妻は相語りて哀れを催ふせり。やがて南瓜は吹あがつて煮へたるを告げぬ。此時なりき。三歲ばかりの可憐なる罌粟坊が、保母をつれて表より歸り來つるは。折よしとて細君は保母に命じ、友を送りて餽り物を贈らせんとしたるところに、孃が孃がと、小女の

むつかるに、さらばと手のある籃を下して丼を乘せ小女と保母と左右より籃をさげつゝ、友を先にたてゝ出てぬ。

渠等が出てゆきし後、細君は餘れる南瓜を以て茶を入れ、水入らずにて味ひつゝ、果して日本一の味南瓜、悲しめるものに善き贈物なりけりなど、うち語らひ、自己等の斯かる樂しき家庭にくらべて、みよか不幸を思ひやり、かくはかり情なき亭主に、能く辛抱の出來るものよと、坐ろに感じあひける程に、乙也がみよを憐むの情、今は殆と高潮に上れり。渠は細君と計つて、必ずみよを拯はんと誓へり。渠は恰も細君を誘ふが如く、遂に之を用ひざるべからざる乎と嘆息しければ、細君は果して其の何の意味なるやを問ひぬ。渠は答へて、もし勘を屈し、勘を矯め勘を變へて、勞作の人となすと能はずんば。到底徒爾と。因て渠は始めて盡く自己の好意の如何に勘より辱しめられしかを細君に語り、且つ曰く、渠を變ふる、唯渠が怠惰を村規に問ひ、絕交放逐を以て渠に逼る一方あるのみ。

細君も亦大に同意の旨を陳へり。渠猶ほ曰く、

「さすれば今夜組合を召集し、みよを證人として、勘が怠惰を鞠問すべし。」

と渠は口を語尾に噤みぬ。細君はしばらく默考して

「夫を訴へて、その妻に證言せしむるとは如何あらん、」

「我も今其事を思へり。然れども救はんとすれば傷めざるべからず。宜し我れ往て彼を說き

見む。」

渠は一刻も待つ能はざりき。渠は今恰も上帝より、或る善事を爲すべく世に遣されたる天使の如く考へたり。渠は今最も莊重なる、最も力量ある容貌を以て家を出でぬ。渠が中門を出づる頃、遊び遊び歸り來る小女に逢へり。小女は迎へて頻りに阿父阿父と呼びて、過ぎぬ渠は今後門を出で、窈に他か裡を覗ひたるに、勘は怪しくも臭きつけたるもの丶如く歸りてあり、丼を抱へて指を染め二人して貪り食ひ、妻子の爲め僅かに十片ばかりを殘して、何とも云はず、指を嘗めて出てゆきぬ。渠は憎さ一倍せり。

渠は暫らく門頭を徘徊し、母子が其餽物を味ひ畢るを待ちて音つれぬ。みよは飽きて寐轉へる友を起して、倶に共に恩を謝しぬ。一分の怒氣を加へて眞面目なる乙也は、唯默して頷くのみなりき。平生親切なりとのみ思ひし渠か、遽かに角たてを見て、みよも何となく氣味あしけに坐を改めぬ。

乙也は徐ろに口を開けり。

「我か今來るは、御身と少しく謀る所あらんか爲なり。我等は實に御身の境遇を痛み、御身を思ふの切なるか故に、是までは兎に角微力を添へたるも、我等か餘裕は限りあつて、

「御身の不足は限なければ、斯くて何時までか繼續すへき。今に於て御身の夫勞作せすんは、御身を奈何すへくもなきなり。」

みよは暫らく呼吸を止めて、大なる溜息を吐けり。乙也は猶ほ推して問へり。

「御身に勘公を動かす方便なきや。」

みよは稍久しく默考せし後、斷然として答ふらく。

「かの人の氣質は、御身の知ろしめすか如し。かの人を働かせんより、寧ろ妾か働くに如かす最早心も快よけれは、明日よりは何事にまれ着手して見ん。」

「否とよ、御身は未だ働くべきにあらず、よし働くに堪ゆるとするも、妻子を養ふは男子の義務なり。自個の義務を擲て人に負はせ、却て其人を罵る、是の故に憎むべきなり。我に一事あり。今日まで我か之を應用せんと欲したると幾回なるを知らすと雖、毎に御身の爲に止みにき。今日にして之を實行するも、實に止むを得ざる所。」

と渠は具さに勘を屈するに村規を以てせんと欲するの意を傳へたるに、みよは畏まつて調子を改め、生わかりの返事の如く、唯一言、

「唯」

乙也は語を繼ぎ、

「此事若し御身の同意を得ば、御身渠が怠惰の證人として、公會に出席し我と表裏を相成すにあらずんは不可なり。」

「唯」

乙也は少しく心しらけぬ。

「徒らに唯々と云ふのみにては大に困る。我が來るは我が爲にあらず、實に唯御身の爲のみ我が御身を思ふの無量なるを思はゞ、我が云ふ所幾分なりとも解る筈なり。我が御身に求むる所、實に人情の忍び難き處と思へど、忍び難きを忍んで爲すも誰が爲ぞ、夫に逆ふも夫の爲のみ。」

「唯」

渠は愈々調子ぬかしぬ。されど其の恩人たり主人たるの恩威を以て、今夜呼ばゝ必ず來るべきを言ひ渡して歸れり

下

兩列の杉の木立を承けて、軒並揃はぬ人家ばら／＼對立すると、四五町にして右に折れ、屋上に山を見る、蓋し隨處に見るべき田舍町なり。人家茅屋多きが中に、一際秀てし瓦葺、是れを金非乙也が住宅となす。

金井家は舊家と云は人よりは田地持なり。乙也が父、此あたりに不世出の英資を以て、領分を切りひろげしより、乙也は坐ながら餘米千俵の主、守成と創業と孰れが難きと問ふほどの身分となりぬ。渠が富に居て貧しきを忘れず、夫妻僕婢と苦樂を共にするは、嘗て舊籍を讀みて大に感ずる所ありしに由ると、渠が人となり、好んで小惠を施して、人の自己を尊ふを喜ぶが

故に、村民は皆陽に渠を尊んで陰に侮どり、乞ふ所あるごとに、毎に渠を讃めて渠を欺けり。然れども陽には尊はさるへからざるものあるが故に、渠が云ふ所敢て拒むものなく、渠も亦嘗て無理を云はざりしなり。今日夕刻、田も畠も生き返るべき久しぶりの降雨に、人もまた生き還りたる思をなし、いづれの家も涼しき椽側に祝杯を擧け居たるか、一夫戸ごとに觸れ回るや煙艸入を手にしつゝ、人は皆渠が宅につどひ、薄暮盡く來會せり。云ふまでもなく、勘に對する審理會を開かんとなり。事情は既に前以て乙也が口より陳べられ、審理委員は既に渠が指名に由つて撰はれ、或る者は既に證人を呼びにと遣られ或る者は既に被告を呼びにと遣られぬ。須臾にして證人を呼ぶもの、證人を呼び來れり。みよは嬰兒を懐き友を伴ひ悄々として入り來り臺所に留まつて細君と語れり。久しうして二三人は、その摩りへされたる下駄を泥濘に埋められしと、小石の上を飛び〱あるきて、被告人を護し來りぬ。渠は今まで將棊倶樂部にありき、渠等が「一寸來れ」を以て渠を呼び出さんとするや、渠は振りむきだにせざりき。然れどもその實を以て告げらるゝに當りては、面白し審かれて見んと、渠自ら進んで來り、忌憚なく玄關の程よき處に腰かけたり。

聚會は渠が來るを見て騒ぎ立ち、子細らしく頭を捻る老人と、白癜痕あつて鼻の赤き老人と、二人の翁より成る審理委員、及び原告を正坐に四五十人ばかりの會聚、環に坐りて被告人を挾めり。勘は腹背敵を受けながら、スッパ〱煙を吹き、殆ど無頓着の風なりき。既にして赤鼻

委員に呼ばれて出で來り、自個の前に腰かくる女房を見るや、是まで皮一枚の下に伏し居りし怒氣、遽に面に溢れぬ。

「汝はこゝに何爲に來れる。」

みよは敢て仰ぎ見ず、

人々の御身の爲と、斯樣に配慮し玉へるを、いかでか坐ながら視てあるべき。」

みよは唯唇をのみ動かせり、頭捻れる長老遮りて渠に答へぬ

「誰か汝に來れと云ひつる」。

「みよ女には罪なし、みよ女を呼びしは公會なり。」

渠は聲を勵しく罵しつて曰く、

「然らば、則御身等は、夫を訴へて妻を證人に曳き出したる乎。」

渠は煙管首を以て鐵火鉢の一角を欠くばかりにうち敲きぬ。審問將に初まらんとして、敢て發言するものなかりき。

此間に細君はランプを持ち來りて天井につれり。人は齊しく坐を改めぬ。

人定まつて審理委員は公會を開きし主旨を陳へ、尋て原告は先つ二三枚の綴物を取りあはせ程よき處を開き、疾病死亡、及び軍役に服するに非ず、自己の怠慢に由て家族の困窮を來し施て近隣に迷惑を及ぼすものは絶交すと云ふ、明文を朗讀し

「人々よ、我が勘太を怠惰と云ふは、寧ろ太寛なるのみ。渠は家族を遺棄して獨り賭將棊を遊べり。是れ怠惰以上なり。その遺棄されたる家族の爲め、屢々村人を煩はしたるは人々の知る所今日其家族亦餓えぬ。我渠を見、渠を其勞作に誘ひ渠に生活を與へんとせしに、渠は却て口を極めて我を罵れり。是れ怠惰なり。村は此の如き輩に對して自ら謀る所なくんば、或は恐る其家族を永久に遺棄せられんことを。故に我は此人の爲に、特に三日間の猶豫を與へ、其期限内に悔ひ改むる所なくんば、斷じて村規を以て處せんことを要す。」

審問委員被告に問へり。

「此の訴に對する御身の答辯は如何。」

と勘は冷笑一番して曰く。

「我が家族養ふこと能はざるや否。之を御身等が呼び出したる證人に問へ。」

審理委員はみよをすゝめて夫の現狀を述べしむ。みよは夫の事を問はるゝ毎に、自ら責めらるゝよりもつらく感ずるものゝ如く、涙なしには答ふること能はざりき。

「七八年前、牛馬の如く追ひ使はれし當時を思へば、今は殆ど二人の如し。鋤犂とつては人に後るゝ人ならねば、今日にても、働らく心だにあらば働くべけれど、此人の心を察するに、最早働らく心なき樣なり。」

原告は突こみ

「そこに最早も未たも要せず、働く心なき是れ即ち怠惰ならずや。」

赤鼻先生は歎服せり。

「一言もなき所。」

首を捻る長老は子細らしく首を捻つて繰返しぬ。

「働く心なきものが怠惰、怠惰とは働く心なきもの。」

渠等は主人が論告を以て公會に問へり。今まで偏へに謹聽して、縛られ居りしが如き會衆は、遽かに自由を得て、汗ふくもの、團扇つかふもの、團扇をもたず、手拭を振り回すもの、煙を吹くもの灰吹を吹くもの、指先にて煙管を廻すもの、うつむいて鼻かむもの、天井を仰きて欠伸するもの、笑ふもの、私語するもの、問ふもの答ふるものとて幾人もあれど、可否を云ふものは一人もなかりき。

「異議なきや」

と赤鼻先生の一言に、パッタリと人は靜まり。勘は相變らず空嘯ふき、みよは嘗て頭をもたげず、母の後に大黒柱に傍つて立てる友は指を喰へて、怨しげに父母を責むる人々をながめぬ涙はほろ〱頬を下りぬ。

乙也は今その時きたる所を知れり。公會は渠が意を承け、審理委員は渠が論告の如く、被告に宣告せり。渠は大得意を以て宣告に足せり。

村民の絶つ所のものは、我亦我が地所建物より絶たざるを得ず。此三日間に於て御身須らく熟思すべし。

勘は公會及び是等の宣告に對ふるに嚔を以てし、眞黒がりを銜て出て、顧みて唾吐きぬ。

「勝手にし居れ」

會衆はドロ〳〵と立ちあがれり。みよは夫の疾く立ち出てしを見て、周章しく裏の戸を出てぬ、友は一人殘されて呌び出でたり。細君はみよを呼びとめ、準備し置たる簞食壺酒を彼に授け、之を以て怒れる夫を溫籍せよと。みよは額つき拜みて受け、提灯を以て泥濘を照さんと云ふ、保母をも待たす友を驅つて狼狽へいでぬ。

みよが家に待つ間もなく、勘は嫣然として歸り來れり。みよは戸より媚ひ迎ひしも、渠は一語も答へざりき。渠はわら〳〵しく內に蹴あがり、簞食壺酒の列陳せるを見、何にも云はず、箸を下しぬ。渠が飲食し畢るまで、互に一語を交へざりしかども、みよは今夜湧くばかりの同情を夫に表して酒食を侑めぬ。食事畢つて復た無言に出でゆけり。

翌朝乙也は例よりも起き心よく、さすがの勘がその强項を折つて來り謝せんとを待ちしに勘來らずして、みよ來れり。勘はと問へばみよはひれ伏し夫を許して、夫の代りに己を役せられんとを歎願し、且つ曰く病旣に身を去れりと、乙也は天を仰て洪歎し、其の爲す所の徒爾なりしを慚ぢ且つ悔ひ、請ふ如くみよになしぬ、是よりみよは友が背に乳のみ兒を負はせ不在

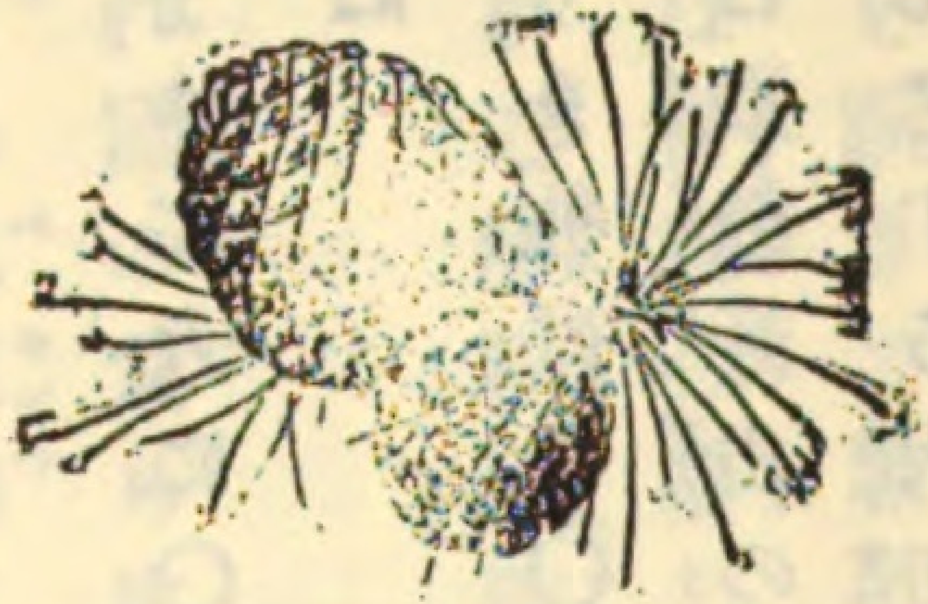
を守りて、隨時歸り來るべき夫に答へしめぬ、彼がその細れる身を荒醜どもの中に挿入したるは宛然孤鶴の下り居る如くなりき。六月土用、吹く風も焔の如き日光に曝され燥けたる土を蹈むで粟を蒔き、豆を打ち、麻を伐り、田艸を取りつゝ、日又一日、毫も疲るゝ樣子見えざりければ主人夫妻は驚きぬ、彼が何時斯く快復せしやと。偶々其の疲るゝと甚だしきを知つて、云々するものあれば、故らに笑ひてそを紛らしき。是より以後渠が家には復た何もなき日なく、晝となく、夜となく、勘が歸り來るとに何になりとも飽かざるなかりき。然れども、是れ彼は破滅なりき、一日彼は少しく不快なりと稱して圃を去りぬ。

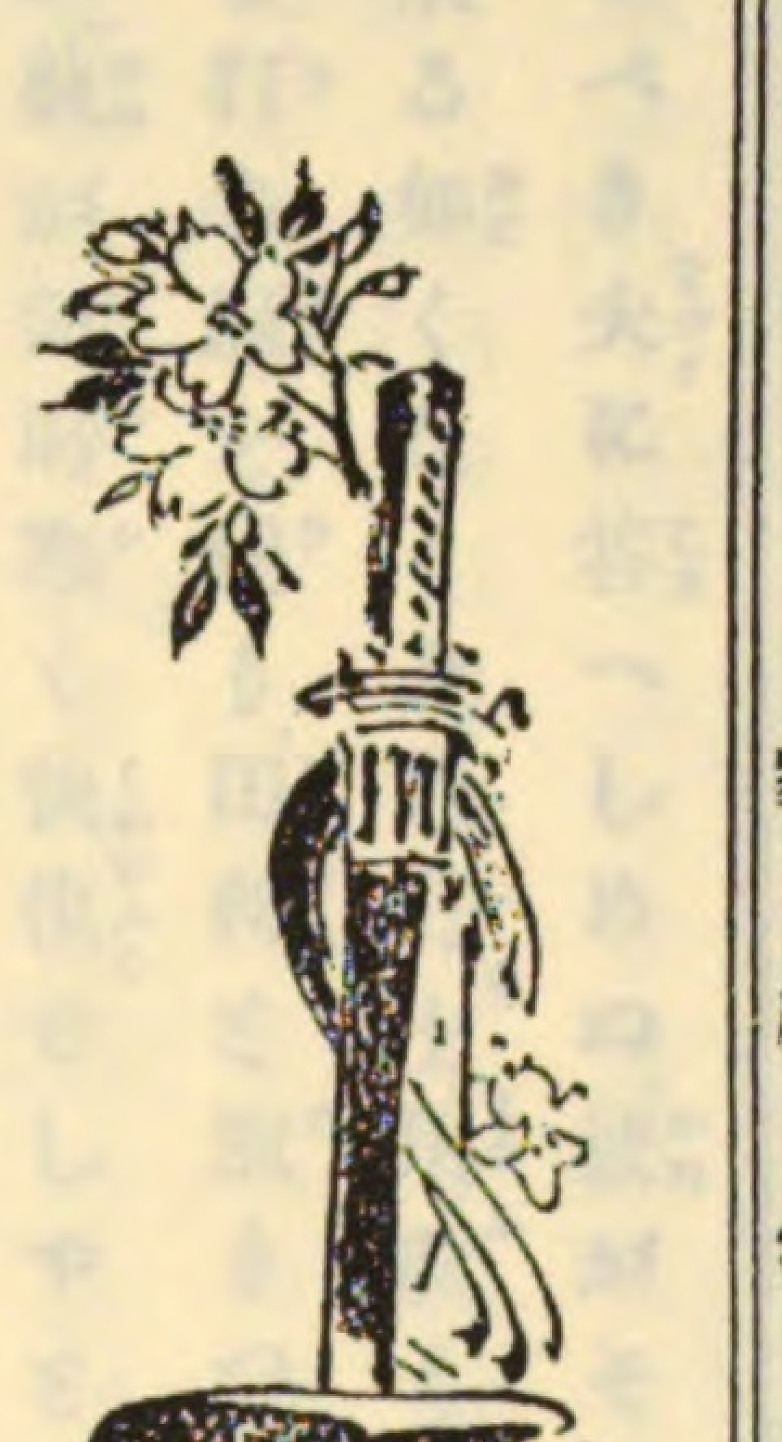
此日渠は例の如く將棊會場にあり、半日贏輸を爭ひて後、午餉すと歸路に上り樹間に衡宇を認めし時兒嗁母を呼ふの聲聞えぬ、渠は平生の聽をなしつゝ、家に歸れり、家に歸つて仰き臥したる妻の傍に友は聲をあげて掀よと叫び、乳のみ兒は友が背にあつて嗁けるを見。狂氣の如くかけあがり「みよ」と搖り起せと起きぬ亡骸を懷き、齒を嚙みならし、意外の事に涙も出てぬ眼を睜つて乾々たる天を睨み勝手にし居れと絕叫せり。

＊　＊　＊　＊　＊

渠は天の世と協力して自己を攻むるが如きを見て、天を怒れり。若し天に神なるものあらば、渠は相見て面り責むべしと思へり。然れども天は渠が敵にあらざりき。天は渠が心の目をひらきて如何なる場合にも渠を愛したる女房の死を讀ましめぬ。渠はそこに無量の諫意のこ

もれるを認めて思はず男哭きに哭きぬ。渠は遂に飽まで憎める世に屈せり。渠は遂にその強項を折つて恩人に謝せり。渠は日雇かせぎとなれり。





遠征

秋水生

明治二十有七年秋九月〇〇日、我遠征の師まさに大に〇〇の清軍を撃たむとする前一夕、一個の兵士銃を杖づひて我哨兵線上に立ちぬ。

彼は中國生れの男、當年二十六歳の若者なりき。彼は〇〇師團に屬し、韓山の風雲破裂せんとするの夕、早くも渡韓の兵に加へられ、前には成歡牙山の役に從ひ、後〇〇少將の手につきて北進し、今や日清兩軍陸上の大輸贏を決せんとする大切なる前夕に當り、哨兵として其立場に立てり。

時は午夜。秋高ふして三韓の天、星斗の數は砂よりも多く、一痕の月は弓の如く西空に挂れり。彼は斜めに眼を擧げて七星の北に燦爛たるを望み、太白の西に晃やくを仰ぎ、一道の銀河の横さまに中空を貫ひて走るを望めり。飛星は流彈の如くおり〳〵天の一角より天の一角に向つて飛べり。地には秋霧おぼろに月光を罩め、冷露征衣に滿ち、秋風寒く面を吹けり。夜や深

けぬらむ、銃握り持つ手もいとゞ冷やかなるを覺へぬ。遙かに敵の方を望めば、星か螢かと怪まるゝ光の三點四點仄かに秋霧の間に指す可く、味方の陣を顧みれば、張り列ねたる天幕白く月光の中に輝けり。中軍の大天幕に一點の光のホノかに見へたるは、何れの將軍の劔を按じて坐して曉を待つにやあらむ。敵も味方も鳴りを靜めて、寂寞たる秋の夜の支配は遍ねく大地を蔽ひ、唯敵陣の方に當りて時々遠く微かなる蜂衙呍々の聲に似たる響きの聞ふると、味方の陣内に驕り勇む戰馬のおり／＼地を蹴きて嘶く兩三聲の遠く寂寥を破りて聞ふるのみ。漠々たる北韓の野の星月夜、露の底には百蟲合奏し、月影落つる地上には、敵味方幾萬の軍士、或は銃を枕にして故鄕を夢み、或は醒めて明曉の戰を思ひ、或は眠らずしてその立場に立てり。

嗚呼、遠征の將士幾萬人、國の爲めに家を忘れ、國の爲めに身を忘れ、旭旗を雞林の秋風に吹き靡かして、軍歌勇ましく歌ひ連れ、鴨綠亂す可し北京衝く可しと勇み立つたる時には、彼等の眼中には唯國光國威名譽戰功勝利愉快あるのみなれ共、彼等も亦血あり涙あるの人、家を棄て老ひたる母を棄て若き妻を棄て子を棄て弟兄を棄てゝ來れる者も多からむに、秋風一夜月を吹ひて白露征衣に濺るの宵は、豈一滴故山に向ふの涙なきを得むや。此秋風明月の夜は、彼哨兵の心を浸して、望鄕の念水の如く湧き起れり。

彼は眼を擧げて西に傾き行く弦月の光を仰げり。吁此れ彼れが三年以前其故鄕にありし時、

泥鍬肩上げて畑より歸り來る道、其影を前に落したる所の弦月なり。彼は天の一角に少女の花簪の如く燦然房をなす一群の星宿を打仰ぎぬ。吁此れ彼が曾て其母と濁酒酌みつゝ打眺めたる所の星なり。彼はウットリと月を浴びたる地の面を望みて、故鄕の月の夜を思ひ出でぬ。彼は人自づから愁ふとも知らで喞ち貌なる虫の音を聞ひて、其家の前より直ちに打つゞける山畑の草叢に、夏の夜毎秋の夜毎に喞ける虫の音を思ひ出でぬ。彼は恍然として故山の夢に入れり。

◎　◎　◎　◎　◎

見よ、弦月は舊の如く照れり、星は舊の如く輝やけり、夜は舊の如く夜なり、彼は舊の如く軍裝せり然れども彼が立つ所は最早雞林の戰地にあらざるなり。見よ、彼は薄月夜に踏みも迷はぬ故鄕の道を辿り居るなり。彼處に黑き一堆の森、此村の鎭守神の在す森。森に大なる椋の木あり、秋の末木の葉黃はみ落つるの頃は、其昔小學に通へる彼は如何に腕白なる其友等と木切れを投げ石を投げて、落ち來る椋の實を爭ひ拾ひしよ。此方の芋畑の中なる老松一株、其下に眠る古塚雨夜に迷燐の出づるてふ古塚。ア、是れ彼れか昔し今は世に亡き父の懷に抱れて、酒臭き息の下に恐ろしき話を聞されし古塚なり。今踏み渡る小川の石橋、一枚石の石橋。如何に彼は此石橋の下の藻多き所に、曾て尺大の鮒をすくひ得て、其母を喜ばせしよ。ア、彼の杉の木の叢かる山、蕨の多く立つ山。彼松のまばらなる山、松茸の香りゆかしき山。彼柳の蔭の

家、彼が小兒の頃常に紙鳶を張り呉れし正直なる勘作老爺の住む家。彼方の竹藪越しにフラフの見ふる家、彼が字を知り惡戯を覺へし學校。此方の丘の麓に鐘樓の見ふる寺、後の日蔭寒き所に其父の長へに眠る寺、彼が母の常に說敎聽聞に往く寺。此等のものを一つに包める村、蓬萊仙界にも換へ難き故鄕の村。彼は今銃を負ひ、麻鞋を穿ち、劍を橫へ、背囊を負ひ、彈箱飲器を腰にし、帝國陸軍步兵の帽を戴きつゝ、其故鄕の村に入らんとするなり。

彼は如何にして軍律嚴しき戰場を逃れ出で、如何にして幾百里の海上を渡り、如何にして今其故鄕に向つて步みつゝあるやを知らざるなり。彼は自づから其身の自由なる、其足步の輕快雲を踏み霧を步し得るを訝かれり。彼が其昔し此故鄕を辭して兵役に就きし時の事も、○○師團に幾年間其役に服せし事も、役まさに終らむとする頃に到りて忽然日淸の間に風雲湧き起り、近き頃の手紙に老病に惱む由弟の報じ越したる其母の事も思ふに暇なく早々に出陣せし事も、海を渡りて京城に入り南進して成歡牙山の役に從へる事も、此等は皆其記臆より脫し去りて、彼は唯其幼なき時の事と、まさに彼を迎へむとする喜をのみ豫想しつゝ、步むともなく步みぬ。

彼は已に往還より折れて田中の道に入れり。彼は已に琴の如く歌ひ行く小川の石橋を渡りぬ。彼は村に入りぬ。見よ、村人は猶寢ずして、彼を凱旋の勇士として歡迎せり。正直勘作も出でぬ。痣の椎平も來りぬ。學校の敎員もあらはれぬ。隣家の姥も來りぬ。對家の女も來りぬ。誰も彼

も皆來りぬ。彼等は彼を圍繞して、彼が殆んど蝟の如くなるまで八方より歡迎の矢質問の矢を放ちかけぬ。彼は辛して此歡迎の重圍を切りぬけつゝ、只管其家に急げり。

道は一轉せり。見よ、彼が三年の其間夢に現に思ひ慕ひし其家は、今眼前にあらはれたり。

偖も三年見ざりし間に、藁葺の屋根の黒めることよ。偖も夕顔と瓜の茂りしことよ。家の半面は、白紋黄紋を織り出したる緑の絨氈を挂し心地ぞする。偖も不思議や、時は秋の初なるに、菊も咲けり、紅葉も照れり、籬の雁來紅も染めたり、庖厨の側の溜池に杜若も咲けり、菖蒲も咲けり、白蓮紅蓮も咲けり、背戸の櫻も咲けり、桃も咲けり、李も咲けり、鶯の囀づるあなたに梅も咲けり。何時の間に、家は百花の園となりしか。否、是も遠征より歸る勇士を迎ふる爲ならむ。彼は門口に咲きこぼれたる萩おしわけて進み入りぬ。咿啞！響く機の音、音は彼か胸に答へぬ。聽け！奥に咳嗽の音聞ふ。偖は母猶恙なくて待ちたる可し。入れ！入れ！家を戀ふ戰士！

戸は開けぬ。機の音忽ち止みぬ。走り出で來る少女の影。首に縋りて泣く聲、笑ふ聲。「妾は日々君を待ちし」と云ふ女の聲。「今よりは死するも御身の側を去らじ」と云ふ男の聲。アヽ、是れ彼が許嫁の從妹に逢へるなり。

裏の方より足音聞へぬ。見よ彼が弟は今十九の壯年となり、鍬投げ棄て兄の身近く走せ來れり。兄は泣きぬ、弟も泣きぬ。而して彼等は共に笑ひて亦泣きぬ。

彼は彼等に擁せられて、家に入れり。足音聞きて出で來る老嫗。彼が母！彼を生み、彼を育し、彼

を抱き、彼を負ひ、彼を誇り、彼を愛し、彼が爲めに天地も己をも犧牲となしつる母！嗚呼其母は三年が間に如何に老ひしよ、如何に衰へしよ、白髮は枯尾花の如く其窶れ果てたる顏を掩へり。其腰は撓みて弓の如くなりぬ。其眼は容易に其愛子を認めざりき。彼は泣ひて其母の頸に縋れり。

彼は其頰に熱き一滴の落つるを期しぬ。彼は母の笑顏を待ちぬ。怪む可し、老衰せる母は忽然枯木の如く突立ちて、兩腕松の如く彼を突離し、双眼電の如く彼の顏を見つめ、言葉鋭く問ひぬ「汝は朝鮮とやら遠き國に戰爭に行きしと聞きつるに、今歸りしは務の年期の濟みたるか、戰爭は濟みたる歟」と。彼は唯「否」と答ふる外あらざりき。母は重ねて問ひぬ「然らば汝は獨り戰爭も濟ぬに歸りし歟」。彼が答は唯額上の汗のみなりき。母は口惜涙に怒の聲ふり絞り「よく聞け、此家は先祖代々文字書く術こそ知られね、約束は必らず果たす、務は必らず守る、人に必らず後れを取らぬ、御國の御用に必らず立つと云ふことを心がくる家なるに、汝は學校にも出て文字知りながら、よくも獨り歸りしよな、吾は汝が貌見る眼はもたず、汝が言聞く耳持たず」と、立て去らむとす。跪く彼れ。泣き出す從妹。宥むる弟。

忽ち戸の外に大勢の足音聞へぬ。口々に罵る聲「朝鮮より逃げ歸りし臆病者を、今大勢の巡査の捕縛に來られたり」と。

彼は背戸の方に走り出でぬ。忽ち當面に立ち塞る一群の人。巡査歟、村人歟。彼は眼を擧げぬ。怪

も皆來りぬ。彼等は彼を圍繞して、彼が殆んど蝟の如くなるまで八方より歡迎の矢質問の矢を放ちかけぬ。彼は辛して此歡迎の重圍を切りぬけつゝ、只管其家に急げり。

道は一轉せり。見よ、彼か三年の其間夢に現に思ひ慕ひし其家は、今眼前にあらはれたり。偖も三年見ざりし間に、藁葺の屋根の黑めることよ。偖も夕顏と瓜の茂りしことよ。家の半面は、白紋黃紋を織り出したる綠の絨氈を掛し心地ぞする。偖も不思議や、時は秋の初なるに、菊も咲けり、紅葉も照れり、雞の雁來紅も染めたり、庖厨の側の溜池に杜若も咲けり、菖蒲も咲けり、白蓮紅蓮も咲けり、背戶の櫻も咲けり、桃も咲けり、李も咲けり、鶯の囀づるあなたに梅も咲けり。何時の間に、家は百花の園となりしか。否、是も遠征より歸る勇士を迎ふる爲ならむ。彼は門口に咲きこぼれたる萩おしわけて進み入りぬ。咿啞！響く機の音、音は彼か胸に答へぬ。聽け！奥に咳嗽の音聞ふ、偖は母猶恙なくて待ちたる可し。入れ！入れ！家を戀ふ戰士！戶は開けぬ。機の音忽ち止みぬ。走り出で來る少女の影。首に縋りて泣く聲、笑ふ聲。「妾は日々君を待ちし」と云ふ女の聲。「今よりは死するも御身の側を去らじ」と云ふ男の聲。ア、是れ彼が許嫁の從妹に逢へるなり。

裏の方より足音聞へぬ。見よ彼が弟は今十九の壯年となり、鍬投げ棄て兄の身近く走せ來れり。兄は泣きぬ、弟も泣きぬ。而して彼等は共に笑ひて亦泣きぬ。

彼は彼等に擁せられて、家に入れり。足音聞きて出で來る老嫗。彼が母！彼を生み、彼を育し、彼

を抱き、彼を負ひ、彼を誇り、彼を愛し、彼が爲めに天地も己をも犧牲となしつる母！嗚呼其母は三年が間に如何に老ひしよ、如何に衰へしよ、白髮は枯尾花の如く其窶れ果てたる顏を掩へり。其腰は撓みて弓の如くなりぬ。其眼は容易に其愛子を認めざりき。彼は泣ひて其母の頸に縋れり。

彼は其頰に熱き一滴の落つるを期しぬ。彼は母の笑顏を待ちぬ。怪む可し、老衰せる母は忽然枯木の如く突立ちて、兩腕松の如く彼を突離し、双眼電の如く彼の顏を見つめ、言葉鋭く問ひぬ「汝は朝鮮とやら遠き國に戰爭に行きしと聞きつるに、今歸りしは務の年期の濟みたるか、戰爭は濟みたる歟」と。彼は唯「否」と答ふる外あらざりき。母は重ねて問ひぬ「然らば汝は獨り戰爭も濟ぬに歸りし歟」。彼が答は唯額上の汗のみなりき。母は口惜涙に怒の聲ふり絞り「よく聞け、此家は先祖代々文字書く術こそ知らね、約束は必らず果たす、務は必らず守る、人に必らず後れを取らぬ、御國の御用に必らず立つと云ふことを心がくる家なるに、汝は學校にも出て文字知りながら、よくも獨り歸りしよな、吾は汝が貌見る眼はもたず、汝が言聞く耳持たず」と、立て去らむとす。跪く彼れ。泣き出す從妹。宥むる弟。

忽ち戶の外に大勢の足音聞へぬ。口々に罵る聲「朝鮮より逃げ歸りし臆病者を、今大勢の巡査の捕縛に來られたり」と。

彼は背戶の方に走り出でぬ。忽ち當面に立ち塞る一群の人。巡査歟、村人歟。彼は眼を擧げぬ。怪

絕！是れ一隊の清兵なりき。

彼は苦叫して思はず撞と地に倒れぬ。

◦　◦　◦　＊　＊

撞と音せしは、彼れが倒れし音ならで、手中の銃の手より滑り墜ちたる音なりき。彼は愕然として眼を開きぬ。

見よ、彼が故郷も、母も、弟も、許嫁の從妹も、村人も、家も、巡査も、皆盡く消え去りて、彼は依然として平壤野外清軍を去る銃丸距離の我哨兵線上に立ち居れり。

彼は鐵拳に額の汗を拭ひ涙をはらひ、銃取り直し、四邊を見まはし、空を仰げり。月は何時しか西に落ちて、星の數も著しく減じ、太白の光爛として月の如く輝れり。足下の草に白露滋く浮み、一入冷やかなる風は彼れの鬢邊を掠めて、殘んの夢を吹き拂へり。月落ちて、野は暗く、遙かに敵の方を望めば、指し得可かりし點々の火光は何時か消えて、暗黑は其の動靜を隱し、味方の陣を顧みれば、火消え光滅し黑暗々の中徜々地に軍士の結束するが如き物音聞ふ。天は漸く曉ならんと欲して、何處ともなく鴉聲の渡るを聞く。

彼はあたり見廻はして先づ其假睡中に事なかりしを祝し、其一睡の夢を回想して何思ひけむ頻りに涙をはらひしが、亦忽ち心決したるもの丶如く、服を整へ、革帶を直し、足踏み直し、銃持ち替へて、地より生へ出でたるもの丶如く立塲に立ちぬ。

時に晨星次第に沒して、東天に一抹の曙光見え初めたり。

＊　＊　＊　＊　＊

明日の戰は近世比類少なき大劇戰にて、我軍大勝利を獲、盡く敵の塹壘を乘り取り、清兵の大半を殺傷し、旌旗大砲彈藥輜重の分捕品は山の如くなりしが、不幸にして我將士の戰死したる者も少なからざりき。越えて五日、〇〇中將より大本營に宛て發したる報告文中に、〇〇少將の手に屬する一兵士、眞先に立つて尤も陷れ難かりし某所の敵壘を攀ぢ、牙山の敗將某を銃鎗を以て刺殺し、黃龍帥字の旗一旒を奪ひ、壘上に直立して味方を麾きしが、敗走清兵の亂彈の射る所となり、一たび壘上より轉び墜ち、再び飛び起きて壘上に立ちしも、再度の彈丸に中りて斃れ、而して亂軍の際其死骸の所在を失し、其姓名も未だ分明ならず、誠に惜む可き事なり云々の旨を認めありき。

吁此一兵士は是れ何者ぞ、何者ぞ。平壤原頭月白く風寒し。思ふに一塊の骨肉は長へに異域草下の土となる共、千年の魂魄はまさに夕貌還へる故山の茅舍に歸るならむ。



自然の面影　　嵯峨の屋主人



今年の正月

花は散りて根に歸り、人は死して塊となる、思へばもろき露の命、誰の爲めに歟之を惜しまん、消へば消へよと思へども、無常の鬼も未だ來られねば、永らへて浮恥を世に更科の月、すめばすまる、習ひとて、今年又三十二歳の正月を迎ふる事となりぬ

往路は松飾、しめゆひまはして、往來う人織るが如く、お目出たうお目出たうの聲は空を搖りて、太平の樂しみは滿都に滿渡りぬれども、一歩踏み入りて其裏面を伺へば、人の心のはかなさ、きたなさ、親も、兄弟も、姉妹もなし

見よ聖人の教すたりて、人々己が自々にふるまふ世とて、金錢の重き事は鐵の如く、人情の薄きことは木の葉に似たり、道德を品物と心得て、浮世三分五厘の衡量に懸け、算盤勘定の加減を爲して、浮べ斗の世間躰、親は娘を賣りて左團扇を使ふを喜べば、娘は

身を賣りて絹布にくるまるを見えとす、夫又妻を賣り、妻又夫を賣り、情郎は情婦を賣り、情婦は情郎を賣りて耻とせず、戀も、情も、恩愛も、やみらみッちやの手前勝手、是今の世の有様ならずや、

此時に於て我天下の輕侮を双肩に荷ひ、世人の嘲弄を滿面に受く、往路の繁へるを見るも我に於て何歟あらん、他人の美衣美服を着て紅顏に誇り美貌に慢するを見るも、我に於て何の面白き事歟あらん、と下宿の一室に籠居して、元日、二日、三日、四日、五日迄は外出もせず、胸中の不平を折々淨瑠璃小唄の節調べに洩して、世は種々とつぶやくも、誠に智慧のなき事にこそ

嗚呼我に若し萬金の富あらば、山水に放浪し風月に逍遙して遊ぶ歟、然らざれば狹斜花街に豪遊して、千金を芥に一時の快を取るべきものを、恨むらくは貧困洗ふが如く、一簞の食一瓢の飲も臂を枕にしては得られぬぞ是非なき

憎き美人

六日の日我親類へゆかんとて寓居を出でぬ、此日天曇りて寒さ強く、今にも雪のふり出でん計なりき、行く事一二町にして果してふり始めぬ、立戻りて蝙蝠を持て來ん歟と思ひぬれど、拂へば散る六の花、雨とは異なれば其も要なし、ふられ〳〵てゆくのも一興とてゆく

ゆきて九段の坂へさしかゝりし時、三人の美人の此方を指して來れるに遇ひぬ、一人は年の頃十七八、色白く、目鼻立ばらりとして、首筋立のび、愛敬の露頬に溢れて、ぽちやくとした肉温き乙女なりき、他のは年の頃十八九、色は白やかにして眉細く、口元匂やかにして鼻附やさしく、額の邊煙る樣に、得ならぬ愛敬口元にありて、人の心をうつさせける、今一人は年頃十五六、器量は二の町三の町なれど、おさなじみた風の姿に殘りて、罪なき容貌愛らしかりき

衣服は孰れも綺羅を飾りて、まさらず劣らぬ裝ひなりしが、ふる雪の小袖にとまるを、折々打拂ふ姿なよやかにして、宛然書けるが如くなれば、我一見して、世にも美人のある者よと見惚るゝ中、彼等は我雪にふられながらゆく姿を見て、口元に得ならぬ輕侮の嘲笑を示して、互に顔を見合はするや否や、どッと計打笑ふて坂を下りしは憎かりし、殊に口を開ひて笑ひし十七八の美人最も憎かりし

初午の夜の親子

今年の初午は、ふく風身を切る樣な寒き夜なりき、我横町の稻荷にゆきて、地口行燈の影に佇立み、神樂は見ずに、人情の自然を拾はいやと四方を見廻はせば、我傍に年の頃三十四五の美人、其子にやあるらん、五ッ六ッの女の子の、髮は扇を擴げたらんが如く、ふさくと垂し色白の愛らしきを掻抱きて立ずめり、大人の身の神樂を見しとて面白く

もあるまじきに、此寒風に吹さらさるゝを厭はず立ずむは、子に見せたきの故のみならん、思へば親心は有難きもの哉、と思ひつゝ、猶其樣子を打見やりてあれば、おさな兒は母に向ひて、母樣、あのお狐は何をして居るの？あれ歟へ、あれは豆を蒔て居るの、あのひよッと子ハ？あれは其眞似をして居るの、眞似を、おかしいね、とにこ〳〵笑ひながら餘念なく眺むる

やがて其ひよッと子が夢中になりて、豆をまき〳〵踊出しつゝ、頭をこつりと柱に打つくるや、おさな子が聲を擧てころ〳〵と笑へば、母も又聲を擧て打笑ひぬ、其風の如何に無心無邪氣なりし歟、おさな兒の無心なるは其常なるが、其神の如き無心が、世の中の苦樂を嘗め來りし母親の心をも感化して、暫時は無心ならしむることそ有難けれ、僞りなき世の人よ、何ぞ汝のおさな兒を學ばざる、自然の於母影は、山水にのみ存するに非ず、僞なき人情の自然の現はるゝ所、其處にも其面影はあるなり

雪の夜の梅花

挫間ふり積みし雪の夜に入りて俄に止みぬれば、我戶を排して外に出で、ゆき〳〵て林中に入りぬ、天は名殘なく澄みて月半天に冴渡りぬれば、樹々の梢は時ならぬ春の花の一時に開きたらんが如く、月影に輝きて美しさ言はん方もなし、時に暗香の風に微動して、鼻を撲ちて到るは何ぞや、五歩を隔て野梅の雪間に開けるなりき、玉姿瘦骨、細々

とした影の白々とした雪上にあるは、宛然匂はん斗なり、手をさしのべて一枝を折れば、雪は亂れて散りぬれど、花は殘りて香を止めぬ、見よ林中の梅花、彼世の人に見られんとて開きしに非ず、其獨り開きて獨り散るも、唯我自然を樂しまんが爲めのみ、嗚呼我彼が輕薄の世に媚びず、獨り其高節を保つを愛す、

そゞろ歩き

今年四月下旬、我疾を小石川の片隅なる一寺院に養ひぬ、此邊は天ざかる鄙に等しき所とて、四方は田や圃のみなれば、如何に朝夕の運動の面白かりし歟、朝に起て門を出づれば、薄紅の八重櫻は夜の間の露にうるほひて、美人の面影よりも艶なるに、葉末の露の玉を碎きて風に散るも哀なりけり

蜘蛛の巣の露に白々として美しくかゝる杉の生垣に添ふて、或家の前栽の木立物古たる前をゆけば、井出の山吹の色盛に、卯の花の雪よりも白やかに綻びかゝれるも目出たし」ふと車井のきしろ音のするに驚きてふり返れは、鄙にまれなるおとなしやかの乙女の、古井の水汲上ながら、此方を見て耻し氣に貌を赤ふするも愛らし

既にして兩側の大樹の路を挾んで、枝を打違ねたる、日影小暗き坂道へ出でぬ、面を仰で天を見れば、若葉の梢涼し氣にそよ〳〵と風に動く隙より、ちら〳〵とさし覗く天の色の、如何に匂やかに淸かりし歟

坂の半腹なる大樹の根方には、六道能化、千手観音、三面六臂なんどの石像の、幾歳の風雨にさらされたるが、形もきへ〴〵に其面影をのみ止めて佇立める、如何に田舎びて哀なりし歟、忽ち拍手の音の、響くに驚きてふり返り見れば、氷川神社の社頭に立ちて、何人歟の祈念を凝すにてありけり

既にして坂を降り終れば、四面忽ち夜の明たるが如く明るくなりぬ、唯見る前は一面の稲田にして、畔には若草の花の、今を盛りと咲亂るめり、遥に稲田を隔ては、製造場の赤煉瓦高く、煙筒の煙の天をかすめて立昇るも見えぬ

田中の細道を葉末の露に衣をひきてゆけば、脛のぬるゝも快く、紫けまん、鳥冠、すみれ、蒲公英、蓮華草なんどの花の、人の心を慰め貌に、さし昇る朝日に頭をふりて、愛敬の露をこぼすめり

ゆきつくして製造場の前に立ち、我目の前を翱翔する夥多の女工の中、何れ歟其中の花の王なると打見やるに、或者は我を見て俄に耻し氣に仕事にかゝるとあれば、或者は平氣にてツッと我方を見詰むるもあり、又或者は心輕氣にて、ふと我を見るや否や、俄に隣の女に何事を歟囁きながら、折々我方を見て笑ふもありけり、其中唯獨り我此處に立すむをも知らず、一心に其業を取れる者ありき、織目細き二子の布子に緋金巾の襷をしたるが、其なよやかにさし俯向ける襟元の白かりしには、如何に女子のやさしみのこぼ

れつゝありし歟、其うちけむる樣な眉みの邊に、多情なる情のほのめきつゝありしは、如何に人の心を波打たせぬる歟、此中での花は此娘と我思ひぬ

製造場を右に小川の流れに添ふてゆけば、一ッの水車ありき、四六時中絶ゆる事なき車の音は、勤勉にも單調の音を立てゝめぐれり、彼方なる岡の櫻の根方に、梢の雫をいッぱいにあびて、躑躅の花の白々と咲けるが如何計美しかりしよ、其頂きの若葉の紅葉の、色美しく朝日に輝けるは、更に目出度かりき

小川の流は、水の面にさし出たる樹々の小枝の影をうつし、或は蔭徑の根方を縫ひ、或は葦の葉を洗ふて流れけるが、樹影にきらめく細波の影に、小魚のちよろ〳〵と浮動する樣の哀なりしよ、忽ち見る落花の幾片、白々と小徑の影を流れ來るを、思ふに川上に花のあればなるらん

小徑の稍爪先上りになりし所より、田は盡て畑となりぬ、麥の穗の三四寸のびたる影を、農夫賤の女の手拭を打被りたるが、彼方此方とゆきかひながら働く姿、胸の邊より上のみ見ゆめり、我も叉麥圃の中に半身をかくして、其小徑をゆけば、忽ち麥圃を出離れてとある往路へ出でぬ、路は彼方なる一小村に通して、鎮守八幡の社頭に望めり、麥藁家根の農家幾軒は、喬木の蔭に居を占めて、四方の靜閑を樂しと顔に立てりしが、春の霞は淸しげなる若葉の林をこめて棚引けり

我は八幡の社内を過て小山の一角にめぐり出ぬ、と見れば其處に朽たる木の柵をめぐらして牧場を搆へ、傍に一棟の小屋をしつらひて牛を畜へる牛乳屋ありけり、牛の影の牧場に見えざるは、未だ小屋より牽出さゞるものにや、折々小屋の中に於て、ことん／＼といふ音の響くは、其蹄を以て板間を踏むにやあるらん、重家の家根より烟のしめやかに立昇るも哀なりけり





中島末治君は、同志社出身の秀才なり。余と在學の日を同ふせざるも、素より同窓生の因緣あり。

君の夫人は、故山崎爲德君の令妹たり。余未た相識を辱ふせざるも、故山崎爲德君に對しては、同志社在學中、一日の師たる誼を荷ふ。

過る日、其の令娘を悼むの一文を寄送せらる。君天性最も情感に饒む。今や人生最悲の境遇に觸着す。其の一字一淚、多讀に禁へざる、亦た宜べならずや。

嘗て『國民の友』に掲げたる、浮田和民君が、其の亡夫人の傳と、其の趣きを同ふし、其の情を同ふするもの。眞情は至文なりとは、余是に於て此れを見る、文字章句の巧拙の如き、固より論ずるに遑あらず。

乃ち塚越君と謀り、之を本誌に採錄す。要するに江湖の同情に訴へて、聊か君が夫妻の愁を分ち、其の悲を慰めんと欲するの微衷に外ならず。

九月四日　　蘇峰生

我娘

中島蘇泉

涼風の如くに來り、涼風の如くに去る、彼女が七年四閲月の生涯は竟に安くに行けるや。若し猶存らへたらんには我娘の事を親の口もて語らば世の物笑ひの種なるべし。去れども彼女は最早斯世にあらぬなり。最早父が傍にもあらず母が傍にもあらずして獨り神の御國に旅立去にしなり。已に亡き數に入りたるものゝ事にしあれば、彼女が爲めの嗚呼の繰言も、今は世の人も見許るし給ふべし。

思ひ回せばかの飢を感しては呱々として啼き、乳房に憑りてはすや〳〵として睡りたりし彼女が、其昔此の開きたる大氣の中に其初聲を放ちしは、去ぬる明治廿年の三月十八日、昔ならば四つ時ともいふべかりし頃なりき。山秀で水清き京都鴨川の東、さる殿上人の嘗て其時めき給へる日にしつらひたまひし閒雅清寂なる別莊は、實に彼女の爲の產蓐なりしなり。此時獨り隣室に坐して希望と懸念とに包まれつゝ思ふともなく思はぬともなき一種の言ふべからざる惱みに鎖されたる父が、其初聲を聞と共に吐息吹まじりて漏したりし微笑の如何に無量の嬉しみを含みたりし乎を知るものあるか。

幾尋となく深き水底を探りて得と聞くなる眞珠、その眞珠にもまさりし苦みと氣遣ひとに由りて擧げたりし我が珠は、生れにしといへる私語を聽く間もあらで擧げたる初聲の

はやきは…果して彼女なりしなり。

初子は女を好しとすとかや、邦俗に一姫二殿と云ひ、異國にては

"First the Daughter, next the Son,
And the world is well begun!"

と云ふと聞く。

取上げたるは八十餘の老嫗にて、維新の前はやんごとなき御內にも出入し、今の上々様にも遙に手を添へまゐらせしものとや、新らしき學理をこそ知らね八十年の經驗は流石なりしと傍にありたる婦人達も許しあへりき。

兎にも角にも一年足らずの間案じくらしゝものゝ平產したることとなれば、一家近親の歡ひ言はん方なく、細もて束ねたる奇數の鰹節を贈るもあれば、毛絲もて編みたるものを賜ふもあり。それより六日垂とかいひて祖母が志にて產婆に種々の延喜をなすなど、一家は彼女の爲に其光景を一變したりき。

祖母の名を松といへるに、其孫なればとて彼女の名を松枝と命じぬ。

斯くて三四週を經て會堂に連れ行きたるに、說敎の後ベンチよりベンチに抱き渡されて堂中を巡禮しぬ。去れども國敎國の如き先例の定まりおるにあらねば、別に洗禮をば受けしめぬ事となしたり。

春より夏に移る頃に生れたる兒は、仕合ものとて、育ち易く又育て易し。着物は次第に輕くなり行くに、子供は次第に重み行き、何時育ちしやは知るべからざれども、乳を呑みては睡り、睡りては覺め、覺めては笑ひ、又啼きなどするが中に、はや半年にもなるものから、彼女は頭も手も胴も足は瀰遍なく肥太りぬ。其温かき手の可愛げさよ。何處が父に似何處が母に似たりとは定かならねど、何處やらん似たる處あるも憎くからず。

此の何の憶する所もなく圓やかに見張りたる眼のあざやかさは、彼女の心に一點の僞も一點の曇もあらねばなるべし。

其秋一家北越に移住し、十日の間陸路を海に沿ふて走るに、彼女は車上にありて祖母の膝上に置かれ、越山の嶮崖、能州の眺望に對し、珍らしき自然と相見て相笑ふのみ、親不知子不知と聞ける難所さへ、親子車を連ねて快走し去りぬ。

斯くて一家は新潟に着き、二年の夏冬をば此處に過ごしける。去れば彼女が初めて覺えたる言葉は北國方音を混へき。何時しか彼女は其可愛ゆき翫具の所有權を主張して、『これは松ちやんのがんだ』と叫び出すやうになりぬ。誰も知らぬ間に箸持つこともならひぬ。

此間に久しく彼女と共に在りたる乳母は故ありて東都に赴き、又次の男兒所謂 Next the son

も出來しことゝて、家中に子女の支配に關する分業の必要生じてければ、彼女は常に父に伴ふて臥し、父をして彼女に向ては半母の役をなさしめき。從て彼女も亦父を母の如くに慕ひたりしも、異日の愁を增すの種なりけり。

其後父は嘗て彼女等を殘して京に入ることありしが、彼女は一日ランプの傍にマッチあるを見て『マッチはランプのわき松枝は父樣の處へ往きたい』といひたりしとなり。斯る些事さへ彼女があらずなりたればこそ語り草ともなりたるなめれ。之を見聞きたる母は成長の後の彼女を文才あるものならんかと喜びたりしも、親の慾目ぞかし。

又此頃家に二人の女學校敎師宿りありて、時々琴など弄ばるゝものから、彼女が音樂讀書などに關する好愛心も誘出されしかと覺しくて、彼女は只管に之れをまね、敎師達の他出せし時など琴の傍に膝行し寄りて之を掻鳴らすに、手の屆かずして其さまの可笑しさ覺えず傍に仕事しつゝありたる母を微笑ましめし事もありしとなり。

而して此頃より彼女はいたく毛絲を編むことを好みたりしが、類ふは女學校育ちの母より遺傳したるなるべし。

彼女が二歳半になりたる時、一家は又も東都の麹町に轉居しぬ。轉居の初は親族近隣の江戸つ子と遊びて笑はれたりし彼女の越後音も、久しからざるに東京化しける。而して

彼女は早や其小さき弟に己れが愛するものを配ち與ふべく他愛なき姉樣口氣を漏すに至りぬ。『あたいはいゝよ。坊やにおやりよう』と。

嘗て父病ありて數月の間出勤もせずにありたることありき。腦病か不平病か醫師も自身も判斷に苦む程にて、一日懊惱に堪へず、臥床の傍に遊び居たりし彼女に『お前を連れて冥途へでも行かうか』といひしに、彼女は眼を圓くして、『冥途に狸が居ますか？おとうさん』と叫べり。其樣如何にも可笑しかりし故母も來りて涙を流して笑ひ、父の懊惱も忽ちに消失せて、遂に心地すが／＼しくなりにき。

此くの如くして罪なき月日は、彼女の爲に迎へられつ、送られつ、彼女は今は一弟二妹の姉となりける。自家の物をば分ちて與へ、欲しき吾儘も口に發せずして眼よりこぼす、かゝる忍耐の苦みと甘みとを學び初むるも、亦浮世の習かや。姉さんだからとて敬上せられて、子守りの代りに使はるゝも痛はしといへば痛はし。

東京の子供世界に伍せらるゝこと一年にて、彼女の家は又もや西京に引移されぬ。

富士の山、大井の川、五十三亭のながめも、彼女は滊車の窓の裡に父母に伴ふて何心なく過ぎ、生れし處に歸ることとていそ／＼として無邪氣なる喜びに滿ちて見へしも、思へは彼女が此の喜びは徒らに其身を故鄕の土に埋めんがための喜びなりしよ。

明治廿五年、即ち其滿五年となりし時彼女は其弟と共に幼稚園に通ひぬ。唱歌と細工物

とは家に歸りても彼女は好みて之をなしぬ。

而して父の多病なるとは、彼女が小さき胸をいたましむる端とやなりけん、父の頭重くして朝起き出でざるときは、彼女はいろ〳〵に起さんと勉めたることもありき。病蓐に膳を運びなどして先を爭ふが如くにいそ〳〵喜ひてなすさまはや女子は女子らしく見えたりき。

二十六年の春より、父は彼女と母と彼女の弟妹とを殘して東に來りぬ。彼女はやがて幼稚園を卒りて、尋常小學に入り、間もなく片假名にて父の許に書を送り越したること再三なり。一字一字鳥の歩の跡をかしきも、今はあだなる形見として物思の種となりぬ。三月の試驗に彼女は一等賞を得ぬ。

光陰は此の十九世紀の末に於て特に疾きかと思はるゝばかり、彼女も早や七つとなり、明治廿七年は已に春を齎らし來りぬ。父の病も今は跡なくなりたれば、小さき物なんど折り〳〵贈りなどし、夏の休には全家幸福なる團欒せま欲しく、只管に待詫びて其日を過ごしたりき。

然るに彼女は少しく病を得たりしも、生來健かなるものゝことゝて母もさせる氣遣ひもあるまじと父にも報せず。それより今日は癒なん明日は癒なんと思ふに違ひ、稍重り行く樣子なればとて、父にも斯くと告げ越しき。父は此時相洋の濱の鐵艦の繫げる横須賀に

ありしも、日々の勤めの事しげければ、徒に郷國の天を望みて獨り胸を焦すのみ、此身は竟に思ふに任せざりけり。

斯くて少快との報もありたれば、いさゝか安堵はしたりしものゝ、猶兎やかうと思ひつゝけつゝありしに、五月二十七日午後に電報來り驚かせり。松枝危篤！

今は爭でか寸時も猶豫すべき、直ちに病と稱して暇を請ひ、限りなきの心配を載せもちつゝ滊車西に走りて、門の戸明くるも心せきて家に歸り見るに、年餘の喜を一時に揚げて叫び出すべき彼女は、病によわりて微笑みつゝ涙を浮べぬ。唯例の毛絲を結びては解き解きては結びつゝあるのみ。

解きては結び、結びては解くなる毛絲のそれにはあらねども、傍に打見る親の心は先づ結ぼふれたりき。斯くて次第に衰へ行く彼女が病は、腸結核とやらんいへるよし兩三の國手は診斷しぬ。

此夜彼女は父と俱に食せんを請ふ。乃ち彼女の病蓐の側に坐して共に食せり。後に思へば是れ實に最後の離食なりしよ。

赤十字社の奇特なる一看護婦を賴みて、母と共に介抱させつゝありしに、折柄或る博愛を旨とする病院より、外國教師の車もて入院させてはと態々來給ひしか、彼女は打泣きて我家を去るを好まざれば、其儘になしぬ。

此時近頃歸朝したりし大坂の叔父も來訪しければ、彼女も常になく喜びたりき。父は彼女と共に在ること一夜にして、公務の止むべからざれば再び家を出でゝ再び相州三浦の海邊に來り、案じ暮して一月も過ぎしが、六月廿六日の午前第一時半、父の寓所に『ウナ』と書ける急電來りぬ。駭き覺めて之を讀めば、嗚呼余は此時の余の如何なる余なりしかを今も猶之を說明する能はざるなり。電報には斯くありき『マツエイマシセリ』。斯くて東天已に白ふして、余は惘然として二階の戶を開きつゝ西の空をながめてありたる余自らを見出しぬ。寓舍の主人曰ふ、『一番滊車にて往き給ふや』。曰く、『否、死せる女よりも生ける生徒は大事なり』。

*　*　*　*　*

ルーテル其女の死したる時歎じて曰く、『此の精靈や何處にか往く、翼を得て去て蒼天に飛揚し、かの燦然たる列星の間に行く乎』と。顧ふに彼女の無垢清淨なる精靈は、飛で神の懷に歸合したることや疑ひなし。猶何をか悲むべき。去れども彼女の母は未だ遽に之を斷念めがたかりしならん。未だ玉の緒の絕ひせぬうちは一口も多く食し、少しにても笑ふことある時は、全癒の日も遠からじと思ひしならん。事きれても柩の蓋の鎖されぬ間はもしや睡れるにはあらざるかと思ひしならん。『おかあさんー』の叫びの聞こゆるやとも思ひしならん。又野邊の歸りに外より入り來れる他の子

女の後に彼女もあるやと思ひしならん。將た外面の音は彼女かと駭けば夕立の颯と降り來るに心付きし事もありしならん。去れども彼女は終に在らざりしなり。曾て四人に配たれたりし愛の分量は、今は三人に分ち與かるべくなりしぞかし。

* * * * * *

大坂なる叔父は父に代りて彼女を西京東山若王寺の新島襄先生の墓下、山崎爲德伯父の墳側に葬りぬ。時に明治廿七年六月第二十七日。

後一週日横須賀寓樓にて記す。





貧しき小學生徒（上）

横山夢膓

春は那處を眺めても心地のよきものぞかし、まして此處は田舍なるをや。都會と違ひて下駄踏み鳴らす音の騷がしく、砂烟天にたちて正面に眸子を襲ひ來る心配もなし、氣は濶く心寛かに、春の自然を味ひ得るは唯だ此處――神の不用意に粧飾せられし田舍なりかし。看よ、東南の一面屏風を立てたらん如き山又山を、平地には今を盛りと櫻の花の咲き亂れてあれど、山の絶頂は夕日の名殘を止めて、また消へやらぬ雪の白皚々として、日に映じながら矗然として蒼天に屹立てり。山の中央を微かに白く帶の如くまとへる雲の如何に淡くして且つ優なるよ、見渡せば西の隅の方にも之と等しき淡雲の球の樣な形せるが三ッ四ッ見ゆめり、他は蒼天一碧、恰も布巾にて拭ひたらん樣な天の色なり。風はそよと昨日芽を出したらん歟と思わるゝ斗りの軟かな若葉を扇ひて、菜花裏に夢を結

ぶ蝴蝶の羽がひを微揺がし行くのみ。試にふさ〳〵と柔かげなる若艸の上に大の字形に寐ころびて、眼を蒼空に注ぎながら、心の儘に休らへば、身中の肉も爲に融ける歟と思はる〻好天氣なり。松杉のしげる森蔭に藁葺の家の彼方此方に見ゆるが、其庭には木槿や椿の花の打ち交りて咲きながら、杉の根方の薄暗き處に椿の一と片二た片落ち散れるも床し。ふと耳を傾くればちよ〳〵と囀る聲の聞ゆ、其は何と名くる鳥にやあらん、優しき音聲にて向ひの森に歌ひ行くは黄鳥ならずや、何故に我傍に來ては鳴かぬ歟や。此時ふと頭の上に落ち來るものあり、仰ぎ見れば小さなる蝴蝶の翩々として舞ひ下がりしなりけり、あ〻春の景色の面白きよ。

此處は越中の國にて戸數の三四千もあらんといふ一都會より、更に十餘町も離れたる本郷村といへる寒村にて、家數の四五十許ある田舍の田舍也。酒、酢、醤油、石油、或は、蠟燭、線香、糸、針、など購ふにも一々町へ出ねば用の便ぜざるは不都合此上なけれど、酒屋へ三里豆腐屋は五里といふ片山里に比べると、なんの此處は極樂天上界。別に町へ出るにも股引艸鞋の面倒もなきぞかし、暮を見掛けて着の身着のま〻一寸町へ行ッて來ようや、艸履をツひと爪先に突かけ、手を懐にしながら、悠然出掛けて埓明き得れば、村と云ふも其實町も全様なり。尋常小學校は隣りの村に四五ヶ村合併のがありて、此村に建てられてないのは、チト肩身狹けれど、なんの是れ皆な共同の小學校なりと聞けば、

夫程己が村の不名譽でもなし。高等小學校へ通ふは町まで出ねば仕方なけれど、是とて此村斗りにないのでなく、何の村にもないとなれば町だけは別物、他の村の者共に自慢せらるゝ心配もなし。それにしても町と云ふ處は羨ましい、郡役所もあれば警察署もある、裁判所もあれば收税局もある、病院、會社、郵便局、倶樂部、有るぞ〳〵立派な建物が澤山あるとぞ、第一高等小學校のある斗でも町は豪氣ぢやと、每朝高等小學へ通ふ兒童の一人、路傍に立ちながら、苗代の見事に生へ居る中へ、何故ともなく小石を投げ込みながらいひしとありと聞く。朝より大鼓の音の全村に鳴り響きて止む時のなきは此日本郷村には一村の祭禮ありと知られたり。流し籏數十本社前に立てられたるが、折々風の爲に飜るめり、其中には紅ひのもなり白ひのもあるべし、中にも遠き樹の間より際立ちて見ゆるは紅い籏なりけり、地には風ありと覺へねど、籏のゆらるゝ度に時々其文字の書かれたる方か、表裏を爲すを見れば、空には幾分か風ありと見ゆ。町の十文菓子屋殿の此天氣と此祭節とを的睨んで一儲せずんばあるべからずと、朝まだ小供の眼醒ぬ頃より宮の前に陳取り、臺を出して十四五組列をなして扣へ居るなり。此日彼等の儲け幾程あるべきや、小供の財布の輕重によりて、此人たちの儲けに加減あるもおかし。哀や村の小供、町の小供なりせば旨い物食ひの爲に一日五厘銅貨を遣ふとも稀ならねど、村の小供は日に文久一文遣ふのも異數にて、多くは十日も錢の顔見ずに仕舞ふと例なる

べし。唯だ彼等が格外に錢を遣ひ得るは、正月と盆と春秋二度の祭禮の時斗り、また佳い着物きる事の出來るも此時と、祖父樣の十年忌に當る當日町より坊樣の御出でなさる時位に過ぎざるべし。左れば盆と正月とを除きて、第一の嬉しい日なる祭時といふとなれば、十歳以下は十文錢十枚、以上も二三年前なりせば天保錢、現時は天保錢なければ、一錢銅貨二枚は遣へる、天下是ほどの嬉しいとのあらんや。全村四五十戸、其中一戸に二人の兒童ある家もありとすれば、其數凡そ七八十人はあるべし、それに池村の親類縁者より遊びに來て居る小供もあれば、都合合せて百幾十人の小供の喜び、樂み、若し世に極樂の圖を書きたいと思ふ人あらば、此日の遊びを見せてやりたし。大鼓の音の朝より鳴り響き居るは、神主の來て鳴らし居るにあらず、小供の行きて代り〳〵鳴らし居るなり、宮は流石に祭日の事なれば、常の如く蜘蛛の巣をして縱橫に網を造らせては置かす、綺麗に掃除せられて源平八島の合戰、川中島の合戰、牛若辨慶五條の橋立合ひの額面なんど四方に掲げられたるが光彩燦然たりき。旗竿の立てられたる根方の日當りに、晴れ衣を着かざれる八九歳の小供大勢、頭を集めて俯向き居るは、そも何をして居るのやら。此方より餓鬼大將らしきが驅け來て、大鼓敲く捧を奪ひ取らんと意氣込み居れば、アラ可憐、他の小供は今やお山の大將に虐待られて、可愛らしき顔に時ならぬ雨を來たさんず雲なり、石の鳥居の根許に重きは目方二十六七貫目、輕きは十七八貫目位の大き

な石、五ッ六ッ頽倒がり居るは何の爲ぞや、村の若い衆が腕力試めしせむとて置かれたるばんもて石(力石)ならん歟、此石を動し見むとて小さき手を兩邊に掛けて、曳けやくと叫びたれど其動かないのに呆るゝ小兒の樣子可笑し、　全村何となく浮き立日も午後の三時頃になれば、鷄の鳴き聲も大鼓の音に埋められて、ち、家々の女房、娘、婆樣に到るまで襷あやどりて厨さわき忙し。宮へ行かんとてか、十二歳より十四五斗りの小供五六人、森の木の間を拔け出でゝ、畝路傳ひながら、何事を歟語り興じつゝ來れり、孰れも今日を晴れと此頃流行り來りし二子縞の袷の綺麗なのを着、帶の結も特に其母樣達にして貰ッたかして、かいのくち結に結べるものありき、中にも學校の生徒らしきが白金巾の兵士帶して意氣揚々として行くは一際目立ちて見えぬ。閾の外へ出るまでは着物を汚ごしてはならぬと、母親に注意せられて、又歟と思ひながらも平常着脫いて、晴れ衣に着換えて見ればハテ、其丈でもハヤ無條に嬉れしいのなり。出で行く我子を表口に送りながら、其後ろ姿を眺めて、喜べる親の情を、萬分の一ほども酌むとは知らねど、扨て外へ出て見れば、何時になく氣の晴々せらるゝも、宮に大鼓の音に浮かるゝ精のみでもなかるべし。宮の前には菓子屋が澤山出で居る事、昨年の祭には雨が降りしが今年は上天氣なると本年の火祭(一月二十六日)に大鼓を張り換へたが能く鳴ると云ふと、祭が來たので學校の休まれたが何より嬉しいと云ふ事など語り合ひ、噂

し合ふて、此村の一番廣ひ路の曲り角の、雨に晒されて首のなくなりし石地藏尊の邊へ來たりぬ。此時彼等の中の盃ちやんと云ふ小供、など立どまりて、中での大將と見ゆる椀ちやんと云ふ年重の小供に向ひ、ヤアあれ御覽彼方へ吉田が一人町の方へ行くぜ、彼奴め何用しに一人で行くのだろう、何時も悄々下ヲり見てあるく、生氣地のない奴だと言いぬ。彼奴め此の祭に町へ出るたア奇怪しい、盃公聲掛けて義公メを（吉田と云ふ兒の名、學校へ出て居るを以て常に其姓を呼ぶが慣と見へたり）呼で見ろ、と餓鬼大將の椀ちやんが命令皆まで聞かず、盃ちやん聲張り上げて、おい吉田か、何處へ行く、おうい吉田と呼べど叫べど返事なし。聾か、彼奴一心に下地ヲり見てあるくから聞こへぬのだ、やい聾やい吉田ア、人が何處へ行くと云ふのに何故返事せぬのだと叫びぬ。此時遠くより家々の表口を見舞ひ歩く獅子舞の笛大鼓、小供のはやす聲に和してどッとヲりに聞えたり。

（中）

一年に二度より上なき祭の中の、其一ッなる春の祭なれば、家外は人の歌ひ騷ぐ聲喧しく雪駄や下駄の音の絶ゆるとなし。面無千鳥でもして浮かれ戯むるゝにや、斷間なく小供の叫ひ聲聞えて八釜し。孰れの家も既に酒宴でも開きて酣なるものか、なまめく節の聲やさしく、麥搗の聲は手に掬る如く聞えけり。扨も奇怪なり、此家計りは何とかなせし、日既に暮れたるに火も燈さず室内寂然として人なきが如し、家を圍める森の梢に、

塒を求めつる鳥の、折〱羽ばたきする音の聞ゆるも淋し。ホヲ向ひの家にてはまたも數人の人の打ち交りて麥歌高く歌ふあり、町にて購ひ來れる酒は幾升ぞ、平常なりせば自家用料の爲めとて貯へる濁酒にて、あの歌も出づべきなれど、今夜に限りては村の衆が飲む酒も何時もの濁酒にあらず、肴も何時もの肴にあらず、常は鰯若くは鰺鯖位が頂上なれど、否、夫れも膳に上るは異數にて、通例は如何なる大家にても、朝は粥に香の物、晝は仕事に出て居て辨當なれば無論菜と云ッても梅干か澤菴、夜食は大の奮發として魚なれば鰯、精進なれば豆腐の味噌汁が關の山なれど、祭の日は左にあらず、此日は歡天喜地の大祝日なれば、日本帝國の大祝日なる憲法發布式、若くは皇上の銀婚式よりは春秋二度のお祭は、渠等の爲には大吉日なれば、此夜は鯛、鰈の如き上品なものも、慥に鉢の上に出て居るなるべし。德利の幾本が算を亂して其邊に顚倒がり居れば、他村より來れる客人たちも、始めの中こそ危坐まッて居たれ、醉の廻るに從ひて、主人より御免の出ぬ前に、ちよッと來なせの無禮講、早くも膝の壞るれど、誰れとがむるものもなき、是が田舍の酒宴なり。芽出たいものは蕎麥の種三角重なる〱、芽出たいものは芋の種末葉は開く元に子が出る〱と謠へば、喝采湧くが如く、拍手の音の夥しきは、恰も秋の祭の社前の花相撲で贔負角力者の勝利を喜ぶ騷ぎに似たりき。或は鈍調聲張り上げ下拏踊はすもあれば、或は笑ふ聲高く傘踊を演ずるもあり、或は踊り者の足に觸れて、

席上の德利をくつがへせば、坐上は時ならぬ酒の海、大騷動の持ち上りて、一同立ち上るも時の興なり。馬鹿らし下らぬ事に皆の衆を騷がせ申した、サア飮ましやらぬかと主人銚子を取れば、此處は會釋はぬきの離俗界、何の區々遠慮を曰ふものあらむや、直ちに應ずる客人、一人が杯取れば、ハヤ太郎次の納戸に鳴るは何んぢや、十二の瓶の酒の湧く音〳〵、誠に天下の春は、今ま此村に集まつて來た歟と思ふ斗りなるに、此家斗りか寂寞として人の聲さいする樣子なきは、扨ても不思議のとならずや。抑も此家は誰の家ぞ、此家こそ晝間椀坊や盆坊に呼はれたる義坊の家ぞかし。圍爐の傍に悄然と坐りて、首うなだれて居るは彼兒の母なり。爐には燻べ殘りの火まだ消えやらねど、火勢漸く劣へゆきて、柴も殘り少なくなりたれど、更に他の柴を加へて火勢を熾んにせんとする樣子もなく、其劣へ行くまゝに任せて之を見つゝ、頻りに何歟考え居るなり。家の內は黑白も知れぬ闇の暗なれば、其樣子は判然せざれど、微かに照らす爐の光にすかして見れば、爐の邊には疊の敷かれてありながら、蓆が其上の毛氈なりき、思ふに其毛氈の上には泥のまゝなる足痕の、班にこすり附られたるもあらん歟、自在に釣せる茶釜には、藁灰のこびりつける所もあるが、何時磨きたりしものなるにや、固を見せて都の人を呆れさせたし。隅の方に見ゆるは藥鑵なるべき歟、是も藥のしみ附などありて、隨分と古いものなり。襟の裡へ首差し入れ居たる義坊の母、義は町へ出たが何して居るのやら、ま

だ還て來ぬが、また何時もの樣に朋輩に、虐められて居るのではないか、あの兒も與に不幸な子だ、祭時だと云ふのに餘所の小供の樣には遊ぶ事も出來ず、一枚の晴れ衣も着せてやる事の出來ぬとは、あゝ何たる因果だらう、それに四五日前より癪が起りて、此身の不加減、幾程不如意だとて身躰さへ健康なら、また仕樣摸樣もあらうものを、何たる前世の業ぞ、あれあのとほり他の子供は、立派な姿をして、嬉しそうに外を飛んで歩て居るに、家の義は母親のない子歟何歟の樣に、平常着のまゝ姿見すぼらしく、此祭節に往還歩かせて置くとは、あれがまだ女の兒でなければこそ、別に不機嫌な顏もせず今日も町へ使に出で往きたれ、若しあれが女の兒にてあらうものならば、幾段此上心配なるやらむ、夫にしても義坊は何とせしやらむ、と呟きつゝ四方を見廻せしが、流石に女氣の心よわく、思ひ餘りしものなる歟、ぼろり〳〵と膝に淚を落としぬ。此時艸履の音表口に聞えて、急ぎ足にて入り來りしは、今まで母親の俟ちに俟ちたる義坊なりけり、「母樣――と一と聲叫びしが、家の暗きに喫驚せしものゝ如く、今度は一層聲を高めて、母樣――暗いではないか、今ま還ッたと曰いながら爐の傍へ來る。此日暮まで何して居たえ、大變子心配して居たよ、お腹も減ッたらう、迅く御膳食べたがよい。アイ今ま食べるよ、それよりまあ行燈に火を點けて、と立つて隅の方に行く、アッお前の事思ッたり何歟して居て、行燈の事忘れて居た、草臥れたらうが、何卒火を點けてお呉れ、と母

は氣の毒がりける。隅の方より義坊母の方をかへり見て、まだ父樣は還らないのかへ、如何したのだらう、母親は自在鍵を上けながら、其中に還へらッしやるだらうから宜やね、其よりまあ藥は二錢で買へたかゑ、足らないかと思つて心配して居たよ、といふ、義坊は愛らしく、あゝ買へたよ、入り口の町の藥屋では、二錢の方は切れて、四錢でなければないと云つたが、次の町の藥屋へ行つたら、調度二錢のがあつて、大變に嬉しかつたよ。其は可かつた、早く御膳をおたべ、だつて母ちやんは食べないのか、己ばかり食べるのは嫌だ父ちやんも還つて皆と一同に食べなきあ嫌だ、そして母ちやんまだ腹は減らないよ。此時火も點されたれば、今まで暗かりし室の内も急に明るくなりぬ、見れば哀れなる此家は奧の方に納戸のあるばかりにて、外には一つの坐敷だもなし、室内一面に藁に敷かれてあるが、其中にも隅の方なるは破れて見る影もなく、爐の邊なるはいつ敷き替へしまゝなる歟、破れた處に高低あり。此處と納戸とを仕切れるは障子なるが骨も折れ、紙も破れて、春なればこそ斯うして居らるゝなれ、冬ならば、あの風の穴より、嘸覗き風の入るとならむと思はれぬ。義坊は手を膝に置きながら、折くべも柴も生木のありてや燃かねて、ぶす／＼と煙ぶり立つをけぶしと顏を背けつゝ、家外を歩く人の足音、樣々の人の謡ふ歌或は大鼓の響などを、耳をすまして聞き居たりける。母は其姿を眺めながら、お前如何して今日はあの樣に遲かつたのだゑ、また誰かに虐待められて居

たのではなかつたかゑ、と突如に尋ぬれば、義坊は愕たものらしく、此方をふり向いて、母ちやん何を曰つたのだゑ、母が何を曰ひしかトント譯らさりし樣子なり。母は再ひ今日誰歟に虐められはしなかッたかへと、繰り返しながら、ほろり涙を落しぬ。義坊は此樣子を見て、何故泣くのだい、母ちやんが泣くと己も悲しくなる、と何を思ひ出したか眼の端を紅くするも愛らし。母親はしげ／＼と小供の顔を眺めて、誰が虐めたへと、更に繰り返して問いながら、頭を下げて蓆の破れ目を見つめつゝ、涙を啜るも哀れなり

（下）

此義坊が村の學校を卒業して、町の學校へ入りしは昨年の秋の頃なりき。町の學校へ出させる時は、痛く村の輿論囂しかりければ兩た親は大に之に難儀したとかや。己が仲間では書物など讀むは要らぬ事、葉書が書けて人の名が讀めればそれで澤山、町の學校へ出し、一月に十五錢の授業料取られるは、贅澤此上なし、學校へ出させる暇があるなら、親主の手傳させた方が、どれ程片腕になつて爲になる歟、孫右衛門（義坊の親の名）は樂といふを知らぬ阿呆の隨一なり、と辨難攻撃をしたりといふ。是といふも村は町と違ふて、一村の人總て親類歟緣者の樣に交際ふ故にて、其調子塩梅は、恰も町で向ふ三軒兩隣が、遠き親類より親しき如く、一村擧な是なればなり。左れば今ま孫右衛門が、我兒を町の學校へ出せしと聞て、人の頭痛を己の疝氣にして病む村の者一統、騷ぐも固より其筈ぞか

し。義坊の兩親も村の輿論の攻撃には、ほと〳〵倒惑して高等學校へ出すとは、もう斷めにしやうとまで相談して、其旨義坊に物語れば、此兒はまあ何として、是程學問が嗜な事やら。町の學校へ上げて被下と手を會わさぬ斗りに願ひける。扨我兒の熱心なるを見れば、そこは親心なり、嘗て町の旦那が、今の世の中では、學問がなければ駄目だ、と言わッしやつたとや、又た自己が幼ひ時寺小屋へ行くのを懶がりて、手習ひせざりし罰は的面、手紙が一ッ書けぬ不都合を想ひ出したり、又若しも役所から明日手前を殺すといふ文面の布令が來ても、字が讀めなければ平氣で居なければならぬ、眼ありて見えぬ文盲では眞個に如何樣間違ひが起らうも知れぬと、我子の行末を見れば、三度の食を二度に減らしても、何卒學校へは出してやりたく、其に自分達の身の上から言つても、せめては此兒に學問させて、此貧乏の暮を、昔し語りとして見たい、と改めて女房にも相談すれば、子に甘ひは母親、世人が何と曰わッしやらうが、一月に十五錢は困難からうが、私も精々骨を折つて、內職をして手助をするから、寧そ思ひ切て町の學校へ出すとに爲されと、却て父親の決心を固めさせたる、此處に於て其夜一夜、二人は全じ事を繰り返して相談したるが、其明の朝漸く事も定まりて、明くる日より義坊は、高等小學の生徒となりけり。然りし後も折々は此時の事言ひ出すなり、あの時の義の嬉しがりし事、今も尙ほ眼に見ゆる樣なと母が言へば、父も負けずに並べ立てゝ家庭の笑ひ艸とな

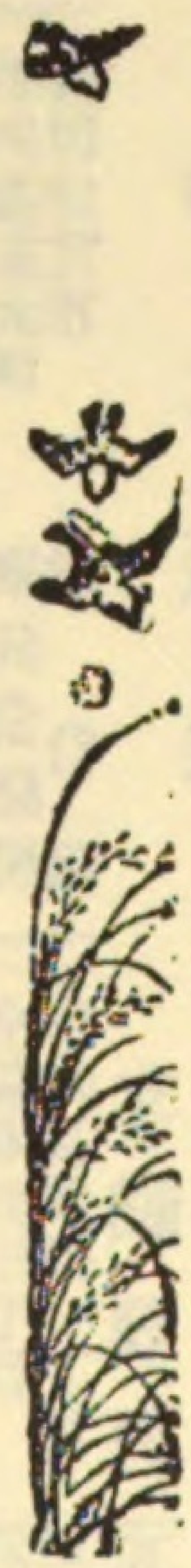
る事幾度ぞや。殊に兩親の喜びは義が學問大好にて、然も勉强の功空しからず、學校にては、席順何時も三番より下がりしとなく、就中算術が大上手にて、學期中答案を間違ひたとなければ、敎師も他の小供より別けて此兒を可愛がらるゝといふこと、母が自慢の種なりと云ふ。

閑話休題。義坊は何故に還りの遲かりしや、誰かに虐められはせざりしや、と泪片手に尋ねられて、何と返事を爲してやよけん、暫くは默まつて何事も言わざりしが、其中少し顏を背けて、くす〳〵と獨りに泣き出しぬ。母は見るより案じられて、まあお前如何おしだ、誰に歟虐められたとならむ、泣かずに曰ッたがよい、と慰むる如く母が言へば、今は義坊耐えかねた歟、聲張り上げておろ〳〵淚。あの椀公メ己を此村の者でない、此村の者でないよ何故此村に居ると曰つたと、僅かに言葉を洩らしたりしが跡はまだ淚なり。母は小膝を進ませて、更に問ひ慰むれば、義坊は漸く淚をふき、したたる涕をすゝり込みながら、先き母ちやんのお使で、町へ行かうと思ひ地藏樣の曲り角までゆく、と向ふから五六人の朋輩がやつて來た、其中に椀公も居たから、知らない顏をして行てしまわうとしたが、幾人もして呼んだから行かなかつたら、また虐められるだらうと思つて、彼等の傍へ行く、と椀公メ、手前の家は祭でないの歟、と尋ねた、喋舌るのが嫌だから默まつて居たら、更にまた聲を掛けて何故何時もの着物で居るのだ、

何故佳い着物を着ないのだと、盃公も傍から嘴を入れるの、而して椀公メ大きな聲で、此村に居て祭りせぬものは此村の者でない、此村のものでない者が何故此村に居るのだと言ひやがつた、而したら今度は皆が尻馬に乘つて、種々の事言つて責めるの、餘り腹が立つたから、己は此村の者だ、噓だと思ふなら役場へ行つて見ろ、學校へ行つて見ろ、着物を着換へないのは、母ちやんが加減が惡いからだ。イヤ義公の家は貧乏だから佳い着物は着られないのだ、貧乏人の兒と遊ぶと貧乏が傳染る、と椀公も盃公も口を揃へて云ふものだから、皆も調子合せて、貧乏が傳染る、吉田の袖に觸るな、觸はると貧乏が傳染るぞと囃しながら、宮の方へ行てしまつた、あんな齒痒ゆかつたとはない、としやくり上て泣きける。聲は出さねど母親も此兒の一ト言を聞くたびに、玉の樣な淚を頰の邊へ傳はらせつゝ悲しみに堪へぬ樣子なり。此時此可憐兒ふと母の身の上を案じ出して歟、聲もやさしく母ちやん！藥服むで迅く身躰をお癒しよ、と云ひて母の顏を見上げぬ、母も我子のやさしき心にわれも嬉しく、見る〳〵顏色變はり、聲打ち上げて、可愛やと斗り我子の手を捉えて、暫くは言葉も出さず、落ち來る淚を、頻りに左手にてはらうのみなりき。漸くにして母は淚を止めて、嘸いゝ着物を着たいであらうねと小供の頭撫りながらに問ひき、其時義坊は頭をふりて、いや別に着る物は欲しくないが、如何かして迅く母ちやんの病氣が愈りて、二た月滯つて居る授業料が拂へれば、夫程嬉しい事はな

い、それから又算術の本も買つて被下れば、大變に嬉しいけれど、と言ひき、誠、小供心の頑是なさに、着物も着たし、甘い物もたべたしと願ふべきを、左樣は言はず、授業料拂つて被下、と願いたりしには、何欤理のなくてやは、其理由は是れより四五日前の事なり。役場の書記と學校の先生とが態々此家へ來臨ありて、懸幕鋭く、二ヶ月分の授業料滯らせしは、何たる不都合ぞと叱り玉ひぬ、此時母親は少々加減悪しかりしが、强いて敷居の近まで出て、頭部を蓆に摺りつけながら、決してなおざりにしたるにあらず、事情止むを得ざる仔細ありて、斯く遲なりし譯なれば、といろ／＼言ひ解き謝たれど、私の貸借とは譯柄違ふ授業料の事、猶豫は致し難し、是非四五日の內に納めざれば、兒供を退校さすべしとの嚴命。あゝ貧乏人の腹の內を知り玉はぬ方達、會釋斟酌のあらぬも理りなれど、去りとて圭角立てゝ言はれる一言一句、胸には針の思ひなるべし。其を傍で帳然聞ひて居た此兒、如何にをさな心にも、其日より學校で先生に顏見らるゝをつらしと思ひけるよ。左れば學校道具を取り揃えて、朝膳に向ひし時の樣子は、口にこそ現はに言ひ出さね、思案屈托の顏附なりき。別て一昨日の夕暮、雨のしよぼ降る空を臨めて、めそ／＼泣き居たるも、之れが氣になりてなるべし。嗚呼日夜不如意を喞つ父母の傍に居るなれば、小供ながらも斟酌遠慮の智恵が出て、餘所の腕白小僧の樣に、勝手氣儘を言ひ張る事なく、おとなしくして居る心の中、推し測られて憐なり。此時しも表

口より義ッ！と先づ我が可愛のゝ名を呼びてから、戸を開きて入り來りしは、此兒の父親なり（町へ出て荷運などするのが父親の職業）蹲き居たる母も小供も父親の聲聞きつけて俄に笑ひ顏、父ちやん！と我子の迎ふるも可愛ゆし、應と返事して、父親は爐の端に坐りしが何時になき機嫌な顏なり、我子を膝の上にかきあげ、髮を撫で上げてやりながら、今日は何時もより儲けが倍あつた、そら見よと懐より出せし金見れば、扨ても格外、此家にては近頃見たこともなき五十錢の大金なりけり。父親は自慢の鼻うごめかしながら云ふ樣、今日は旦那樣がお前の村の祭なれば、酒代をやらうとて貳拾錢多く恩惠された、其に一日分の賃錢十五錢、昨日の分共で三十錢、今のを合せて五拾錢、何と嬉しからう、サア今夜は祭が出來るぞ、義や御苦勞だが一走り町まで往つて、豆腐なりと買て來てくれ立派に祭をしやうから、と曰はれて母親も嬉れしく、今までの癪は何處へ行きしやら、身躰の不加減も忘れて仕舞つて、いそ／＼として勝手元へ起てば、濕つて居た家庭も俄に笑ひ聲の出て來て、見る／＼間に、親子三人打ち寄りて世間虛僞交らずの宴、





かぜのくすり大宰相

天下優等　登錄商標

七度煎

壹貼　定價金參錢
貳貼　定價金六錢

●主治効能●

●四時の引風●頭つうのぼせ○腹痛○中暑○吐瀉○下痢○不食○熱症一般○婦人血の道等に特殊の奇効を奏す

此七度煎を用ゆれば男女共腹部を寛げ血氣を環らし脾胃を調へ胸を開き飲食を進むる事一度御用ひありし諸君の知了する所なり

本舗製造元尾張國內海町　橋本新造

●取引販賣所

神田區外神田仲町　山崎帝國堂
淺草區並木町　岡田藥房
日本橋區人形町通　朝陽堂藥房
仝鎧橋通蠣売町　山田直次郎
仝人形町通堺町　松菊堂藥房

神田松富町　伴傳藏
深川區東元町　東元堂藥房
武藏神奈川仲町　松本綱五郎
東京日本橋上槇町　安川榮次郎
京橋區南傳馬町　小山儀右衛門

●其他有名賣藥店には取次販賣致居候新規御申込諸君は關東支舖へ御一報有之度候也

登錄商標

壹器三粒入　定價金廿五錢

驚天動地　安產三粒丸

奇絶　妙絶

姙娠の婦人服せば難產せず

此安產三粒丸は懷妊の御婦人方に必要なる靈藥なり世上難產の爲めに其一命を失ふものあれども此安產三粒丸を臨月に用ゆれば平常如何なる難產の癖ある御婦人方と雖ども安々と平產し母子共に健全を得る靈藥なり弊舖が年來多數の產癖惡しき御婦人より此靈藥の爲めに安產したる禮狀を受けし事實に多々なり貴婦人も見よ令孃も（未來の貴婦人なれば）見よ亦紳士諸君も之れを見て世の中に難產と云ふ事なきを欲せば速に之れを服用あれ亦たは服用せしめよかし

東京市日本橋區小網町四丁目四番地
支舖發賣元　百草軒　加藤品太郎

京橋區銀座一丁目　佐々木支兵衛
仝區銀座三丁目　松澤八右衛門
日本橋馬喰町一丁目　平尾賛平
日本橋通り四丁目　津村順天堂
仝兩國米澤町　大木口哲

橫濱伊勢崎町　西海喜兵衛
仝賑町　里見亭太郎
甲府市富士川町　小野藥室
遠州掛塚砂町　加藤太一郎

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　秀英舍印行